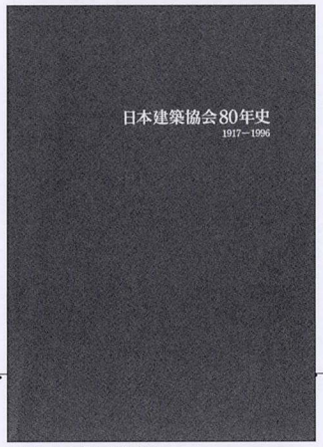
2010 7



Architecture and Society
建築と社会

特集/建築と石

日本建築協会



「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円

1999年７月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正６年３月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人 日本建築協会
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階B室
TEL 06-6946-6981　FAX 06-6946-6984

頒　　価　１部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」

A4判・240頁・並製本

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壯一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　静雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貴・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貴・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



「草創期の人々」より片岡安の項

会告

総会議決のお知らせ

平成22年６月18日開催の平成22年度第１回通常総会において、下記議案がそれぞれ原案のとおり承認されました。

・第１号議案
　平成21年度事業報告の件
　（詳細p２）
・第２号議案
　平成21年度決算報告の件
　（詳細p３）
・第３号議案
　役員選任の件
　（詳細p６）

＊６月21日付で退任の顧問、理事

●顧問
平岡　博　大阪市

●理事
井上　豊　大阪大学名誉教授
松村孝夫　関西電力㈱
好井康則　㈱フジタ
渡辺勝紀　㈱熊谷組
木村雅則　都市再生機構
佐藤友美子　㈶サントリー文化財団
髙嶋章光　西松建設㈱
野村　昇　戸田建設㈱

退任された顧問、理事の方には、長年にわたり会務遂行にご尽力いただきありがとうございました。
再任及び新任の顧問及び理事、監事はp６の会務分掌の表のとおりです。

通常理事会議決のお知らせ

平成22年６月２日開催の平成22年度第１回通常理事会において、下記議案がそれぞれ原案のとおり承認されました。

・第１号議案
　平成21年度事業報告（案）の件
・第２号議案
　平成21年度決算報告（案）の件
・第３号議案
　役員選任（案）の件
・第４号議案
　総会等の開催の件

臨時理事会議決のお知らせ

平成22年６月22日開催の平成22年度第１回臨時理事会において、下記議案がそれぞれ承認されました。

・第１号議案
　会長選任の件
・第２号議案
　役付役員選任の件
・第３号議案
　常設委員長並びに常任理事委嘱の件
・第４号議案
　理事の会務分掌の件

いずれもp６の会務分掌の表のとおりです。

評議員会議決のお知らせ

平成22年６月２日開催の平成22年度評議員会において、下記議案がそれぞれ原案のとおり承認されました。

・第１号議案
　評議員会議長互選の件
　三木敏男氏を選任
・第２号議案
　役員（顧問、理事、監事）候補者推薦の件
・報告事項
　平成21年度事業報告（案）の件
　平成21年度決算報告（案）の件

大阪歴史博物館「日本建築協会と関西の建築界」を開催

―㈳日本建築協会後援―

㈳日本建築協会は2004年６月に、大阪駅前第３ビルから現在のOMMビルに引っ越しました。その折、主に『建築と社会』誌の編集のために撮影した写真や集めた資料の一部を大阪歴史博物館に寄贈しています。
大阪歴史博物館は６月～７月にかけて、これらの資料のお披露目をかね、大阪を中心とした関西の建築界の歴史を写真や図面、建築部材などを通して振り返る展示を開催しています。
また関連行事として、関西に軸足を置いて建築とかかわってきた人々によるシンポジウムも予定されています。

会　期　2010年６月２日
　　～７月26日（月）
　　９：30～17：00
　　（金曜日は20：00まで）
　　毎週火曜日休館
会　場　大阪歴史博物館８階特集展示室
　　大阪市中央区大手前4-1-32
観覧料　大人600円、高大生400円
　　中学生以下、大阪市内在住の65歳以上は無料
出　品　約60点

■学芸員による展示解説
７月17日、７月24日。いずれも土曜日の14時から30分程度。参加無料。
担当：酒井一光（学芸員）
会場：大阪歴史博物館８階特集展示室

■シンポジウム（参加費500円）
「関西建築界のあゆみを語る」
パネリスト：
井須圭太郎（芦屋市立美術博物館学芸員）
設楽　貞樹（安井建築設計事務所常務取締役）
平田　雅利（平田タイル会長）
山形　政昭（大阪芸術大学教授）
司会：酒井一光（学芸員）
日時：７月３日（土）13：00～16：30
会場：大阪歴史博物館４階・講堂
定員：250名（当日先着順）



新大阪ホテル
外観写真
（大阪歴史博物館蔵・日本建築協会寄贈）

大都市にふさわしいホテルをつくることは、大阪の長年の悲願であった。新大阪ホテルは政財界の要望をもとに、最新の設備・意匠を誇るホテルとして昭和10年、中之島に完成した。設計には武田五一ら第一線で活躍する多くの建築家がかかわった。

平成21年度事業報告書

平成21年4月1日～平成22年3月31日

1．総　　会

(1) **第1回通常総会**　平成21年6月17日
議事　①平成20年度事業報告書（案）の件
②平成20年度収支決算書（案）の件
③役員選任の件

(2) **第2回通常総会**　平成22年3月24日
議事　①平成22年度事業計画（案）の件
②平成22年度収支予算（案）の件
③名誉正会員推薦の件

2．理　事　会

(1) **第1回通常理事会**　平成21年6月3日
議事　①平成20年度事業報告書（案）の件
②平成20年度収支決算書（案）の件
③役員選任の件
④総会等の開催の件

(2) **第1回臨時理事会**　平成21年6月22日
議事　①役付き役員選任の件
②常設委員長並びに常任理事委嘱の件
③理事の会務分掌の件

(3) **第2回通常理事会**　平成22年3月24日
議事　①平成22年度事業計画（案）の件
②平成22年度収支予算（案）の件
③名誉正会員推薦の件

3．評　議　員　会

(1) **第1回定時評議員会**　平成21年6月3日
議事　①評議員会副議長互選の件
②役員（顧問・理事・監事）候補者選任の件

4．役　員　会　等

(1) 常任理事会　8回

5．常設委員会等

(1) 編集委員会　委員会　12回　小委員会等　91回
(2) 事業委員会　7回
(3) 教育委員会　5回
(4) 出版委員会　11回
(5) 建材委員会　2回
(6) 史料研究会（再読関西近代建築）5回
(7) 関西の建築界群像委員会　8回
インタビュー　8回

6．特別委員会等

(1) 工高生デザインコンクール審査委員会1回
(2) 青年技術者選考委員会　1回
(3) 読者と選ぶ「建築と社会」賞審査会　1回

7．建築と社会・特集号

4月号　楽しい福祉
5月号　体感するインテリア
6月号　建築空間が求める空気環境（空気質）
7月号　建築と水
8月号　実用レベルで展開される施工管理のIT化
9月号　第56回青年技術者
10月号　地域の歴史資産を活かしたまちづくり
11月号　第16回会員作品特集“私の空間作法”
12月号　構造家日記～頭の中をのぞいてみたら～
1月号　創業110周年記念特集　NIKKEN SEKKEI
2月号　建築とエコ技術
3月号　東海支部復活50周年記念号
東海―TOKAIオムニバス

8．講　　演　　会

「“大大阪”時代のモダン都市を絵画・映像に読む」
平成21年6月17日
講師：橋爪節也（大阪大学総合学術博物館教授）
参加者60名

9．見　　学　　会

中之島ダイビル
平成21年8月5日　参加48名
茶室「何有荘」
平成21年10月31日　参加36名
神戸旧居留地25番館
平成22年2月26日　参加25名
西本願寺
平成22年3月10日　参加41名
ダイキン工業㈱堺製作所
平成21年8月26日　参加25名
音羽電機工業㈱雷テクノロジーセンター
平成21年12月8日　参加31名
学生対象見学会「（仮称）エルセラーン化粧品堂島1丁目プロジェクト・ホテル棟」新築工事
平成21年7月3日　参加28名
同　大村家具工業㈱
平成21年12月5日　参加16名

10．建築工事実務講習会

本部主催「施工計画・仮設見積」
平成21年12月3日㈭　9：00～17：00
講　師：①施工計画（仮設・地下工事）
―白塚芳郎／鴻池組大阪本店
②施工計画（躯体・仕上・設備工事・工程）
―池内昌志／淺沼組大阪本店
③仮設計画・同見積り
―阪井　聡／大林組本店
受講者：64名
東海支部主催「施工計画・仮設見積・積算業務」
平成22年1月20日㈬　9：30～17：00
講　師：①施工計画―日吉智紀／清水建設名古屋支店
②仮設見積―田端　聡／大林組名古屋支店
③積算業務―山田　治／竹中工務店名古屋支店
受講者：38名

11．新建材の紹介

建材委員会事業として、新建材の特性等の検討及び今後の会誌「建築と社会」の誌面での紹介の方法等について検討を行った。

12．優秀卒業生の表彰

本人の研鑽意欲の向上を促し激励するため、高等学校、専門学校の優秀な建築科卒業生徒160名を表彰した。

13．コ　ン　ク　ー　ル

第55回工高生デザインコンクール
設計課題：学校に建つ食堂
応募者：28校・105点
審査会：平成21年10月17日　表彰式：11月14日
審査委員：笹村欣也／㈱東畑建築事務所設計部部長他14名
入選作品：10点（うち最優秀1点、優秀2点）
続大阪「かくれたええとこ」再発見コンクール
応募数：202点
審査会：平成22年3月12日　表彰式：3月24日
審査委員長：橋爪紳也／大阪府立大学特別教授
入選作品：最優秀該当なし　入選9点

14．後援・協賛等の承認

・「けんざい2009」―第20回総合建築材料・住宅設備展後援　当協会もブース出展をし、大阪かくれたええとこ再発見コンクール、工高生デザインコンクールをはじめ協会活動のPRをした。
・ヒートアイランドに配慮したまちづくりアイデアコンペ～「大阪の夏を涼しく！都市デザイン・技術アイデアコンペ」協賛
・第29回大阪都市景観建築賞（愛称大阪まちなみ賞）」協賛
・「あすなろ夢建築」第19回大阪府公共建築設計コンクール協賛
・民間（旧四会）連合協定工事請負契約約款改正、同解説改訂」「四会連合協定建築設計監理等業務委託契約約款書式改正、同解説改訂」に伴う講習会後援
・第33回人間―生活環境系シンポジウム協賛
・「水都大阪の佇まい　モダン」―残したい都市の風景と建築写真コンテスト―後援
・改正「工事請負契約約款・建築設計監理等業務委託契約約款の解説」講習会後援
・第31回JapanHome&BuildingShow協賛
・「建築・建材展2010」協賛
・室内環境学会2009年度総会協賛
・建築パースの国際コンペティション『JARA大賞公募展「美術館・博物館建築を描く」』後援
・「2009年度　かんでん　住まいの設計コンテスト」後援
・「鋼構造塑性設計指針」改定講習会後援
・平成22年度1・2級建築施工管理技術検定試験受験対策講座共催
・「建物の火害診断及び補修・補強方法指針（案）・同解説」講習会後援
・建材情報交流会「長期優良住宅について」協賛
・第4回人間―環境系国際会議協賛
・「創っ展2010―ATC関西学生卒業作品展vol.15」後援
・「エネ蔵2010～エネルギーソリューション＆蓄熱フェア」後援
・「リビング＆デザイン」後援

15．青年技術者の顕彰

・満35歳以下の青年技術者を対象に、昭和29年度より実施しており、第56回は、応募者28名のうち19名を顕彰した。
・また、顕彰者を称え激励するため、表彰式・講演会、及び先輩・役員との交流会を平成20年度と同様に実施した。

16．合同忘年懇親会等

・建築関係4団体合同忘年懇親会
21年度は、当協会が当番会となり、次のとおり開催した。
平成21年12月14日　18：00～19：30
太閤園
・建築関係14団体合同新年交礼会
21年度は、㈳日本建築材料協会が当番会となり実施された。
平成22年1月5日　15：00～16：00
リーガロイヤルホテル

17．役員を送った団体

大阪商工会議所	2号議員
大阪建築防災センター	評議員
大阪市街地再開発促進協議会	理事
大阪住宅センター	理事
日本建築総合試験所	評議員

18．各支部事業活動

京都支部
・会議の開催　総会1回、役員会2回
・事業　見学会1回、受験講習会　2級建築士（製図）延べ6日間
中国支部
・会議の開催　総会1回、常議員会1回　企画・幹事会4回
・事業　懇親会1回、UIA2011TOKYO広島イベント計画協議会への参加
東海支部
・会議の開催：総会1回、役員会等12回、総務委員会等の委員会36回
・事業：支部機関紙の発行2回、講演会1回　支部復活50周年記念見学会1回、支部会員名簿の発行、懇親会2回　ゴルフ親睦会2回、「建築と社会」東海特集号編集
・協力事業：中部建築賞協議会ほか5団体の事業実施に協力した。
・建築8団体の新年互例会で幹事を担当した。

平成21年度決算報告書

貸借対照表

平成22年３月31日現在　　（単位：円）

科　目	当年度	前年度	増減
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現金・預金	28,241,422	33,070,695	-4,829,273
貯蔵品	46,796	76,811	-30,015
未収入金	3,446,133	2,082,616	1,363,517
前払費用	114,519	134,714	-20,195
仮払金	6,402	13,959	-7,557
流動資産合計	31,855,272	35,378,795	-3,523,523
2．固定資産			
(1) 基本財産			
基本財産合計	0	0	0
(2) 特定資産			
記念事業積立預金	13,000,000	8,000,000	5,000,000
事業基金積立預金	29,000,000	29,000,000	0
退職給付引当資産	7,315,947	6,720,854	595,093
特定資産合計	49,315,947	43,720,854	5,595,093
(3) その他固定資産			
什器備品	111,260	111,260	0
投資有価証券	446,208	445,440	768
保証金	3,436,650	3,436,650	0
その他固定資産合計	3,994,118	3,993,350	768
固定資産合計	53,310,065	47,714,204	5,595,861
資産合計	85,165,337	83,092,999	2,072,338
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
未払金	1,137,775	2,331,295	-1,193,520
前受金	3,757,296	7,496,813	-3,739,517
預り金	122,962	185,633	-62,671
流動負債合計	5,018,033	10,013,741	-4,995,708
2．固定負債			
退職給付引当金	7,315,947	6,720,854	595,093
固定負債合計	7,315,947	6,720,854	595,093
負債合計	12,333,980	16,734,595	-4,400,615
Ⅲ　正味財産の部			
1．指定正味財産			
指定正味財産合計	0	0	0
2．一般正味財産	72,831,357	66,358,404	6,472,953
（うち基本財産への充当額）	(0)	(0)	(0)
（うち特定資産への充当額）	(42,000,000)	(37,000,000)	(5,000,000)
正味財産合計	72,831,357	66,358,404	6,472,953
負債及び正味財産合計	85,165,337	83,092,999	2,072,338

正味財産増減計算書

平成21年４月１日～平成22年３月31日　　（単位：円）

科　目	当年度	前年度	増減
Ⅰ　一般正味財産増減の部			
1．経常増減の部			
(1) 経常収益			
受取会費	42,862,383	45,729,483	-2,867,100
個人正会員受取会費	12,803,083	13,672,100	-869,017
個人正会員（地方）受取会費	937,650	1,029,450	-91,800
団体正会員受取会費	29,106,250	31,008,333	-1,902,083
準会員受取会費	15,400	19,600	-4,200
事業収益	25,963,615	24,785,807	1,177,808
編集委員会収益	18,835,969	18,704,009	131,960
契約約款収益	4,765,380	3,805,990	959,390
出版委員会収益	477,283	665,894	-188,611
事業委員会収益	327,000	285,000	42,000
教育委員会収益	1,363,683	1,052,214	311,469
建材委員会収益	0	0	0
事業雑収益	194,300	272,700	-78,400
雑収益	384,928	307,317	77,611
経常収益計	69,210,926	70,822,607	-1,611,681
(2) 経常費用			
事業費	36,554,226	37,172,754	-618,528
給料・手当	13,204,240	13,419,690	-215,450
法定福利費	2,110,926	1,973,387	137,539
編集委員会事業費	16,317,718	17,754,903	-1,437,185
契約約款費	3,460,935	2,409,758	1,051,177
出版委員会事業費	112,771	122,972	-10,201
事業委員会事業費	218,108	230,572	-12,464
教育委員会事業費	1,016,824	1,214,853	-198,029
建材委員会事業費	0	0	0
雑費	112,704	46,619	66,085
管理費	26,183,747	26,720,975	-537,228
給料・手当	11,579,112	11,567,814	11,298
退職給付費用	595,093	390,550	204,543
法定福利費	1,263,096	1,220,349	42,747
福利厚生費	33,435	2,935	30,500
助成費	1,820,000	1,883,340	-63,340
会議費	905,220	921,528	-16,308
旅費交通費	14,810	400	14,410
通信運搬費	410,617	416,669	-6,052
集金費	660,947	719,100	-58,153
消耗品費	1,828,901	2,005,680	-176,779
備品購入費	135,190	316,680	-181,490
修繕費	7,192	0	7,192
印刷製本費	13,440	68,250	-54,810
光熱水料費	213,491	235,438	-21,947
保険料	18,520	18,520	0
租税公課	702,800	676,000	26,800
清掃費	14,700	14,700	0
建物管理費	4,556,220	4,527,265	28,955
雑費	1,410,963	1,735,757	-324,794
経常費用計	62,737,973	63,893,729	-1,155,756
当期経常増減額	6,472,953	6,928,878	-455,925
2．経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	6,472,953	6,928,878	-455,925
一般正味財産期首残高	66,358,404	59,429,526	6,928,878
一般正味財産期末残高	72,831,357	66,358,404	6,472,953
Ⅱ　指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
Ⅲ　正味財産期末残高	72,831,357	66,358,404	6,472,953

財務諸表に対する注記

1．重要な会計方針

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法
その他の有価証券　時価のあるもの‥‥期末日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は移動平均法により算定）によっている。

(2) 固定資産の減価償却の方法
什器備品‥‥定額法によっている。

(3) 引当金の計上基準
退職給付引当金‥‥期末退職給与の要支給額を引当てている。

(4) 消費税等の会計処理
消費税等の会計処理は税込み方式によっている。

2．基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

科　目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
小　計	0	0	0	0
特定資産				
記念事業積立預金	8,000,000	5,000,000	0	13,000,000
事業基金積立預金	29,000,000	0	0	29,000,000
退職給付引当資産	6,720,854	595,093	0	7,315,947
小　計	43,720,854	5,595,093	0	49,315,947
合　計	43,720,854	5,595,093	0	49,315,947

3．基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等の内訳は、次のとおりである。

科　目	当期末残高	(うち指定正味財産からの充当額)	(うち一般正味財産からの充当額)	(うち負債に対応する額)
基本財産				
小　計	0	－	－	－
特定資産				
記念事業積立預金	13,000,000	－	(13,000,000)	－
事業基金積立預金	29,000,000	－	(29,000,000)	－
退職給付引当資産	7,315,947	－	－	(7,315,947)
小　計	49,315,947	－	(42,000,000)	(7,315,947)
合　計	49,315,947	－	(42,000,000)	(7,315,947)

4．固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

(直接法により減価償却を行っている場合)

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりである。

科　目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
什器備品	1,112,560	1,001,300	111,260
合　計	1,112,560	1,001,300	111,260

財産目録

平成22年3月31日現在　　(単位：円)

科　目	金額		
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現金預金	28,241,422		
現金手許有高	37,555		
普通預金 三井住友銀行大阪中央支店	7,352,506		
普通預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	4,140,187		
普通預金 りそな銀行北浜支店	2,304,056		
郵便振替 00910-9-39975	2,369,153		
普通預金 マーチャンダイズビル内郵便局	37,965		
定期預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	11,000,000		
定期預金 三井住友銀行大阪中央支店	1,000,000		
貯蔵品	46,796		
切手・はがき	46,796		
未収入金	3,446,133		
会誌収入	3,136,000		
個人正会員会費収入	187,200		
地方会員会費収入	2,100		
団体正会員会費収入	120,833		
前払費用	114,519		
助成費	113,119		
集金費	1,400		
仮払金	6,402		
会議保険料	6,402		
流動資産合計		31,855,272	
2．固定資産			
(1) 基本財産			
基本財産合計	0		
(2) 特定資産			
記念事業積立預金	13,000,000		
定期預金　三菱東京UFJ銀行瓦町支店	13,000,000		
事業基金積立預金	29,000,000		
定期預金　三菱東京UFJ銀行瓦町支店	29,000,000		
退職給付引当資産	7,315,947		
定期預金　三菱東京UFJ銀行瓦町支店	7,315,947		
特定資産合計	49,315,947		
(3) その他固定資産			
什器備品	111,260		
書棚1式	111,260		
投資有価証券	446,208		
中期国債ファンド　三菱UFJ証券	446,208		
保証金	3,436,650		
本部事務所賃貸契約による保証金	3,436,650		
その他固定資産合計	3,994,118		
固定資産合計		53,310,065	
資産合計			85,165,337
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
未払金	1,137,775		
会誌発行費	763,420		
助成費	29,755		
租税公課	329,800		
見学会保険料確定分	14,800		
前受金	3,757,296		
個人正会員会費収入	1,122,900		
団体正会員会費収入	2,243,746		
地方会員会費収入	103,950		
準会員会費収入	700		
会誌収入	286,000		
預り金	122,962		
給与源泉税預り	28,260		
報酬源泉税預り	79,297		
印税預り	1,005		
誤振込み預り	14,400		
流動負債合計		5,018,033	
2．固定負債			
退職給付引当金	7,315,947		
固定負債合計		7,315,947	
負債合計			12,333,980
正味財産			72,831,357

収支計算書

平成21年4月1日から平成22年3月31日まで　　(単位：円)

科　目	予算額	決算額	差異
Ⅰ　事業活動収支の部			
1．事業活動収入			
会費収入	41,833,643	42,862,383	-1,028,740
個人正会員	12,102,017	12,803,083	-701,066
個人正会員（地方）	944,804	937,650	7,154
団体正会員	28,767,922	29,106,250	-338,328
準会員	18,900	15,400	3,500
事業収入	23,028,789	25,963,615	-2,934,826
編集委員会収入	17,025,000	18,835,969	-1,810,969
契約約款収入	4,071,539	4,765,380	-693,841
出版委員会収入	500,000	477,283	22,717
事業委員会収入	250,000	327,000	-77,000
教育委員会収入	1,000,000	1,363,683	-363,683
建材委員会収入	0	0	0
事業雑収入	182,250	194,300	-12,050
雑収入	170,000	384,928	-214,928
前受金収入	0	3,768,413	-3,768,413
前払費用収入	0	134,714	-134,714
仮払金収入	0	1,047,679	-1,047,679
預り金収入	0	7,621,840	-7,621,840
貯蔵品収入	0	30,015	-30,015
事業活動収入計	65,032,432	81,813,587	-16,781,155
2．事業活動支出			
事業費支出	37,144,408	36,554,226	590,182
事業関係人件費支出	15,221,425	15,315,166	-93,741
編集委員会事業費支出	17,525,000	16,317,718	1,207,282
契約約款費支出	2,717,983	3,460,935	-742,952
出版委員会事業費支出	130,000	112,771	17,229
事業委員会事業費支出	220,000	218,108	1,892
教育委員会事業費支出	1,200,000	1,016,824	183,176
建材委員会事業費支出	0	0	0
雑支出	130,000	112,704	17,296
管理費支出	27,242,152	25,588,654	1,653,498
管理関係人件費支出	13,246,442	12,842,208	404,234
退職給付支出	0	0	0
福利厚生費支出	40,000	33,435	6,565
助成費支出	1,859,290	1,820,000	39,290
会議費支出	1,026,420	905,220	121,200
旅費交通費支出	50,000	14,810	35,190
通信運搬費支出	440,000	410,617	29,383
集金費支出	800,000	660,947	139,053
消耗品支出	1,980,000	1,828,901	151,099
備品購入費支出	300,000	135,190	164,810
修繕費支出	50,000	7,192	42,808
印刷製本費支出	100,000	13,440	86,560
光熱水料費支出	250,000	213,491	36,509
保険料支出	20,000	18,520	1,480
租税公課支出	670,000	702,800	-32,800
清掃費支出	40,000	14,700	25,300
建物管理費支出	4,580,000	4,556,220	23,780
雑支出	1,790,000	1,410,963	379,037
前受金支出	0	7,507,930	-7,507,930
前払費用支出	0	114,519	-114,519
仮払金支出	0	3,181,027	-3,181,027
預り金支出	0	5,543,606	-5,543,606
貯蔵品支出	0	0	0
事業活動支出計	64,386,560	78,489,962	-14,103,402
事業活動収支差額	645,872	3,323,625	-2,677,753
Ⅱ　投資活動収支の部			
1．投資活動収入			
投資活動収入計	0	0	0
2．投資活動支出			
特定資産取得支出	595,093	5,595,093	-5,000,000
退職給付引当資産取得支出	595,093	595,093	0
記念事業積立預金支出	0	5,000,000	-5,000,000
投資有価証券取得支出	0	768	-768
投資活動支出計	595,093	5,595,861	-5,000,768
投資活動収支差額	-595,093	-5,595,861	5,000,768
Ⅲ　財務活動収支の部			
1．財務活動収入			
財務活動収入計	0	0	0
2．財務活動支出			
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
Ⅳ　予備費支出	50,000	0	50,000
当期収支差額	779	-2,272,236	2,273,015
前期繰越収支差額	47,826,267	32,822,016	15,004,251
次期繰越収支差額	47,827,046	30,549,780	17,277,266

1．資金の範囲

資金の範囲には、現金・預金・未収入金及び未払金を含めている。
なお、前期末及び当期末残高は、下記2に記載するとおりである。

2．次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳

科　目	前期末残高	当期末残高
現金預金	33,070,695	28,241,422
未収入金	2,082,616	3,446,133
合計	35,153,311	31,687,555
未払金	2,331,295	1,137,775
合計	2,331,295	1,137,775
次期繰越収支差額	32,822,016	30,549,780

平成22年度

日本建築協会役員会務分掌

(22.06.22現在・敬称略)

名誉会長	佐野正一 ㈱安井建築設計事務所	**顧問**	中嶋俊行 大阪府
名誉会長	市川　宏 ㈱東畑建築事務所	**顧問**	＊野口邦彦 大阪市

会　長	中井　　進	㈱日建設計	
副会長	大井　昇二	㈱大林組	会勢・事業担当
副会長	大石　忠彦	㈱きんでん	会勢・事業担当
副会長	黒川　省二	㈱竹中工務店	企画・財務担当
副会長	樋口　洋一	大阪ガス㈱	総務・事務局担当
副会長	＊本多　友常	和歌山大学	編集・研修担当
副会長	松村　孝治	㈱東畑建築事務所	会長職務代行　編集・研修担当

理事　○印は常任理事で委員長

(総務) 6名
- 大林　剛郎　㈱大林組
- 栗原　信英　栗原工業㈱
- 佐野　吉彦　㈱安井建築設計事務所
- 立野　純三　㈱ユニオン
- ○松原　徹雄　㈱日本建築総合試験所
- ○山形　政昭　大阪芸術大学

(財務) 4名
- 奥村太加典　㈱奥村組
- 木村　之彦　木村工業㈱
- 大寺　正直　中央電設㈱
- 森本　晴夫　三和建設㈱

(編集・出版) 8名
- ○上原　正行　U建築工房
- 木戸　　徹　鹿島建設㈱
- 佐藤　栄一　㈳日本建築材料協会
- ○設楽　貞樹　㈱安井建築設計事務所
- 竹中　統一　㈱竹中工務店
- 立成　良三　㈱大阪住宅センター
- ＊浅野真一朗　関西電力㈱
- 吉村　英祐　大阪工業大学

(会勢) 12名
- ＊淺沼　健一　㈱淺沼組
- 池内　哲郎　野里電気工業㈱
- 蔦田　守弘　㈱鴻池組
- 小橋　鴻三　清水建設㈱
- 近藤　　徹　不二熱学工業㈱
- 銭高　善雄　㈱銭高組
- ＊今井　雅則　戸田建設㈱
- 藤井　　實　エスケー化研㈱
- 藤原　富男　㈳大阪建設業協会
- 佐伯　　博　㈱東畑建築事務所
- 森畑　　武　MO建築研究室&RG
- 與謝野　久　㈱日建設計

(事業) 6名
- ＊中田　　誠　(独)都市再生機構
- 城口　俊雄　㈱大阪城口研究所
- ○瀬戸川　薫　関西住宅品質保証㈱
- ＊前田　　亮　西松建設㈱
- ＊澤邊　繁克　㈱熊谷組
- ＊清王　政志　㈳大阪空気調和衛生工業協会

(研修) 6名
- 岩橋　貞雄　八千代電設工業㈱
- 上林　研二　地域生活空間研究所
- 久保　博司　大成建設㈱
- 千種　幹雄　㈱昭和設計
- 永原　　穣　王建工業㈱
- 和田　克朗　元㈳日本建築センター

常務理事	林　　新一	理事合計50名
監事 3名	杉山　泰生　元㈳日本建築協会	前田　隆司　㈱前田商会
	＊三木　徹　㈱安井建築設計事務所	

注　＊印は新任

細則抜粋　第17条　会務分掌理事のうち若干名を常任理事に選任する。

平成22年度

日本建築協会評議員

議　長　三木　敏男　　**副議長**　嘉納　秀一

22.6.1現在（敬称略）

区分	任期（22.6.1～24.5.31）	任期（21.6.1～23.5.31）
技術 2	三木敏男　㈱サングローブ	
	村上幸三郎　村上デザイン事務所	
総合 13	柿本正和　㈱錢高組	肥後行人　㈱鴻池組大阪本店
	＊土井克保　㈱淺沼組	浅野博光　㈱奥村組
	＊川本勝一　安藤建設㈱	重見法人　三井住友建設㈱
	天野直樹　㈱竹中工務店	
	＊梅原弘記　㈱大林組	
	山本清彦　戸田建設㈱	
	中道正伸　㈱中道組	今西邦夫　㈱今西組
	原　眞一　コーナン建設㈱	金山隆興　㈱金山工務店
電気 4	河島秀光　㈱きんでん	嘉納秀一　三宝電機㈱
	＊森　博明　三和電気土木工事㈱	嶋田雅景　㈱クリハラント
空調 4	安原和利　㈱精研	吉武秀幸　㈱三冷社西日本支社
	春本雄一　㈱三晃空調大阪本店	若林尚史　若林設備工業㈱
建材 3	安田　誠　安田㈱	
	山中豊茂　㈱山中製作所	深江隆司　アスワン㈱
中国 4	国沢幹男　国沢企画・監理	清田剛一　㈱大方工業所
	嶋津孝之　広島大学	村重保則　現代建築設計事務所（株）
東海 6	小宮三辰　三辰設計事務所	後藤利秋　㈲和光建築計画研究所
	鈴木慶智　㈱伊藤建築設計事務所	中村哲士　元・安井建築設計事務所
	芳山明久　東海支部　幹事	福田泰造　福田泰造建築事務所
京都 3	長瀬博一　長瀬建築研究所	
	＊髙田光雄　京都大学	
	山田昌次　花豊造園㈱	

総数39人　＊印は新任

平成22年度

日本建築協会支部長（敬称略）

京　都　上林　研二　地域生活空間研究所
中　国　森畑　　武　MO建築研究室&RG
東　海　佐伯　　博　㈱東畑建築事務所

建築と社会

Architecture and Society

2010 7
No.1060
日本建築協会

■特集予告
8月号／再生・受け継ぐ・繋がる
9月号／第57回青年技術者

編集委員会(平成22年度)

■副会長
本多　友常
松村　孝治
■編集担当理事
浅野真一朗
上原　正行
木戸　徹
佐藤　栄一
◎設楽　真樹
竹中　統一
立成　良三
吉村　英祐
■副委員長
米井　寛
勝山　太郎
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
△飯田　匡
鈴木　克彦
田中　直人
高橋　和也
紅谷　昇平
松田奈緒子
三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
荒木　宏之
奥村　明孝
菅野　忠司
神戸　嘉也
木多　彩子
楠　敦士
静　茂夫
△下坂　浩和
所　千夏
野田　隆史
枇杷　健一
松森　織江
米山　剛史
★インテリア・住宅系
小倉　一平
加藤　力
△神谷　浩司
黒栁　亮
田中　浩介
戸井賢一郎
ペリー史子
間渕　一博
■構造分科会
秋田　智
△石田　大三
岸本　光平
小芝　淳一
志摩　好宣
瀧野　敦夫
角田　耕一
難波　尚
橋本　宗明
松村　健
向井　洋一

■設備分科会
△赤澤　正治
梶井　宏修
北野　勝也
谷野　太志
夏井　重行
難波　利幸
橋本　直樹
福谷　周
桝井　貴廣
宮崎ひろ志
村上幸三郎
渡邊　裕之
■施工材料分科会
桜井　和男
中川　恒
平田　茂良
藤丸　啓一
山岡　篤人
△吉田　正友
■法令分科会
近都　学
河野　学
田上　幸二
西林　浩一
濱崎　秀和
山上　佳之
△吉田　純
鷲尾　真弓
■作品作風小委員会
居内　章夫
○池上　明
稲垣　和江
井上　雅祐
加嶋　章博
倉橋　尉仁
倉渕奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
鞆野　淳司
豊田　充広
鳥居　久人
西田　佳代
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
上田　訓将
宇城　英彦
江本　孝弘
永平　達也
○前田　衛
南澤　浩司
森川　幸信
■10年委員会
赤木　隆
門野　陽
川上比奈子
熊田　将男
清水　健司
△菅原　幸也
△中村　文紀
○前川　治彦

◎委員長　○副委員長　△幹事

印　刷　2010年6月25日
発　行　2010年7月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

Journal of the Architectural Association of Japan

特集●建築と石

■総論
建築と石●長尾重武 — 18

■各論1
シトー会修道院と東方地域●三宅理一 — 22
インドの石●神谷武夫 — 24
「自由の壁」になったミースの石〜バルセロナ・パビリオン〜●渡邊明次 — 26
白井晟一における石の「発見」●倉方俊輔 — 28

■各論2
元禄の学校建築群取り巻く長大な石塀●竹内良雄 — 30
地球を庭に見立てると…〜イサム・ノグチと石の場合●新見　隆 — 32
石貼りの幻影〜五色塚古墳と白井晟一〜●黒田龍二 — 34

■編集後記 — 36

会告　総会議決のお知らせ．通常理事会議決のお知らせ．臨時理事会議決のお知らせ．評議員会議決のお知らせ．大阪歴史博物館「日本建築協会と関西の建築界」を開催―㈳日本建築協会後援―．平成21年度事業報告書．平成21年度決算報告書．平成22年度日本建築協会役員会務分掌．平成22年度日本建築協会評議員．平成22年度日本建築協会支部長　1

作品作風　立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）スポーツ健康科学部/大学院スポーツ健康科学研究科　8
宗教法人 天聖真美会世界会館　10
梅田ゲートタワー　12

研究の風景　村上心研究室●椙山女学園大学生活科学部生活環境デザイン学科　14

gallery　Sodatsu-ki（そだつ木）●杉山知子　16

法令コーナー　耐震改修とセットで低炭素型住宅への転換を促進●石黒一郎　37

構造の頁　a.c.iデザインルームの構造設計●白髪誠一　38

再読 関西近代建築　阪急ビルディング●橋寺知子　39

関西の建築界群像　齊藤　正●米津正臣　43

information　和歌山大学で教授・准教授を募集．公共建築物木材利用促進法の公布．㈶建築技術教育普及センター調査・研究助成案件の募集．全国団地景観サミット2010．BUILDINGs2030で提案募集．第3回『夏休み!子ども絵画コンクール』．“伝統構法の再生に向けて”KARTH公開勉強会．色彩の抒情詩 脇田和展．三菱一号館美術館開館記念展「マネとモダン・パリ」．ようこそ恐竜ラボへ!《化石の謎をときあかす》．ボストン美術館展 西洋絵画の巨匠たち．「奈良の古寺と仏像〜會津八一のうたにのせて〜」．「印象派とモダンアート」―サントリーミュージアム［天保山］で．ナポリ・宮殿と美―カポディモンテ美術館展　44

月間の動き　平成22年5月分　47

本文　デザイン　高橋善丸

今月の表紙
企画　間渕一博　企画・写真・デザイン　花城辰男

大衆のまちなみ

大衆酒場として昭和40年代にピークを迎えた淀川の歓楽街は、建物の少し寂れた表情や無造作な看板の連なりなどが趣のあるまちなみです。人情味に溢れ、下町らしさが色濃く残る雰囲気は、昭和のロマンを凝縮しているように思えてなりません。
（間渕一博）

大阪市淀川区　十三トミータウン

所 在 地――滋賀県草津市野路東１丁目
敷地面積――590,050.78㎡
建築面積――　3,687.28㎡
延床面積――　12,829.53㎡
構造規模――RC造、一部S造、地上６階・塔屋１階
工　　期――2009年５月～2010年２月
最 寄 駅――JR南草津駅
撮　　影――エスエス大阪　左海　一郎







作品
作風

建　築　主　学校法人 立命館
設計・監理　竹中工務店
施　　工　竹中工務店

立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科

人間・生命に立脚したスポーツと健康の学び舎

日本最大の湖である琵琶湖を湛える滋賀県草津市にある立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）に位置している。2010年4月に誕生したスポーツと健康を科学的に学ぶスポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科の基本棟である。

「人間・生命に立脚したスポーツと健康の学び舎」を設計のコンセプトとし、環境負荷を低減させるエコロジカルな建築であるとともに、風・光・水などの自然の恵みを五感で感じることのできるエモーショナルな建築とすることを設計のコンセプトとした。

■風　…ウィンドチムニー

ガラスの階段室は、建物内の自然換気を促すウィンドチムニー「風の煙突」としての機能を持つ、環境建築としてのシンボルタワーである。

建物の上空に流れる琵琶湖からの卓越風の風向・風速を解析することにより、階段室の形状を決定した。上空の卓越風による誘因効果と、階段の上下の気圧差を利用した煙突効果により、建物内の暖められた空気を階段室の上部から排気させるとともに、外部から取り入れた涼風により、建物全体をパッシブに換気させる機能を持っている。階段の吹抜け内部には、上部へ流れる風を受けて揺らめくモビールアートを設けることで風の流れを視覚化させている。

■光　…ブリーズソレイユ

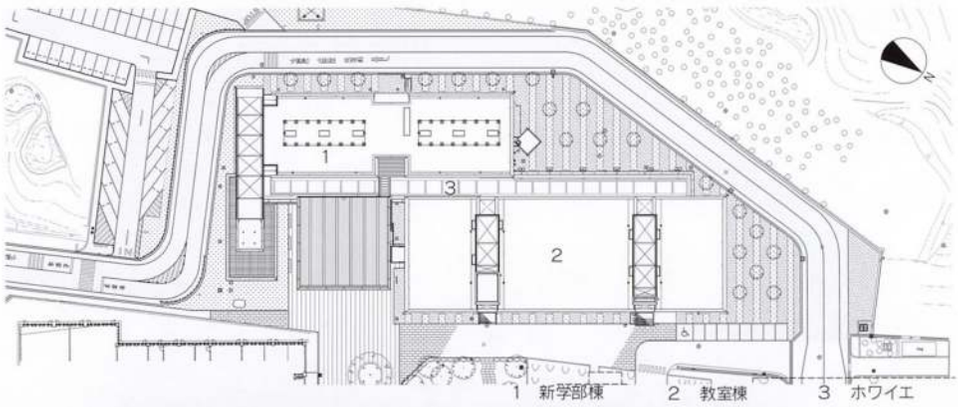
全ての開口部には、アルミ製の縦ルーバーを取り付け、太陽からの日射量の制御をおこなっている。柱・梁と開口部とによって生み出される深い彫と、アルミ製の縦ルーバーによって、同面サッシと比較して、約70％程度に日射の負荷を抑えるとともに、陰影のあるリズミカルなファサードを与えている。

■水　…水盤

ウィンドチムニーとして利用しているガラスの階段室の最下部にはスリットを開け、建物の内外で連続した厚さ5mm程度の水を流すことで、水盤の上を流れる外気を建物内に呼び込み、内部空間に潤いを与えている。水盤に映り込む光、水音を発する仕掛けなどにより、五感に訴える空間づくりを行った。

複合感覚に訴える空間

風・光・水などの自然の要素を組み合わせることで、人間の五感に、複合的に訴え、水の揺らぎ・音・反射などの自然の要素を増幅して感じられる空間づくりを行った。この学び舎が、環境への豊かな素養をもつ人間を育むことができる教育的建築となることを目指している。　（永井　務・西村　敬／竹中工務店）













作品集

建　築　主　宗教法人天聖真美会
設計・監理　大林組大阪本店一級建築士事務所
施　　工　大林組

宗教法人天聖真美会世界会館







■芸術と一体化するホール

滋賀県草津市の琵琶湖岸に、2005年竣工の本殿（宣教本部）に続き、世界各地の支部との会議を主目的とした国際会議場を建設するプロジェクトである。直径が39mある２つの無柱円形ホールと、それらを繋ぐ諸室のゾーンで構成される。いかに目に見える要素を減らし、シンプルな構成として表現するかを課題として取り組んだ。

エントランスホールは、フルハイトのガラスと大理石により白く統一された硬質な空間構成とし、入場する人々の気持ちを高揚させる。建築の要素を最小限にすることで、中央に設置されている象徴的な彫刻「天国の門」を引き立たせ、共存することに配慮した。空間と一体化したその頂部の佇まいは遠く敷地外からも認識できる。

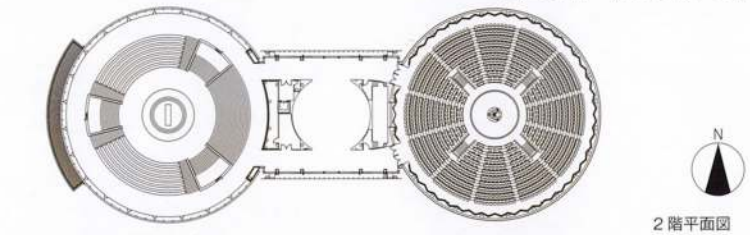
ワールドホールは、同時通訳設備や昇降式大型ディスプレイ８台を備えた本格的な国際会議場である。764席の階段状固定席に囲まれた中央には、ステンレスフレームの地球儀が宙に浮かび、ドーム型光天井の柔らかい光により輝きを与えた。円形ステージは昇降と回転の２つの機能を感じさせないシンプルな構成とし、音楽ホールとして使われる際のリングバトンを脱着式とすることで、芸術と機能の一体化に成功した。

構造的には、２つの円形ホールのタイル張り部分までをRC造・上部構造をS造とし、諸室のゾーンは全てS造としたハイブリッド構造を採用している。

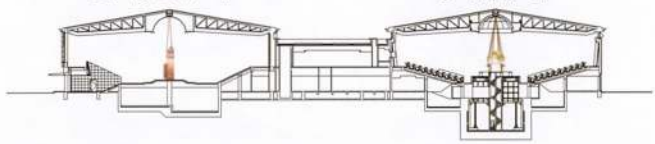
音響的には両ホールとも、中央に音の反射が集中する円形形状のため、徹底した音響シミュレーションに基づく反射・吸音材のレイアウトにより、最適な音響特性を実現している。

各部のディテールや設備的なアウトレットなども緻密に計算し、全ての要素や機能をミニマルにデザインすることで、建築と機能と芸術が一体化した空間を実現した。

（井上雅祐・杉本憲祐／大林組）



２階平面図



断面図

所 在 地――滋賀県草津市
敷地面積――53,561.14㎡
延べ面積――5,727.84㎡
構造規模――RC造（一部S造）、地上2F
工　　期――2008年６月～2010年４月
撮　　影――河合止揚（アトリエベラ）





作品風作

建　築　主　鶴野町34開発特定目的会社
設計・監理　昭和設計
施　　工　鹿島建設

梅田ゲートタワー

当該計画地は、JR大阪駅を中心とする大阪市北部の業務エリア東端に位置する。高層オフィスビルとマンションに挟まれ、周辺は梅田の繁華街の外れとなる雑多な街並みが続くエリアである。その中で、高さ100ｍのオフィスビルの存在をどのように表現するかが一つの命題であった。

建物コンセプトを「フォーマル＆インフォーマル」とし、建物全体でそのコンセプトを表現した。面として黒（フォーマル）と白（インフォーマル）の色彩で構成し、印象度の高いビルアイデンティティを確立した事で、命題の一つであったその存在感を明快に表現している。

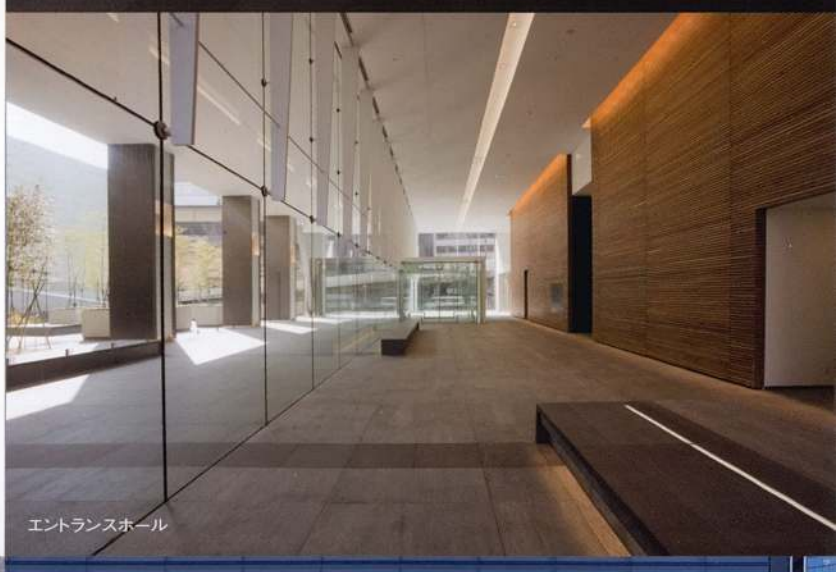
また、外構の広場やピロティは通り抜け公開空地として、再開発中の梅田茶屋町とこらから発展していく中崎町の二つの地域を結び、人々の流れを誘発する「ムスビの場」としての役割を担っている。

（松下典央／昭和設計）

所 在 地――大阪市北区鶴野町1-9
敷地面積――2,641.90㎡
建築面積――1,176.05㎡
延床面積――21,064.63㎡
構造規模――S造一部SRC造、RC造　21F、B1F
工　　期――2008年４月～2010年３月
最 寄 駅――阪急電鉄　梅田駅
撮　　影――SS大阪　清水向山


事務室西側


基準階事務室


エントランスホール


航空写真


アプローチ夕景

研究の風景

椙山女学園大学生活科学部
生活環境デザイン学科

村上心研究室



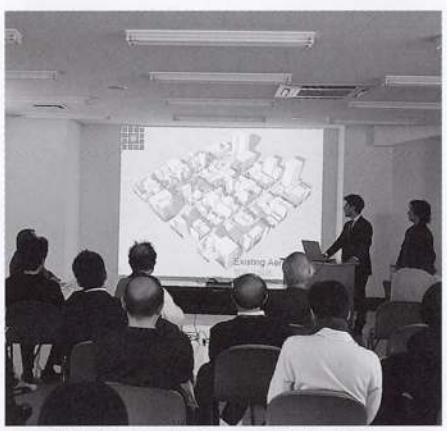
設計1-1　I 邸外観



設計1-2　I 邸内観



1　デザイン・ワークショップ主催@シドニー大学



2　デザインワークショップ主催（豪州・ニュー・サウス・ウェールズ大学、名古屋市内６大学が参加）@椙山女学園大学

まずは村上の自己紹介をしたい。

大阪の繁華街・曽根崎小学校に通い、お初天神とうめだ花月を遊び場に、下町の雑多な人とモノと祭りの中で育つ。一方、父方の実家・村上水軍で知られる瀬戸内海・尾道にも幼少の頃から、繰り返し訪れて滞在する中、「海と人が一緒に暮らす」日本の原風景を、深くその脳裏に刻む。1970年、10歳の時、大阪万博で「未来を見てしまった」。期間中、20回以上足を運んで建築物やパビリオンなどを夢中で回る。以来、海・山・川・町、多様な環境が混在する日本の「住まい」「暮らし」と強い関心を持ち、四季折々に表情を変える風景を追いかけて自然な流れで建築の道を選び、現在に至る。村上研究室の現在（2009年６月時点）のメンバーは、４年生９名、研究生１名、大学院生（修士）２名と川野紀江助教を含め総勢13名である（右下写真参照）。研究室の活動の詳細はwebsite：shin-murakami.comを御覧いただきたい。

■研究活動

村上研究室では、地域・建築計画、構法計画、建築経済の各分野を専門とした研究活動を行ってきた。

研究内容は、「建築と地域の生産メカニズムに関する一連の研究（具体的には、「住宅と住宅地の再生」と「小学校の持続的計画」など）」、「空間デザイン教育・環境教育に関する一連の研究」、「主体構造・各部構造の材料特性に関する一連の研究」、「公共財のデザイン手法と開発利益の還元方策に関する一連の報告」に大別できる。住宅・建築の生産メカニズムに関する研究成果として、近年は特に、「マスハウジング期に建設され、現在建て替え時期を迎えている、大量の集合住宅の再生システムに関する研究」を中心テーマとして取り組み、「フランス・デンマーク・ドイツ・アメリカ・オランダ等の海外研究者との連携による一連の国際比較研究」、「集合住宅の再生手法・プロセス・組織・費用・技術・制度・意思決定等の諸条件の方向性に関しての一連の研究成果」を国内外で発表した。ここ数年間は、持続可能な学校教育施設を中心とした地域の計画のための国際比較研究へとテーマを拡げている。平成18年度より、研究代表として科学技術研究費を得て、アジア



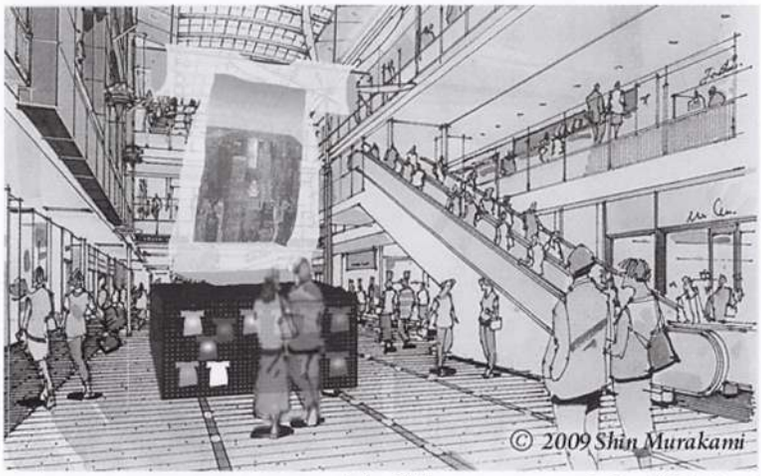
研究-1　イギリス小学校調査



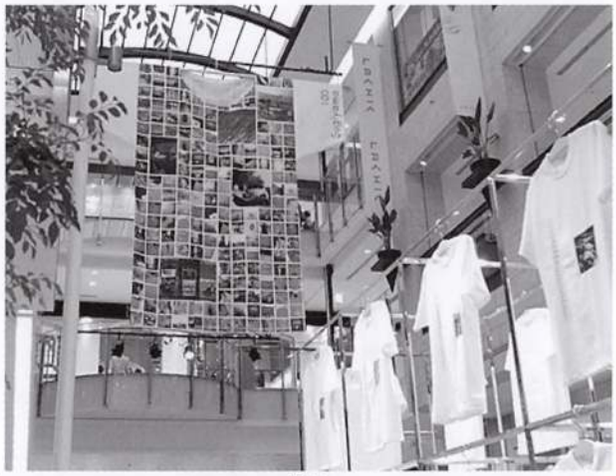
研究-2　マレーシア・クアラルンプールでの小学校教員への安全セミナー



研究-3　環境教育WS



イメージ図


ラシックT-shirts　Campaign　写真

（マレーシア、シンガポール、韓国）の団地再生に関する研究を、平成19年度から21年度は、豪英の小学校の安全性に関する研究を行っており、大学院生らと共に海外調査を行っている。（研究２．３．４参照）以上の研究成果に一貫して共通する問題意識は、「時代のダイナミズムを反映した「よい」デザインを如何にして実現するか」という課題である。

■計画・設計活動

研究報告と同時に、研究内容とデザインに対する価値観を世に問うため、また、研究・教育への実務的課題のフィードバックを図る目的で、計画・設計活動を学生と共に行っている。例えば、一連の「山村振興・再生の為の町おこし計画・核施設の基本設計」では、学生と共に山村に通い、人々と議論し、衰退する山村の活性化方策を示した。「T邸の設計」においては、明治元年に建設された木造民家の、また、「W邸の設計」「I邸の設計」（設計１参照）では昭和50年代の典型的郊外住宅の再生デザインを示した（「我が家のリフォームコンクール」すまいる愛知賞・都市基盤整備公団中部支社長賞受賞など）。 更に、学生の国際経験・交流のためのプログラムとして、欧州研修を引率（10年間に３回）、2006年度から実施する「シドニー大学」での滞在型海外研修（デザイン・ワークショップ）を現地での交渉を含めてコーディネートし、実現にこぎつけ継続実施している。2009年には、豪州・NSW大学の教員・学生を名古屋に迎え、市内６大学と共に国際WSを実施した。学生と共に行った活動事例として、「I邸再生計画」（「我が家のリフォームコンクール」入賞）、「ラシックT-shirts Campaignディスプレイ」（日本ディスプレイ大賞入選2005）、「もうひとつのテーブル展」出展作品「テーブル：一期一会」、「NAGOYA DESIGN　WEEK2009」出展作品「体感するダンボール茶室　待庵」、「名古屋市環境共生公営住宅/志段味集合住宅・外装デザイン」の写真を掲載する。

（文責：村上　心）

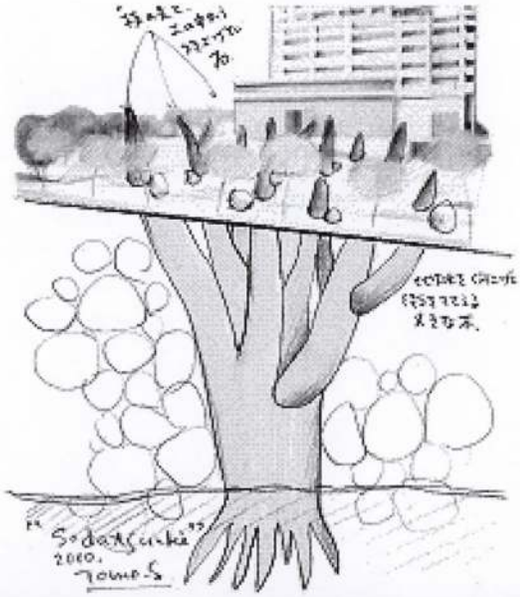

「テーブル：一期一会」


体感するダンボール茶室「待庵」


研究-４　多治見小学校WS


村上ゼミ集合写真


志段味集合住宅外装デザイン



まち　建築　ひと

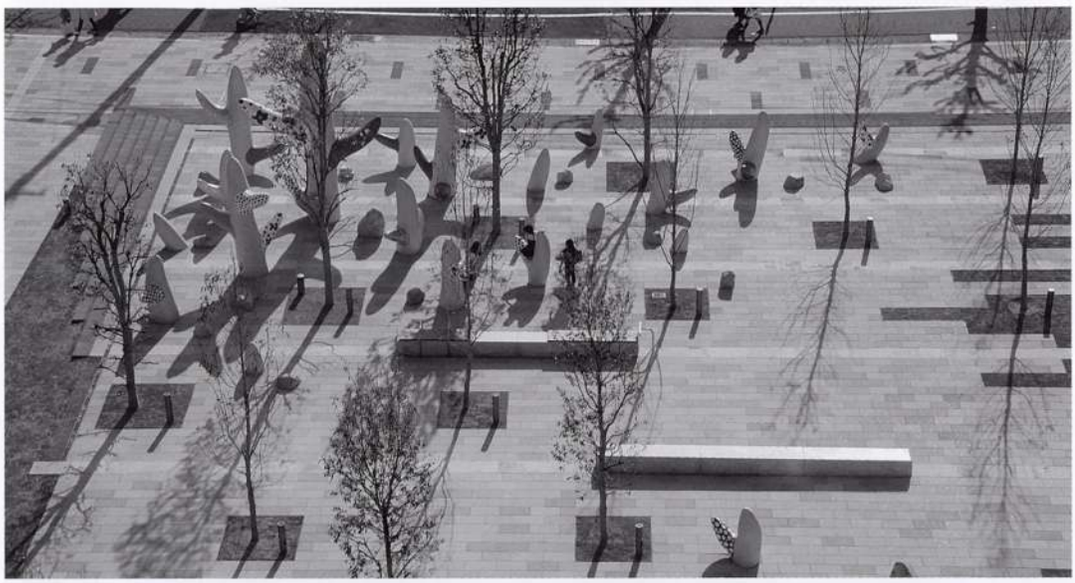
gallery

Sodatsu-ki（そだつ木）

美術家
杉山 知子

フォレスト広場に点在するオブジェは、地中の大木から突き上げる新しい枝を、そして、枝のオブジェの横に置かれている御影石は、枝が地上に伸びるときにはじき出した石をイメージしています。

毎日の生活の中に、オブジェがどんな風にとけ込んでいくのか楽しみです。



杉山知子（すぎやま　ともこ）

1958年神戸市に生まれる
1984年京都市立芸術大学美術学部
　　美術研究科修士課程修了
1994年C.A.P.（芸術と計画会議）設立



企画編集　鞆野淳司（作品作風小委員会）

特集

建築と石

建築と石とは古来より切っても切れない関係にある。エジプトのピラミッド、古代ギリシアの神殿、インドの石窟寺院などをはじめ、今日遺産として遺されている建築の多くは石でできている。日本では木材が豊富であったこともあり、構造材として石を用いることは稀ではあるが、飛鳥時代の遺跡や城郭の石垣、沓脱石や石庭など建築と石の関係はやはり深いものがある。近代建築においてもミース・ファン・デル・ローエのバルセロナパビリオンや白井晟一の親和銀行など、石の使い方が特徴的な名建築も数多い。

建築の原点ともいえる石の建築やランドスケープなど建築関連の事例を通して、建築を見直す機会としたい。

編集委員　下坂　浩和

【総論】
建築と石●長尾重武

【各論1】
シトー会修道院と東方地域●三宅理一
インドの石●神谷武夫
「自由の壁」になったミースの石～バルセロナ・パビリオン～●渡邊明次
白井晟一における石の「発見」●倉方俊輔

【各論2】
元禄の学校建築群取り巻く長大な石塀●竹内良雄
地球を庭に見立てると…～イサム・ノグチと石の場合●新見　隆
石貼りの幻影～五色塚古墳と白井晟一～●黒田龍二

【編集後記】

企画　建築計画系分科会

総論

建築と石

武蔵野美術大学教授
長尾重武

1944年東京都生まれ。東京大学工学部卒業。東京大学大学院博士課程単位取得満期退学。工学博士。イタリア・ルネサンス、マニエリスム、バロックを中心とする建築理論、作家論研究。
主な著書として『ヴィニョーラ 建築の5つのオーダー』（中央公論美術出版）、『ミケランジェロのローマ』（丸善）、『ローマ・バロックの劇場都市』（丸善）、『建築家レオナルド・ダ・ヴィンチ』（中公新書）など。
詩集：『きみといた朝』（思潮社）、『ちいさな楽園』（思潮社）

■はじめに：「石は、貼るものではなく、積むものです。」

このメッセージは、建築の学部学生のころ、フランク・ロイド・ライトの落水荘について調べていた時に出会ったライトの言葉です。出典は今では不明ですが、妙に記憶に残っています。当時、なるほど、と思ったものでした。

カウフマン氏に別荘の設計を依頼されたライトは、川の流れる美しい森の中を歩きながら、別荘のための場所を探していました。落差はわずかですが、小さな滝が川幅いっぱいに落ちていました。この滝の上に張り出した水平線を強調した別荘を作っては、そう思い立ったのは、滝という特異点との出逢いからでしたが、その実現には、もう一つの鍵がありました。滝のある場所の右岸にみごとな岩があったのです。それが滝を造っている露出した岩盤でした。その上にさらに石を積んで暖炉とし、ライトの住宅がいつもそうであるように家の中心をつくり、そこを基点にコンクリートの床版を張り出させることにしたのでした。こうして自然の中のみごとな別荘が誕生しました。

落水荘は1936年から1939年にかけて造られ、その当時、アメリカの都市には、経済的な発展に伴い高層で壮麗な建築が、前世紀末以来、続々と建設され、古典主義建築が時代を風靡していました。それらの構造はほとんどが鉄骨造ですが、その意匠はといえば、ギリシア・ローマに発する古典的な円柱が並び立ち、円柱以外の細部も同様に古典的な細部にもとづいたものでした。こうした古典主義建築の細部や壁仕上げは内外とも石貼りでした。

「石は、貼るものではなく、積むものです」、というライトの言葉は、そのような石の使い方に違和感を覚えて発せられたのかもしれません。あるいは、石の本性からして密実に積層したものだからそうすべきだ、といっているのだと思われます。落水荘での岩との出会いとそこに積んだ石のことが私にはとても印象的でした。

このエッセイで、私は、世界の建築の歴史の中で、石がどのように使われ、かつての組石造建築がどのような形やイメージを追い求めたかについて、ごくかいつまんで述べてみたいと思います。

■日本の石と建築、そして

まず、わが国では、石は、古墳時代の石造の墓室や巨石記念物が見られますが、石燈籠や階段、また寺院の基壇や礎石、床、あるいは城の石垣、庭石、江戸時代の九州の橋などをのぞいて、建築には床面や階段など以外はあまり使用されて来ませんでした。けれども、明治時代になると、西洋建築をめざして、木骨造、煉瓦造で石貼りの建築が造られ、明治も後半になると、組積造建築の耐震補強がそれなりに可能になったと考えられます。しかし、関東大震災の経験により、煉瓦造石貼りの建築をやめ、以後、石材は床材やもっぱら鉄筋コンクリートや鉄骨鉄筋コンクリート造建築の内外装材としてのみ用いられるにとどまることになりました。ライトのメッセージとは逆に、石は貼ってきたのです。

しかし、建築の足元に、石組みや枯山水を造って、成功している例が見かけられます。おそらくわが国では、石の扱いの点では、建築より築庭ではるかに経験と実績を持っていると考えるべきでしょうか。わが国では、木の建築といえばそれなりの歴史と伝統について論じられると思うのですが、石の建築といえば最初に思い浮かぶのはヨーロッパの建築と都市でしょうか。でも、そのように性急に決めてかからずに、もう少し視野を広く見るべきでしょう。

■古典主義建築から近代建築へ

ル・コルビュジエは建築を学ぶ若い学生に向けた講話の中で、「諸君、ヴィニョーラを学ばなければならない諸君」と述べて、過去のくびきから開放されて新しい建築に取り組むことを強く勧めているわけですが、この「ヴィニョーラ」とは何でしょうか。それは、16世紀イタリアで、最も簡明に「オーダー」論を確立した建築家ジャコモ・バロッチ・ダ・ヴィニョーラの通称です。古代ローマのウィトルウィウスに端を発し、15世紀のアルベルティ、16世紀のセルリオについで、古典建築の柱式についての比例関係を理論化したのがヴィニョーラであり、トスカナ、ドリス、イオニア、コリント、コンポジット式の「五つのオーダー」を誰でも記憶できる単純な数値の比例体系として捉えました。ル・コルビュジエは、古典ギリシア以来の伝統を重視して

きたアカデミーの建築教育の中心にあったオーダー理論を、ヴィニョーラで象徴したのでした。事実、ヴィニョーラのオーダー理論は広く流布しました。古典ギリシア、古代ローマに誕生した円柱と関連した装飾手法を、ルネサンス建築は復興し、あらためて古典古代にたち返ろうとした18世紀の古典主義が、ヨーロッパの建築伝統を誇示しようと教育システムを構築してきたのです。そしてその堅固な形式美を中心にした古典主義建築の教育システムからの離脱によって、近代建築が誕生することになります。

■古代ギリシア；円柱と神殿形式の確立

ところで、オーダーの発端はギリシアにあります。ギリシア人は、はじめ日干し煉瓦と木材で建築を造っていたのですが、前7世紀末ごろから石造の神殿建設を開始しました。その際、木造の細部が石に写されていったと考えられています。当初の石材は多孔質で、表面に大理石粉を混ぜた漆喰を塗り、極彩色に仕上げられました。そのような復原図を見た方が多いと思います。けれどもアテナイとその周辺で、前5世紀の中ごろ良質の白色大理石が採掘されるようになり、総大理石造の神殿を建てるようになったのです。アテナイのアクロポリスの前5世紀後半の建築群がその典型的なもので、建築の世界にギリシア神殿の美を鮮やかに示すことになりました。そして、ギリシア建築は、ドリス、イオニア、コリントの3種類の美しい円柱と明快な神殿の形式を発明したことによって建築の歴史に不滅の光を放ちました。

古代ギリシアの構造方式は、柱が狭い間隔で並べられ、その上に梁材を渡すという、いわゆる桝(まぐさ)式でした。積み木の家のように、柱と梁で開口部が作られる方式です。柱は一本の石材で造るというより、輪切りにした石材を積み重ねて造るのが普通でした。その柱の頭の部分に装飾的な細部が生まれたのが柱頭です。地域的な特質として次第に形成されてきたもので、ドリス、イオニア、コリントという地域名が柱頭の呼称として今でも使われ、それら相互の比例関係としてのオーダーの基本が形づくられました。

■古代ローマ：ギリシアの円柱の継承とアーチの導入

ギリシアの円柱や神殿形式が、その後の歴史の中で全く注目されることがなければ、それらは一つのエピソードに過ぎず、孤立した徒花に終わったかもしれませんが、実際はローマという強力な後継者が現れたのです。ローマもまたギリシア神殿から受け継いだ三角破風や円柱を用いて神殿を建て、帝国の発展に伴いイオニア式とコリント式を複合したコンポジット式円柱を創造します。一方、円柱が取り巻くギリシアの周柱式から、正面を強調して正面にのみ階段を設ける軸性の強いスタイルへと変換されていきます。この地域でローマに先行したエトルリアの神殿形式が大きく影を落としたのです。

そして、古代ローマのもう一つ重要な役割は、建築へのアーチの導入という快挙を成し遂げたことです。曲線を描いて開口部を形作るアーチは、それだけにとどまらず、それをトンネル状に伸ばしたヴォールトや半球形の盛り上がるドームをも生み出したのです。こうした新しいモチーフや技術の展開が圧倒的な重要性を持って建築を変えていったといっていいでしょう。

■アーチの起源

アーチがいつどのように誕生したかについては定かではありません。遠く先史時代から使われていたことは確かです。2本の石を三角形に組んでつくった三角アーチがその最初のものと考えられ、すでに新石器時代の例が知られています。

古代オリエントには、石造の文化が発展していました。曲線を描くアーチがメソポタミア地方で、はやくも紀元前4000年頃には使われていたことが知られています。けれども、はじめは水路のためのトンネル・ヴォールトとしてでした。バビロンの8つの市門の一つであったイシュタル門（前575）が現在ベルリンのベルガモン美術館に建っていますが、竜とライオンの浅浮彫りが施されたアーチ門としてみごとです。また、ササン朝ペルシヤの王達のクテシホン宮殿には巨大な円筒ヴォールト天井の遺跡があります。

古代エジプトでも三角アーチが墓室や坑道等に採用されました。最古の本格的な石造建築として、エジプトのサッカラにある第3王朝のジェセル王の階段ピラミッドなど（前2600頃）が有名です。それまでの日乾煉瓦造の建築からの飛躍的な進展を示しています。ギザの第4王朝のピラミッド群（前2500頃）、とりわけクフ王の大ピラミッドは、今から見てもその施工精度は驚嘆に値し、以後のエジプト神殿とともに、耐久性を誇る巨石建造物といえるでしょう。エジプト神殿の特色は、壁体から、柱、梁、天井（屋根）に至るまで、建物のすべてが石材で造られていることです。

インドでは前2世紀ころから木造から石造へと移行し、ストゥーパや石窟仏教寺院の建造がさかんになりますが、アーチは見られません。本格的な石造建築は、7世紀以降、ヒンドゥー教やジャイナ教の建築からです。

またメキシコおよび中央アメリカでも、4～9世紀までマヤ文明が、ついで、12～15世紀のアステカ文明も壮大なピラミッド型石造神殿を発展させるなど、石造建築で注目されますが、円柱やアーチのような際立った要素を生み出すことはありませんでした。

初期ギリシア人はアーチを知っていたはずですが、紀元前2世紀のプリエネのアゴラ入口に使われるまで、ギリシアには例がみられません。

古代エトルリア人はアーチを好んで使用し、遺構としては有名なペルージアの市門があります。エトルリア人のアーチの扱いはローマ人に受けつがれ、ローマの建築こそはアーチを主モチーフとした建築といってもいいほど多彩な展開を見せました。また、アーチを円柱や角柱などと巧みに組み合わせたのです。構造技術上のみならず、装飾的側面からも、ローマのアーチはその後のアーチの展開に、決定的な役割を果たしました。以後アーチは建築の支配的モチーフとさえなるのです。

アーチという構造には、上からの荷重に対して、また自重によって、垂直荷重ばかりでなく、アーチを左右に広げる力となるスラスト（横圧力）が発生します。そこで安定性を得るために、バットレス（扶壁）や、重い壁や、支柱によってスラストに対抗し、あるいはアーチを連ねることによって解消する必要があります。こうして、アーチはしばしば重量感あふれる構造となるのです。

■古代ローマ建築の多様性

古代ローマでは、共和政時代まではギリシアと同じような建築を建てていました。けれども、前1世紀ごろから、石、煉瓦、石灰セメントなどを複合して建てるようになり、煉瓦壁に大理石を張る工法が普及し、神殿建築にも応用されるようになりました。

ローマ時代には大勢の人々が集まる広間を持つ建築が発達しました。大神殿、大浴場、市場、バシリカ、などですが、彼らはそれらをヴォールトやドームの構築によって可能にしました。

たとえば、ローマのパンテオンを見てみましょう。正面は、三角形の破風（ペディメント）を戴く8本の列柱がまさしく神殿入り口らしい雰囲気を作り出し、玄関ポーチが奥行き3本の円柱列の奥に、円形平面の単純明快なドーム建築へと導きます。円形平面は壁と列柱を交互に繰り返した古典的な装いで、その上には格天井が半球形を描くドームが立ち上がっています。直径43. 2メートルで高さが半径に等しい円筒形の上に、半球形のドームを戴いています。いいかえれば、ドームの球が地面に接することになります。このような内部の明快な形を保証しているのがその外側にスラストを受ける煉瓦造の分厚い壁の存在があります。ドームは、上に行くほど薄くかつ軽くしてあり、コンクリート構造が導入されたために可能になったことでした。そして頂部では、直径9メートルの穴オクルス（目を意味します）が開いています。そして、内部はことごとく石が張られています。

ローマのマクセンティウスのバシリカは、もともと集会施設として作られたものでしたが、交差ヴォールトの大架構のスラストを四周の分厚い扶壁によって支持しているのがよくわかります。大浴場もまた大規模な空間を持っていることで注目されます。ローマのフォーリ・インペリアーリに建っていたトラヤヌスの市場もまたヴォールトの架構がみごとでした。

アーチ、ヴォールト、ドームには、ギリシア以来の円柱が装飾的な要素として付加され、結び付けられ、アーケードやコロネードと組み合わされて、都市的なスケールで展開されました。以上のような公共建築や、劇場、闘技場、宮殿、ドムス（邸宅）やインスラ（高層集合住宅）が帝都ローマを埋め尽くし、その郊外にヴィッラ（別荘）が建てられました。

また、ローマ時代の都市建設にはまずなによりも石と水が不可欠でした。道路などのインフラ建設や建築には石が多用され、水を近傍から引くために石や煉瓦の水道橋が発達しました。

勃興してきたキリスト教は新しい集会施設や洗礼堂を必要とし、初期キリスト教建築が誕生しました。コンスタンチヌス大帝は、ドームを戴く小規模なサンタ・コスタンツァ聖堂やバシリカ型のサン・ピエトロ大聖堂をローマに建て、東ローマ帝国のキリスト教徒の皇帝ユスティニアヌス大帝はコンスタンチノープル、後のイスタンブールにドームを戴く壮麗なハギヤ・ソフィア大聖堂を建てます。

■中世の建築：ゴシックの達成

ローマ帝国の建築は、帝国の最大版図がアフリカ大陸北部から北欧を除くヨーロッパ諸国、中東におよんだため、それら広範な地域の建築に大きな影響を及ぼしました。キリスト教世界と中世に勃興するイスラム教世界に力強く受け継がれていきます。

東ローマ帝国のビザンチン様式においてはドームとともにアーチが重要な意味を担い、固有の形態を生み出しました。上芯アーチが特徴的な姿を表しています。

イスラム教の建築においても、ドームとともにアーチが重視されたことはいうまでもありません。とくに、ハギヤ・ソフィア大聖堂はイスラム教のモスクとして使用され、二本の高いミナレットを付加し、大モスクの形式の一つの先例となっていきます。イスラムの馬蹄形アーチが強い表現要素となり、ドームもやがてストラクライトの装飾的な細部を生み出していきます。

ローマ帝国が分裂してのち、西ローマ帝国では、初期キリスト教建築からロマネスク様式へと、木造の天井を石造のヴォールトに変換する試みが続けられ、半円アーチやヴォールト仮構、分厚い石の壁体の存在感を示しつつ展開されていきます。

そして、ゴシック聖堂は、一挙に石造建築



写真1　ローマの現在の日常に溶け込んで生きているパンテオンの様子。パンテオンは通称ロトンダ、広場の名前は、ロトンダ広場である。正面上部に、「アグリッパがこれを建てた」とラテン語で書かれているが、ソレハフルイパンテオンのことで、今眼にするものは、後のハドリアヌス帝によって建替えられたもの。



写真2　パンテオン内部見上げ。見えている建材はすべて、石財であるが、壁、天井は石を貼っている。構造は、レンガ積みでドームはコンクリート、上に行くほど肉厚が薄くなり、かつ軽い骨材を使用している。そして最上部は穴が開いたままである。透視画法を意識した格天井がよくできている。

を高め、花開させ、人々を畏怖すべき高みへと誘います。その技術的な達成は建築の歴史の中の一つの驚きです。新しい先頭アーチと交差ヴォールト、そして飛び梁（フライイングバットレス）による精妙な技巧に到達し、それまでの石の壁体を一挙に減少させ、その場所にステンドグラスがはめられました。ステンドグラスは輝かしいキリストの物語を語り、堂内は、深い高さに覆われ、神々しい光に満たされるようになり、その外観には、大きな薔薇窓、縦長の窓のステンドグラス、空を目指した塔や尖塔が屹立します。

ゴシック様式は最初フランスのイル・ド・フランス地域で開花します。1144年、サンドニでの小さな試みから、サンス、ラン、ノワイヨンを経て、1163年以降、パリのノートルダム大聖堂で一つの達成を見たのちに、さらに1194年に開始されたシャルトル大聖堂で最初期の本格的なゴシック聖堂の姿が浮き上がります。シャルトル大聖堂は、田園風景の中に異なる意匠の二つの塔が遠くその姿を表す時から人を感動させ、堂内に入ってもなおその感動を裏切らないばかりかさらに高みへと誘うでしょう。

1247年ボーヴェ大聖堂が着工され、これまで達成されたことがなかった48メートルもの高さのヴォールト天井が実現されるはずでしたが、1284年に崩落してしまったのでした。そして、同じ頃に着工されたパリの小聖堂サントシャペルは珠玉の名品というに相応しいでしょう。ルイ9世がコンスタンチノープルから入手した聖遺物を安置するために建設されました。立ち上がる細い柱が上へと伸びていき華奢な交差ヴォールトが天井を覆い、光の壁に囲繞された空間のなんと静かで豪華なこと。

フランボワイヤン（火焔）様式といわれる後期ゴシックのその後の展開や、イギリス、ドイツその他の諸国における試みが全体としてゴシック・スタイルを豊かなものにしていったのですが、詳細には触れられません。ただこれだけは言っておくべきでしょう。建築に使われた石がこれほどにも強靭でしなやか、かつ芸術的に高い位置を与えられたことはなかったでしょう。19世紀のゴシック・リバイバルがごく自然に誕生することになったのも当然かもしれません。

■ルネッサンス、バロック

ルネッサンス、バロックの建築は、再びローマ風の各種材料の複合に戻り、煉瓦造の躯体に石材を化粧張りする方法が一般的となり、漆喰工（スタッコ）仕上げで、石造に見せかける技巧も発達しました。

ルネッサンスは、アーチを古代ローマに倣ってとらえ直し、円柱とドームの扱いによって、以後のヨーロッパ建築に規定的な役割を果たすことになるわけですが、とりわけ建築家ブルネレスキ、ブラマンテ、ミケランジェロの三人に注目したいと思います。

16世紀初頭のローマで、ブラマンテが建てたテンピエットはみごとに均整のとれた全体を形づくり、その名を轟かせます。それはドームを戴いた円形平面の二層の記念堂で、一層目をドリス式円柱が取り巻いています。それは明らかに古代の神殿を手本にしていますが、同時代や後世に与えた影響は計り知れないものがあります。

そして、ブラマンテはローマのサン・ピエトロ大聖堂の計画に着手します。中央にドームを戴く4本の柱を置き、そこから十字形に腕が伸び、4隅に小ドームが載るホールを形づくりました。4本の柱の上にドームを載せるためには、4本の柱がつくる正方形平面に、ドーム基部である円を支持させなければならず、そのためには隣り合う柱の上にアーチをかけ、それらのアーチとドーム基部の円によってできる4つの立体三角形（ペンデンティヴ）によって支えることになります。こうして出来上がるドームをペンデンティヴ・ドームと言いますが、それを実現しようという試みなのです。このアイデアは15世紀末のミラノでレオナルド・ダ・ヴィンチが熱狂的に試みていた理想的な聖堂のイメージとかさなります。

この方法の前駆的な方法が、ブルネレスキのフィレンツェのサン・ロレンツォ聖堂の旧聖具室で作られており、その場合は壁付きのアーチとペンデンティヴが作られ、その後、アルベルティやジュリアーノ・ダ・サンガッロらの試みによってブラマンテの案に近いものが作られるようになりましたが、結局ブラマンテも実現には至らず、ドームそのものと共に完成するのはミケランジェロを待たなければなりませんでした。ミケランジェロの場合でさえ柱を強化したものにならざるを得ませんでした。

ミケランジェロがサン・ピエトロ大聖堂のドームを完成させた時、ブルネレスキのフィレンツェ大聖堂のドームと同じく二重の殻にしたのは興味深いことです。また、その正面に古代神殿の正面を形づくり、ドームと古代神殿が合体されたのです。

こうして出来上がったドームと列柱、神殿正面、さらには塔も含めた新しいルネサンスの建築イメージが、イタリアの聖堂のみならず、たとえば、パラディオのヴィッラ、ラ・ロトンダに採用され、遠くパリのパンテオン、ロンドンのセント・ポール大聖堂、さらにアメリカ合衆国国会議事堂にいたるまで、広く流布されました。こうして、国際的な古典主義建築へとつながっていくわけです。

■おわりに

ヨーロッパの石の建築という言い方がされますが、実際は煉瓦造やコンクリートも含めた複合的なものであることが多いこと、また、モニュメントであればあるほど時代の技術や意匠の限りを尽くして、アーチやヴォールト、ドームを多用してきましたが、バナキュラーな建築は組積造の分厚い壁を建てて木造の床や小屋組みを持つのが普通です。そのような組積造建築は思いのほか自在であることに驚きます。道路拡幅のために建築を部分的に壁を壊して縮小してファサードを付け替えたり、かと思えば密集して建つ都市の建築の内部では隔壁を貫き、蟻の巣のように柔軟に伸びひろがっていたりして自分の居場所が外からは掴められなかったりして困惑します。

最後に、もしただそこに在るだけで美しい円柱や、アーチ、ヴォールト、ドームがなかったとしたら建築の歴史的なイメージはずい分貧しいものになっていたと思います。幸いなるかな、というべきでしょうか。

（ながお　しげたけ）



クチャニス（トルコ、ハッカリ地方）
旧ネストリオス派総主教座、14世紀

各論1-1

シトー会修道院と東方地域

藤女子大学教授
三宅理一

1948年東京生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、同大学院修士課程を経て、パリ・エコール・デ・ボザール卒業。工学博士。芝浦工業大学、リエージュ大学、慶應義塾大学、パリ国立工芸院で教鞭をとり、現在、藤女子大学教授。建築史、地域計画、遺産学を専攻。ルーマニア、ロシア、エチオピアで中世キリスト教修道院の保存修復を手掛け、また、ポンピドー・センター、パリ装飾美術館等の展示コミッショナーを務める。
主要著書として「モノフィジットの僧院世界、異界の小都市—1」（TOTO出版,1994）、「モルドヴァの世界遺産とその修復」（西村書店、2009）、「パリのグランド・デザイン—ルイ14世が創った世界都市」（中央公論新社、2010）など多数。日仏学術交流の業績に対してフランス政府より学術教育功労勲章（オフィシエ等級）を授かる。

「汝は巌（いわお）なり」。イエスが最後の晩餐に際して使徒ペテロに送った言葉である。聖ペテロは初代のローマ総主教つまりローマ教皇となる人物であるが、出自は漁師であった。なぜかその名は「石」を意味していた。それゆえに世界宗教として発展するキリスト教会の堅固な礎となり、未来永劫それを支えていくことを運命づけられた。新約聖書をざっと読む限り、この「石＝巌（いわお）」は抽象的なニュアンスと思えるのだが、これを字義通り解釈して、教会を石で造らなければならないと考えたグループが存在した。聖ベルナルドゥスに率いられた厳格派修道会たるシトー会である。時代は紀元12世紀、中世ヨーロッパが熟成し、各地で壮麗なカテドラルや修道院建築が建て始められた時期に対応している。

*

聖ベルナルドゥスは、スコラ哲学が花開き多彩な神学者を輩出させた中世キリスト教会の中でも特に禁欲主義を徹底させた修道僧として名を馳せている。彼の名を冠したアルプスの犬、英語でいうところのセント・バーナード犬なら誰でも知っているだろう。スイスの山奥のシトー会修道院に飼われていた犬が、修道会のイデオローグたる聖人の名をつけて世に広まった、ということだ。彼がヨーロッパ各地を行脚して唱えた説教録は今でも写本が保存され、従って聖人研究もかなり進んでいる。しかし、建築に対するあまりに原理主義的な発想、つまり禁欲主義を表象すべき石の建築原理という思考の基盤がどこにあるのかは今もってさまざまな議論が行われている。聖ベルナルドゥスの説く絶対規範としての「石＝巌」の起源をどこに求めるかは重要なテーマであるが、石で建築すべてを組み上げる作業がいかに技術的に困難かを知れば、それをスコラ哲学的な形而上学の応酬から始まったとするわけにはいかないことが容易に理解できるだろう。思弁的であるべき修道僧の集団と石工に代表される技術者集団との間で同一基盤と歴史が共有されていたと考えない限り、そのようなことは起こりえないのだ。神学が建築と等価でなければならず、同時に建築が神学的思惟によって組み立てられていなければならない。形而上学のさらにまた上、つまりは超越性の世界を云々する神学が、マテリアリズムそのものに他ならない建築の材料と構法の問題と同じ言語で語られていなければならない。「もの」と精神を分けて考えることが習慣となった近代人には理解が難しいが、創設当初のシトー会はそのような不思議な二重性を抱えた集団であった。

*

基礎から壁・柱、そして屋根に到るまで建築すべてを石だけで造るというのは、ヨーロッパ世界を眺めていても、意外と例が少ない。「凍れる石の音楽」といわれるゴシック建築も小屋組に木を使うのが普通であり、ロマネスクもその点では変わらない。そもそも組積造技術が確立した古代ローマにおいても上部の覆いとなるドームやヴォールトは煉瓦を用いて架けられている。成形が容易であり、標準化ができて「粘り」のある煉瓦の方が耐震的にも施工的にもはるかに適しているわけで、ローマ人の技術者の判断はその意味で的確であった。古代世界において石材を大々的に用いて大架構を構築しえたのは、火山地域にあって煉瓦の材料となる良質の粘土が産出しないアルメニアに限られていた。地震多発地帯にもかかわらず、今日まで古代から中世にかけての遺構の多くが地震で損傷も受けずに長らえているのは、バットレスや補強材を十二分に配した構造上の特性に加えて、隙間がまったくと言ってないほど巧みに切り整えられた切石を可能にする高度の截石技術によるところが大きい。アルメニア建築の特徴のひとつは矩形の平面の交差部を覆うタワー状のドームにあり、それが典礼上の中心となる。その点では、コンスタンティノポリスから分離した独立教会を標榜しつつも東方典礼の流れを汲んでいるが、フレスコ画やモザイクではなく、もっぱら石の彫刻と架構を介して空間のヒエラルキーを表現しているのは、アルメニア人石工の本領発揮といえるだろうか。

*

つまり、アルメニア建築は石の技術そのものである。しかし、そこに表出されている神学的空間は、イコノグラフィの助けを借りて視覚的にメッセージを伝える東方教会の伝統にのり、旧約聖書や聖人伝のさまざまな情景を主題として壁面を飾る浮肉彫り、あるいは神聖獣が彫り込まれた円柱の柱頭模様が絵巻

物風に並べられる。その配置はきわめて説話的で、訪れる人々に対して視覚的・体験的にメッセージを伝える役割を果たす。ロマネスクの建築、特に南仏のそれに近いといってもよいだろう。ところが、聖ベルナルドゥスの説く石の空間は、同じ石とはいっても、こうしたアルメニア建築とは決定的に異なっている。何が違うのか。それは、人々の欲望や想像力を喚起する装飾の類が一切斥けられている点にある。石は石であって装飾ではない。窓は光の差し込む開口であって、ステンドガラスのような装飾的表現は禁止される。それゆえに後世の人間、特にモダニストたちから光と石の究極の空間といわれるようになるのだが、その背景には幾多の神学論争があった。

*

東方教会のイコノグラフィを論ずるにあたって欠かすことのできないテキストは、偽ディオニシオスと称されるカッパドキアの修道僧が記したとされる『天上位階論』である。地上と全知全能の神との間に横たわる天上世界を天使の区分によって位階的に捉え、最高位のセラフィムから人間に近い普通の天使までが戯れる神々しくも絵画的な宇宙が透けて見え、実際画家や彫刻家たちはそのイメージを拠り所にあの美しい装飾を仕上げていった。しかし、このような絵画的表現は東方ビザンチン世界を襲ったイコノクラスム（偶像破壊）運動の中で激しい攻撃を受ける。神の世界を描くにあたって人像をそれに充てることはできない、という主張が頭をもたげ、多くのイコン画が廃棄処分にあい、フレスコ画やモザイクが漆喰のもとに塗り込められていった。時代は8世紀から9世紀にあたる。当時、勃興してきたイスラームが偶像禁止を徹底させ、キリスト教世界に果敢に神学論争を挑んできた結果である。西方カトリックの世界はその影響を受けなかったが、それが十字軍の時代になって突如として降りかかってきた。その立役者たる聖ベルナルドゥスは聖地奪回のために十字軍派遣の急先鋒であり、彼がヨーロッパ中を動き回った理由は十字軍の必然性を説くためであったともいう。

*

当初のイスラーム世界が示した建築の原理は、徹底して平面性を貫くことであった。同一パターンの繰り返しで横に広がる建築。ビザンチンもロマネスクも天上に向かって大きく広がる空間を構想しているのに対し、まったく異なった空間のあり方である。キリスト教世界ではイスラームと隣り合うエジプトのコプト建築がこの原理を採用した。興味深いのは、同時期のメソポタミアのキリスト教徒たちがその地域に伝統的な組積造の技術を駆使しこぞって無装飾の石の空間を造り始めたという歴史的事実である。一般にシリア系といわれるヤコブ派（シリア正教）やネストリオス派が、勃興するイスラーム勢力に対抗するかのように大掛かりな石の聖堂を建設し始めるのである。ティグリス川上流のニシビス（今日のトルコのトゥル・アッディン地方ヌサイビン）周辺に散らばるヤコブ派の修道院やネストリオス派聖堂群は特に質が高く、アルメニアに匹敵する截石術を誇り、巨大なヴォールト天井を石で軽々と造ってみせている。シトー会建築の原型といってもよい位だ。文献は残っていないが、イスラーム勢力の偶像禁止を意識して、もっぱら石による空間表現、それも天上を示唆するかのごとく上に向かって伸び上がる空間、を試みたと思わせるに十分である。ヤコブ派はキリスト論をめぐってキリストの神性に優位を置く単性説に与し、他方のネストリオス派（唐に伝わって景教と呼ばれた）は逆に人性を重視して迫害に遭い、ペルシアに拠点を移すことになる。両者ともコンスタンティノポリスからは異端とされ、イスラーム世界の中でかろうじて生き残ることになる。比較的少人数の集団が移動しながら信仰と典礼、そして石の技術を伝承した。

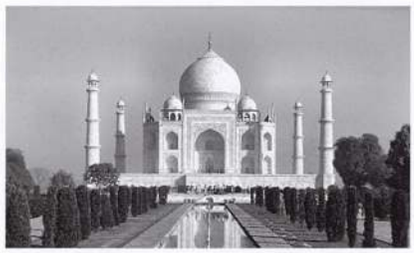
*

シリア系とシトー会の間で共通するのは、すぐれた石工集団の存在であり、しかも住民（修道僧）がそのまま石工を兼ねていたという事実である。前者でいえばコンスタンティノポリスの宮廷をバックとする建築家、後者でいえば大規模な造営組織を抱える建築家が背後に控えていたわけではない。初期のシトー会修道院建築の設計図書は大聖堂の類と違ってまったく発見されていないが、あるいは建築家が描くような図面は当初から存在しなかったということも十分にありうる。にもかかわらず、ヤコブ派もネストリオス派も独自の建築タイポロジーを維持し、修道院や教区聖堂にオリジナルのかたちを生みだし、シトー会も同様である。そこから見えてくるのは、神学を共有する技能集団、それもイスラームという巨大な「仮想的」を眼の前にして必死になって独自の組織原理をつくり維持しようとした集団であるということだ。シリア系の集団は、華麗なる東方典礼を敢えて覆して禁欲的でシンプルな空間構成原理を生みだし、シトー会は聖書の原理主義的解釈によって「石＝巌」を建築の理論的基盤となした。

*

シトー会修道院はヨーロッパ建築史の上でも重要なテーマとして認識されており、フランスを中心として研究が進んでいる。特に南仏のシトー会修道院ル・トロネは、フェルナン・プイヨンによって『粗い石』が世に問われ、ル・コルビュジエがラトゥーレット修道院の構想を練るためにここに籠ったということから、近代建築の原点としてもしばしば取り上げられ、世界中から人が訪れるようになった。シトー会修道院は禁欲を第一に掲げるが、聖ベルナルドゥスの姿勢に伺えるように排他的でもあった。十字軍とは行動をともにし、聖地パレスチナにも多くの遺構が残っている。メソポタミアのヤコブ系修道院とは典礼や教義の違いから一緒になることはなかったが、一部のネストリオス派がその後カトリックに回帰して修道会を構えるようになったのは興味深い。イラクのクルディスタン地方の山間にあるラバンホリミズ修道院などがその典型である。岩山の中腹に位置し、岩窟を利用した僧房群の外側に聖堂が谷に向かってテラス状に張り出した様はなかなか壮大である。ル・トロネのように純粋な形態というわけではなく、時代に沿って何重にも増築された石の聖堂がひとかたまりとなって突き出ているが、石のダイナミズムを感じさせるに十分である。調査を行ったのが1980年代なので、その後の2回にわたるイラク戦争で、現在修道院を維持できているかは定かではない。石の建築の何たるかを知るためには、メソポタミア一帯のキリスト教建築の検証が必要であるのはいうまでもない。

（みやけ　りいち）


タージ・マハル廟

各論1-2

インドの石

建築家
神谷武夫建築研究所代表
神谷武夫

1969年東京藝術大学美術学部建築科卒。
1976年に最初のインド建築研究・撮影旅行。以後世界各地の建築文化を訪ね42回、延べ1400日以上の旅をする。
作品に「横浜の町家」「塩川屋ビル」「ライラック・ハウス」など。
著書に『インドの建築』(東方出版)『インド建築案内』(TOTO出版)『インド古寺案内』(小学館)等。
訳書に『イスラムの建築文化』(原書房)『楽園のデザイン―イスラムの庭園文化』(鹿島出版会)『ヒンドゥ教の建築』(鹿島出版会)など。
そのほか、TBSテレビ『THE世界遺産』の「タージ・マハル廟とアーグラ城」などの監修。

世界の石造文化圏としては、ヨーロッパ、中東、インドの3大地域が傑出している。中東とヨーロッパの石造建築の源流はエジプトとシリアにあり、そこは砂漠の多い乾燥地域であるゆえに木材に乏しく、それがレンガや石による組積造文化を築いた。それを受け継いだローマとペルシアがヨーロッパと中東に石造建築を伝えたわけである。それに対して、インドは古代においては長く木造文化圏に属し、石が建築に用いられるようになるのは、国土が次第に乾燥化して木材が乏しくなる5世紀以後のことである。そのために石造文化の時代になっても石を木のように用い、それがインド建築の性格を規定することなる。

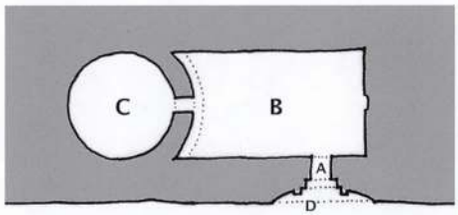
その失われた古代の木造建築と中世の石造建築との間に橋をかけるのが「石窟寺院」である。日本語では「石の建築」と言うが、英語ではStone ArchitectureとRock Architectureを截然と区別する。前者は運搬することのできる大きさにカットした「切石」を積みあげる「石造建築」をさし、後者は現地の岩山を掘削・彫刻した「石窟寺院」をさす。英語ではCave TempleあるいはRock Cut Templeなので「洞窟寺院」あるいは「岩窟寺院」の意だが、漢語による「石窟寺院」の訳が定着してしまい、石と岩の区別があいまいになってしまった。材質は同じであっても、岩山を掘削した洞窟は「石造建築」とは言わない。本稿では「インドの石」の一端を理解するために、インド最古の石窟寺院と近世の石造建築という、両端のトピックを取り上げることにしよう。


バラーバル丘の岩山

石窟寺院はインド人が発明した形式ではなく、エジプトからアナトリアやペルシアへと伝わった洞窟墳墓の形式が、さらにインドに伝来して最も建築的な構成をとるに至ったものである。これが仏教と共に中国に伝えられると、インド以上に数多くの石窟寺院が開窟されたものの、インドとは様相が違う。インドには岩山が多く、特に中部のデカン高原には堅固な岩山が至る所に露出しているので、石窟寺院の格好の舞台となった。ところが中国では地質が柔らかく岩山が少ないので、インドのように柱形や梁形をくっきりと彫刻するのに適さず、極端に言えば、今にも崩れ落ちそうな「土砂山」の洞窟が多い。そこには壁画は豊富に描かれたが、インドのような高度に建築的な姿をとるものはほとんどない。それを「石窟寺院」と呼ぶのは、ほとんど語義矛盾である。

インド最古の石窟寺院は、東インドのバラーバル丘にある。ここには30m×150mほどの巨大な岩がゴロンと転がるように横たわり、ここに4窟が彫られた。壁に残る碑文によれば、紀元前250年と257年にマウリヤ朝のアショーカ王がアージーヴィカ教の僧のために、雨季


ロマース・リシ窟のファサード



ロマース・リシ窟平面図



スダーマ窟内部



リュキア石窟墓のファサード

の修道所として造営させたという。仏教の保護者として名高いアショーカ王も、この頃はアージーヴィカ教に肩入れをしていた。

平面図は、ロマース・リシ窟の入口部分と隣のスダーマ窟の内部とを合成してある。まずAの進入路を掘り、礼拝室兼寝室と思われるB室(約6×10m)を掘り出し、さらに円形のストゥーパを祀ったと思われるC室を掘り出した。硬い花崗岩(日本の御影石)をノミだけで彫ってこれだけの空間をつくるのは、難事業であったことだろう。こうして西方の墳墓がインドでは寺院となり、中に入るとヒヤリとする涼しい空間が酷暑のインドの風土にマッチし、前1世紀から各地で大々的に開窟されるようになる。

では、なぜ前3世紀に突然石窟寺院がつくられたのだろうか。インドの大部分を初めて統一したマウリヤ帝国は、それにふさわしいモニュメントを必要としていただろう。そこへ、アレクサンドロス大王によって滅ぼされたペルシア帝国の工匠が新しい職場を求めて来印し、アショーカ王に雇われて西方の石窟技術をインドにもたらした、という説が有力である。内部の壁や天井が「本磨き」になっているのも、それまでのインドにはなかったペルシアの技術である。

それら何の装飾もないシンプルな石窟群の中で、ロマース・リシ窟のみがDの入口部分に、細かく彫刻されたファサードを備えている。後のバージャーをはじめとする大石窟寺院のファサードの原形となるものだが、ここには実に謎が多い。一見当時の木造建築を忠実に模しているように見えるので、美術史家たちは皆そう思い込んでしまったが、建築家の目から見れば、こんな木造建築はありえない。左右の2本の柱は木造にしては太すぎるし、梁が水平でなくアーチ状をしているのもありえない。屋根が尖頭アーチ状をし、庇の下部を引っ張って、雨が壁面にあたるように引き寄せているのも不可解である。

おそらくこれはペルシアの組積造建築の形を真似してアーチ形を多用し、本来のアーチの推力に対抗するための内転び柱を模しているのだろう。そして内部のC室がドーム天井、B室がトンネル・ヴォールト天井をしているのも、西方のレンガ造や石造建築の形態的模倣である(木造の国インドには、アーチやドームはなかった)。さらに問題なのは、三角切妻ではなく尖頭アーチ状をした屋根構造であって、ここでは詳しく述べる余裕がないが(興味のある方は私のHP『神谷武夫とインドの建築』の中の「リュキア建築紀行」をお読みいただきたい)、アレクサンドロス大王の東征に伴って伝えられたリュキアの石棺および石窟墓の造形の影響だと考えられる。

つまり、ここに表現されたファサードというのは、現実には存在しえない幻想的な木造建築の姿として岩の上に刻まれた、「岩の建築」なのである。この架空の、摩訶不思議なファサードのインパクトがあまりにも強かったので、これが以後のインドにおける仏教チャイティヤ窟のファサード・デザインを支配することになり、さらにこの原理を内部空間にまで延長することによって、いっそう幻想的な石窟空間を現出させるのである。バラーバルのファサードはその試作品として、後継王の命によって、前2世紀頃に彫刻されたのだと思う。

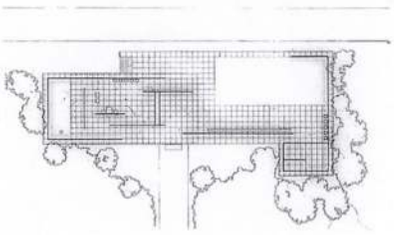
*

さて、バラーバルの石窟寺院の1900年後、インドでは「石造建築」の発展が頂点に達していた。その代表作として誰もが思い浮かべるのが、1654年竣工のタージ・マハル廟である。インドのみならず、おそらく世界で最も有名な建築作品であろう。ある大学で「芸術学」として建築史を教えていた時、教科書に使っていた拙著『インド建築案内』の中から建物を一つ選び、それをモチーフにして自由なテーマで絵を描くようにという夏休みの課題を出したら、一般学生の約半数がタージを選んで絵を描いてきた。建物を選ぼうとあの本をパラパラめくっていくと、大多数の学生は、タージの写真に目が釘付けになるらしいのである。

あの廟がそれほどに人を惹きつけるのには多くの原因があろうが、何よりも頂部から足元まで総て白大理石の「白亜の建築」であることで、墓であるにもかかわらず、その純粋で清浄な姿は、天上の宮殿のように見えるらしい。私の長年の疑問は、もし白亜の殿堂がそれほど魅力なのなら、なぜ権力者たちは世界中の歴史的モニュメントをそう造らなかったのだろうか、ということだった。宗教建築であれ宮殿建築であれ白亜の殿堂にしていれば、インドのシャー・ジャハーン帝のように世界中の人々から賞賛されたであろうに。私自身も設計時にしばしば石材業者に相談してみたのだが、彼らは、雨や酸に弱い白大理石を外部に用いることはできない、もし用いればたちまち汚く見苦しくなると言って、実例写真まで見せるのが常だった。では、最も汚れやすい部位のドーム屋根に白大理石を用いたタージは、毎年あの巨大な建物に足場をかけて磨き直していたとでもいうのだろうか。

『インド建築案内』の英訳版がインドで出版された時に、そのレセプションにきてくれた修復建築家のR・ナンダ氏が、彼の手がけた、やはり白大理石のドーム屋根のフマユーン廟に案内してくれた。そこで彼に長年の疑問をぶつけてみたところ、フマユーン廟やタージのドームを磨き直したことなど一度もない、風雨で汚くなるのは、イタリアのカララをはじめとする西方の大理石であって、インドのマクラナやクンバリヤー産の大理石はもっと上質である、ということだった。インドの石窟寺院は堅固な岩山の存在によって可能となり、インドの石造建築は良質な石材によって支えられてきた。白大理石のドーム屋根というのは、インドにしか存在しないのである。

(かみや　たけお)

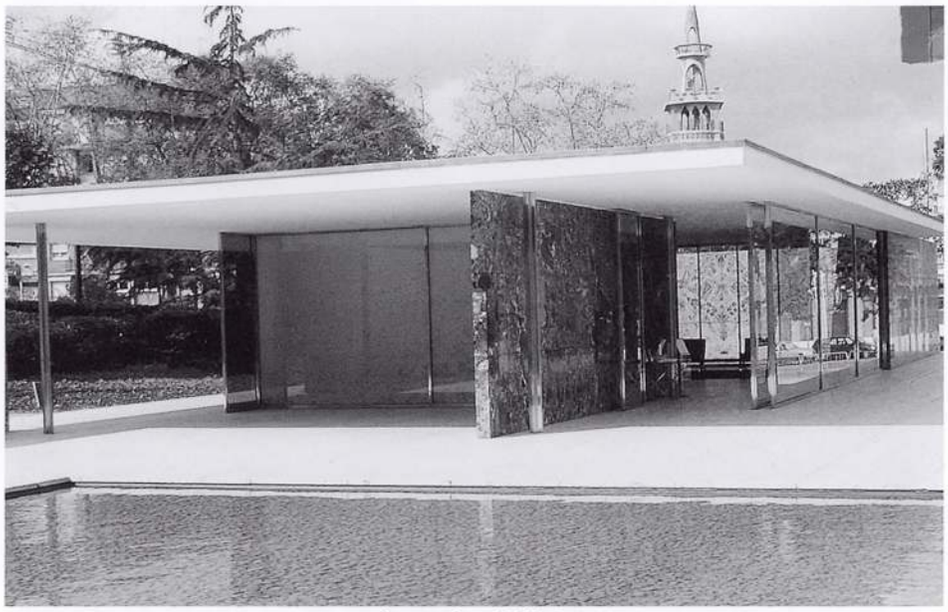


各論1-3

「自由の壁」になったミースの石
～バルセロナ・パビリオン～

関東学院大学名誉教授
渡邊明次

1958年関東学院大学建築学科卒、1962年イリノイ工科大学大学院卒。
1962～65年ミース・ファン・デル・ローエ事務所勤務。三井霞ヶ関ビル企画室、南カリフォルニア大学客員助教授を経て、1970年から関東学院大学建築学科教授。現在関東学院大学名誉教授
主な著訳書に『ミース・ファン・デル・ローエ』美術出版社、『ミース・ファン・デル・ローエ』（ワーナー・ブレイザー編集）A.D.A. EDITA Tokyo、『現代建築の源流と動向』（L. ヒルベルザイマー著）鹿島出版会、『都市の本質』（L. ヒルベルザイマー著）彰国社、『大規模なオフィスビル』井上書院など。



バルセロナ・パビリオン

バルセロナ・パビリオンは1929年に行われた万国博覧会の迎賓館として設計された。現存する建物は、その高い文化的な建築遺産の価値によって、建設当時と変わらぬ設計により再建された建築である。

*

ミースは1886年、ドイツ・アーヘンに石屋の息子として生まれ、生涯を建築及び都市計画の発展に尽くした。その創作活動は石を研磨する行動に似て、目的を達成させる強い精神力と客観性をともなった鋭敏な洞察力を持ち合わせて行われていた。

■建築的主題

ミースの建築的主題は「**社会の要求を建築の空間に翻訳する**」ことであった。その原体験は、彼の少年時代に聖歌隊員として過ごしたアーヘンのパラチン礼拝堂にある。この教会は何世紀にもわたる建設の長さから、低層部をビザンチン様式に、上部層をロマネスク様式に造られている。「**それはあらゆる偉大な様式が通り過ぎたが、建てられた日そのままにそれらは印象的に残っている**」と、後にミースが回想するように「**時代の建築表現が普遍的な建築美を生む**」のだと彼を確信させていた。

*

ヨーロッパの建築界は、ミースが設計所員として働く20代まで「古典主義建築」の真っただ中にあった。建設現場を見るミースは鉄とコンクリートによって構造を造り、外装だけを石で囲う建築に、強烈な時代錯誤と社会趨勢からの建築の遅れを感じた。

その遅れを取り戻すために、1919年に鉄とガラスの高層ビルを、1922年にコンクリート造事務所ビルを発表した。続いて、1930年にコンペ作品として、石の慰霊碑を提案した。この一連の創作活動は各々の建築材料の特性を見つけ出し、時代に合った建築の独自性を見定める作業でもあった。

*

1923年には、当時一般的に造られていた四角の煉瓦住宅を解体し、ランドスケープを煉瓦壁の操作によって「住まう空間」に引き込む住宅構想を発表した。

バルセロナ・パビリオンは、それらの作品を基礎に設計された建築である。

■プランニング・コンセプト

世界万国博覧会は、どの国も国の威信をかけて参加する行事である。それは国の成熟度とその国の国際的な世界市場の役割を示す場でもある。ドイツは、工業製品の展示ブースを別棟に設けた。そのため、パビリオンは開催国スペインの王を始めとする各国の要人を迎えるレセプション用の迎賓館として設計された。

パビリオンの敷地は、展覧会場の中に各会場を繋ぐ連絡通路の一部にあった。従ってプランニング・コンセプトは博覧会場全体の都市的スケールから編み出された。

万博は国際的なイベントである。ミースは大観衆が集う喧騒極まる広い都市的会場にあって、このパビリオンの役割を如何にあるべきか問うたのだ。

ミースは、この設計プログラムを「要人達の休息場」つまりイベント会場の「騒然とした無秩序の会場」に対し「静かな秩序ある空間」を提供すべきであると考えた。何よりも別棟に展示してあるドイツが製造する工業製品の建築材料を、この迎賓館で試し、その建築としての細部を提示することが課題であった。

*

ミースの設計行為は、既に準備されていた。つまり、時代遅れの古典主義建築の「**静力学的形態システム**」を脱却し、先行したドイツにおける同時代の芸術画壇の流れ、つまり「**動力学的形態システム**」をどのように建築に組み込み、真に望まれる工法を見付け、どう建築材料を蘇らせ建築化することができるかにあった。

このパビリオンの建設計画は、期間内に建設し万博後に解体し、敷地を元に戻すことが約束されていた。従って、全ての建設を運搬可能な組み立て方式で行われた。

*

石造建築が奏でる普遍的な美は、その時代の建造技術が貫く石を積み上げる「技術革命の技と技法」の表現にある。何世紀にもわたり「より広く、より高く、より可憐に」発達したゴシック様式の建築美も、その「細部にこそ美の神が宿る」とミースは考えていた。

*

歴史的にまだない「鉄とガラスの建築」に素材を生かした組み立て細部が考案された。長い模型のスタディーの結果、構造方式を「構造体の自律」に修正し、躯体から独立した「自由の壁」の空間構成に辿り着いた。「これは発見だった」とミースは後に述べている。

■空間構成と空間秩序

迎賓館は鉄骨造である。一般的に使われたラーメン構造による。その総計八本の柱は、四本のL型鋼を自立する十字型に組み立てられた。I型鋼材の梁は、梁全体を薄く保つため、バランスの良い「持ち出し梁」が四方に設けられている。また、敷地全体を囲う大理石の壁も、下地に鉄骨材が組まれ、その上に積まれた。

パビリオンはトラバーチンの基壇の上に建てられた。その前面の庭に広い泉が、後方に小さな泉が設けられた。それらは、いくらか高い大理石の壁に外周をなぞるように建てられ、喧騒な外部を遮断し、パビリオン独自の内部空間を擁護している。

*

迎賓館の軒は深く、日中は前面に広がる泉の陽炎がきらきらとその軒裏を照らしている。

前面からやや奥まった所に緑の大理石の壁が、クローム板で被覆された微かに光る十字柱から明確に外され立っている。その前面を塞ぐようにガラス壁が立ち、奥にある貴賓室の広間へと誘っている。

一方、大理石の裏側には、泉に沿って反射を避けるガラス壁が、天窓の幅を受けて二枚設けられている。その前に、奥まった泉側のテラスが幾分突き出したガラス壁によって造られた。ガラス壁は、さらに延長され貴賓室を囲み、広間の領域を外部に明確に示している。

*

貴賓室の広間の中央には、ミースが惚れ抜いて石切り場から持ち込んだ「赤みを帯びたオニキスの大理石の壁」がまるで一つの芸術作品の様に置かれている。選択したオニキスの高さが建物全体を決定づけた。ここに石を知り尽くしたミースの原点が実証された。

*

貴賓室の広間からガラス越しに、緑の大理石に囲まれた小さな泉が見える。その中にジョージ・コルベの裸婦像が、いくらか頭を下げ両手を優美に広げて立っている。それは、あたかも迎賓館の屋根際を空間的に支えている姿に見える。長い石造建築の歴史に於いて、壁に刻み込まれていた彫刻を壁の外に出し、他の建築要素と同様に芸術の自律性を訴えたのである。

*

ミースは、建築的な動力学的形態システムを各々の建築要素の対峙によって達成させた。「柱対壁」、「構築されたものとされないもの」、「透明のものと不透明なもの」、「開かれる空間と閉じられる空間」、そして、「動的に光る泉と静的な寂光を放つ泉」。パビリオンに示された方法は多様である。それらは劇的な空間シークエンスを生んでいる。そのシークエンスは建物全体を回遊し、部分から全体に、全体は部分に関係しながら、材質感と色感が細部に付加され、総体的な美しいコンポジションとなって建築の芸術を創っている。

*

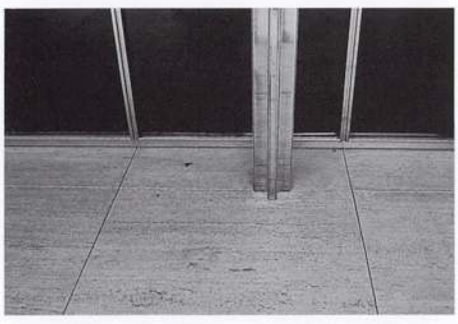
同時期に設計されたトゥーゲントハット邸の女主人は次のように述べている。

「ミースの内部空間は、生活空間における光の意味を再生させ、広い空間は自由を与え、閉鎖的な部屋では決して望めない穏やかな空間のリズムがある。このような所では、人間は芸術や花のように生き立つことができるのです。小さなリズムの変化こそ意味を持ち、私たちはこの自由な空間に戻ることで、気分を解放することができました。」

■建築言語

パビリオンで示された構造体の自律と自由の壁は、ミースの建築言語になった。それは、ミースが政変によって移り住んだアメリカ時代に結実した。構造体の自律は橋梁システムの吊構造を発展させ、社会が求める大空間に建築化した。自由の壁は、構造が創る新しいフリースペースの中に造形化し、近代の多様な社会の要求に翻訳された。自由な石壁の建築言語は、棟を成すブロック計画に反映され、20世紀の回遊する都市空間を創り上げた。

(わたなべ　めいじ)





裸婦像



親和銀行本店

各論1-4

白井晟一における石の「発見」

建築史家
西日本工業大学准教授
倉方俊輔

1971年東京生まれ。早稲田大学建築学科博士課程満期退学。
現在は西日本工業大学デザイン学部建築学科准教授、奈良女子大学非常勤講師。建築系ラジオ共同主宰。
著書に『吉阪隆正とル・コルビュジエ』(王国社)、共著に『東京建築ガイドマップ』(エクスナレッジ)『伊東忠太を知っていますか』等。

白井晟一の親和銀行本店は石の饗宴だ。第1期（1968）の磨き上げられた白トラバーチンが見るものに迫り、黒御影石とコントラストをつくり出す。第2期（1969）の前面道路に沿ってカーブした壁は小口を野面風に見せて、ビシャン仕上げのカーブが滑らかな黒御影石の下にある。インテリアを支配しているのも大理石やキャストストーンで、素材本来の色合いの差も、磨き・小叩きといった仕上げの差違も、光の中で溶け合って、肌合いの差と名付けたほうが適当だろう。それが単純な名称で指し示しがたい、各部位の個性になっている。

ここでの特徴は、物量として石材が多く使われていることではなく、各々が別の表情を持っているところにある。天性の違いに、磨いたり叩いたりという人の手を加えて、あるものは洗練され、あるものは粗野な印象を受ける。様式的な細部も幾何学な形態も、そのものだけを見れば、同じ石である。動きを感じさせるものも、じっと留まったものもあるし、艶めかしく穿たれ、毅然と飛び出して、ばらばらな石が競演しているように思える。白井の建築に対して、静謐という言葉が使われ、また官能的と評される。対照的にも思える二つの形容が両立するとすれば、くんずほぐれつの動的平衡によるものだろう。手すりや調度品などの細部処理がそれに興を添え、効果を高める。その中心にあるのは、それぞれの個性を露わにした石々である。

とはいえ、それらの石はすべて共通する性格を持っている。表面的であるということだ。フェイクと言ってもいい。荒々しいテクスチャーであっても、実際には積み上げているわけではない。鉄筋コンクリートの表面仕上げであって、それは例えば、白トラバーチンの縦目地を規則的に二段飛びで広くするといった手法で利用されている。

ただし、これが後の「ポストモダニズム建築」のような、露悪的なまでのギャップの強調でないことも分かる。観念的な断絶の表現で事足れりというのではなく、ディテールにこだわって構成されているのである。設計者自身が、ここに虚偽の意識を感じていたとは思われない。その意味で自然だ。したがって、キャストストーン（擬石）にしても、代替物ではなく石材の一変種として用いた印象を受ける。



松井田町役場

このような石の用法は、親和銀行本店の以前から、白井の建築に特徴的なものだ。例えば、松井田町役場（1956）はどうだろうか。バルコニーは緩やかなカーブを描きながら横に拡がっている。その両端を石の壁が支えている。白い壁面と好対照をなす多胡石だが、実際のつくりとしてはコンクリートの上に貼られたフェイクである。それにしても、壁体の厚みを強調するようにドアを一番奥に寄せ、楣石を配して、その下部を微妙に湾曲させている。注意深い細部意匠によって、かつて石が持っていた存在感を取り戻そうと試みているようだ。

表面的である。フェイクである。あるいは虚偽であるというと聞こえが悪い。しかし、だからこそ石という素材が迫ってくるのだろう。これは白井による石の使用が構築的でないことによる。石は何かの機能に奉仕しているのではない。それ自体が表現である。全体を構築する一つのパーツとして収まっているのでもない。各々が生々しい個性を発揮して、調和／拮抗に参画している。ここにおいて石は、構造材としての使命や、様式的統一への奉仕から解放されることで、私たちが古代や中世の建築から感じる石の存在感を受け継ぎ、より強調している。ヒエラルキーから解放された、いわば無重力の石。構造的・様式的に見れば虚偽であるにもかかわらず、それは直接に素材として見る者に迫ってくる。

素材の肌合い、構成の無重力感、全体に回収されない細部存在。これは白井が石以外を用いた時にも同じである。ただ、その特質に石は最も適した素材であり、後年になるほど石への志向は顕著になっていく。

さて、こうした直接性は、白井の何に結びついているのか。彼の文章にはいつも、形骸化に対する嫌悪がある。1956年の有名な「縄文的なるもの」では、「江川氏旧韮山館」（江川邸）を論じた。これを「保護建造物には指定されないし、もちろんジャポニカの手本とはならぬ」、機能的に解釈しようとしても「逆算の説明」に終わってしまうものと見た。「文化の香りとは遠い生活の原始性の勁さだけが迫ってくる《中略》武士の気魄そのものであるこの建物の構成、縄文的な潜力を感じさせるめずらしい遺構」として称揚した。ここには、歴史や国家という標本箱の中に虫ピンで留めるような建築観に対する、あるいは機能的な建築観に対する違和感が示されている。「『友よそんな調子ではなく、もっと力強い調子で』と語ってくれる建物」とも形容する。おさまりの良い「文化」ではなく、肉声のごとき直接性を江川邸に見出したのだ。

同様の精神は、同じ年のエッセイ「豆腐」にも流れている。豆腐の「美」とは何か。それは用の美のようなものである。しかも、その「用」は、豆腐がどのようにまな板の上で切られ、使われるかという日常＝「常」を背景に持つとして、白井は続ける。「かく『用』は『常』と善において一体なることを示唆する。だから西洋人には、かかる豆腐は曖昧であり、不可解だと思う」。それは一つの「完全なるもの」である。「理性が、本能や自然感情の領域にせまりうるのはしれたものだ。わずか豆腐の、生成要素の雑多な豊富さ、機微な技法がすでにとらえ難いのである。あらゆる部分が弁別できないほど、緊密に結合して一つの全体のうちにとけこみ、渾然たる調和に統一されている」。ハイデガーを思わせる調子で、白井は豆腐一つが「ある」ことに驚く。目前にある形は、人間の歴史や文化と骨絡みになりながらも底無しであり、それが再び私たちの日々をつくると説く。本当の存在とは単純で、直接的で、深淵で、教条的な歴史や国家の理解に収まらない。目の前のものこそが、歴史だと言うのである。

＊

設計者としての白井は、そんな「江川氏旧韮山館」や「豆腐」を目指した。与条件等に応じて、全体の形態においてそれが強い場合も、部分において実現させようとしたものもある。

前者の極が「原爆堂計画」（1955）だろう。白井の意志は、単純で、斬新で、しかも歴史や文化との紐帯をそれ自身の中に持った建築の創造へと向かっている。形式化された歴史や国家の代償物はつくりたくない。はっと発見させられるような直接性を生み出したい。そんな心情は「悲劇のメモリィを定着する譬喩としてではなく《中略》貧しくともまず、かつて人々の眼前に表われたことのない造形のピュリティがなにより大切だと考えた」という発表時の一文によく表れている。「譬喩」という喩えからして、彼はハイデガーの言うヘルダーリンのような詩人を、念頭に置いていたのかもしれない。日常の中にありながら、馴化を超えて、存在の本源に人々を誘うような。しかし、それが形態を通じて一人の人間から設計できるという確信は、いたって建築家的である。さらに言えば戦後建築家的である。その意識において、白井は決して周辺などではなく、近代建築の、モダニズム建築の、戦後建築の中心にいる。その態度は既往の国家観や体制への懐疑としても、理想的な直接民主主義を思わせる直接性の希求としても捉えられ、昭和30年代の白井が伝統論・民衆論の範疇で認識されていたことも、あながち誤解とは言えない。

先ほどの後者に関して言えば、アルカイックと洗練が表裏一体であり、全体を構築する一部材には収まらず、生々しい固有性を発揮する「江川氏旧韮山館」や「豆腐」や「原爆堂計画」のような存在の全体が、冒頭から親和銀行本店を例に論じている白井の石である。全体に支配されない石こそが戦後民主主義の表現だ、と断じてしまっては単純に過ぎて誤りだが、そうした解釈を可能にする在り方であり、その同じ様態が昭和40年代以降は新たな文脈で読まれ得たところに、彼の建築家寿命の長さがある。

自邸である虚白庵（1970）は、取り合わされた象徴的な物体が相互に意味を発生させる空間として捉えられるが、中でも印象的なのは中庭に置かれた古代ローマの柱頭だろう。この石から連想されるのは、よく知られた堀口捨己の言葉ではないか。

「私（堀口捨己）はかつてギリシアのパルテノンの傍に立ったことがあった。パルテノンの列柱の一つが修繕のために地の上に１個１個がばらばらにして横たえてあった。その柱頭の所を見入って20代の私は思わずうめき声を上げた。学校で習わされたドリア風の柱頭とは全く異なった生きもののごとき在り方であった※」

白井より10歳年長の堀口は、白井より５年早い1923年に渡欧した。そして、かつて様式主義的に馴化された姿で習ったギリシアの柱頭が、直接的に生々しいものであること、「これはギリシアの地に生れて、豊かな世界に育ち上がったもので、アジアの東のはしの育ちには、歯のたつものでないことをはっきりと知らされた」。先ほどの白井のエッセイ「豆腐」の表現を借りて言えば、「美」の「用」があり、それが「常」に根ざしているという発見に衝撃を受けたのだ。この地点から、堀口の眼は日本の伝統、待庵や桂離宮に向かっていった —— と本人は説明している —— が、白井はその「生きもののごとき在り方」から、堀口とは別種の和洋の弁証を創出した。このあたりは1920年代の洋行時代のもたらした思想の共通性と差異として興味深いが、その鍵となるのも石である。昭和40年代以降、白井の建築は象徴性の面で捉えられることになる。実際に建築にみられるのは、意味の確定できない象徴である。人はその隙間を意味で埋めようとする。だから彼のまわりでは、多くの言葉が費やされる。「ある」ことの衝撃へと誘う沈黙の石。そこに変わらずに流れているのは、彼が抱いた直接性への希求である。

白井晟一という建築家は、他の多くのモダニストのようには形態的な始源を目指すことは無かったが、その代わりに素材の始源を求めた。そして、私たちの目には確かに、石そのものが「発見」されたように映る。それは、最高度に濃密な意味は直接的なもの、身近なものの中にあるという白井の建築思想の一帰結である。

※堀口捨己「数奇屋造と現代建築」『建築文化』1956年１月号

（くらかた　しゅんすけ）

各論2-1

元禄の学校建築群 取り巻く長大な石塀

閑谷学校資料館館長
竹内良雄



講堂（国宝）・習芸斎・文庫などと石塀

■城下から遠い東備の地に

岡山県南部を走るJR山陽本線の東の県境は往時からその険しさで知られた船坂峠であるが、峠より二つ手前の吉永駅で降りて南側の山間に向かってタクシーを走らせること7,8分で閑谷学校に着く。春や秋は大小の池を巡りながら40分ばかりを歩く方がむしろ快いというものだ。鉄道が切り開かれる明治の半ばまでは瀬戸内海側の山陽道（現在の国道２号）が主要交通路であったから、閑谷学校へはこの南からの谷筋を紆余曲折しながら入って来るのである。あの頼山陽が武元君立教授を求めてやって来たのは暗くなってからだったから、「閑谷曾て誦ず君の記文、倒れ行き今夜仙源に沿う、暗中模索して佳境を過ぎ、纔星行に就いて石門を認む」と、やっとの思いで学校の南限に立つ石門に辿り着いたのである。４メートル弱の磨かれた花崗岩が２本抜きん出ていたというのだから奇異な景観であったろう。いまでは１メートル余りを覗かせているだけである。「図らざりき厳林の窟に此の絃誦の叢あらんとは」は菅茶山の長詩の一節である。深い谷筋を巡り巡ったあげくの果てに豁然と開け迫る閑谷学校の偉容は、訪れ来る人々に驚嘆の声を発せさせたのである。

■目にする元禄の学校建築群

「儒道興隆　天下泰平」を生涯の治世の基本に据えた池田光政は、岡山城下に武士の子弟を学ばせる藩校を早くに開設したのにつづいて、庶民にも儒道=人の道を教え及ぼそうとしてこの清閑の地に学問所の建設を思い立った。初期の姿は聖廟も講堂も草葺き屋根の質素で小規模なものであった。現在目にするのは光政の次の綱政の時代、元禄14年（1701）に完成した学校建築群であって、光政の「学校のこと後世までも廃せざる様にすべし」の遺志を、土木巧者たる重臣の津田永忠が知恵



現在の石門、上方は山陽高速道



校門の外側の石塀の連なり

1941年岡山県備前市生まれ。岡山県立和気高等学校閑谷校舎・岡山大学文学部国語国文学科を経て高等学校国語科教諭に。大阪府立山本高等学校に８年間勤務の後帰岡。2001年３月岡山県立和気閑谷高等学校を定年退職。４月から特別史跡閑谷学校の資料館に勤務、資料館内外の管理とあわせて資料収集や研究・顕彰活動に専念。主な著述に『岡山県立和気閑谷高等学校創立三百二十五年記念誌』・『評伝白木豊の生涯とその歌』・『論語百章』、主な編集物に『閑谷学校研究』（年刊研究誌）・『閑谷学校ゆかりの人々』・『閑谷学校あいうえお論語』などがある。備前市文化財保護審議委員。

と技術と心血を注いで結実させたものである。国宝指定の講堂をはじめ聖廟・芳烈祠(現在の閑谷神社)・習芸斎・飲室・文庫など、備前焼瓦をのせる豪壮で明快な建築群に並んで、江戸時代ずっと「光政の御居間」と呼ばれてきた簡素な茶室のような小斉は、これだけ備前焼瓦をのせられないままでその存在感を誇っている。

■精巧な石組みと柔らかな感触



これらの学校建築群を765メートルに及ぶ石塀が取り巻いている。南面の外側は2メートルを越す高さで威圧感もあるが、受付門を入って内側の広庭に立って見渡すと大人の目線より少し低いぐらいで、しかも頂部を蒲鉾状に丸く仕上げているから抵抗感がまるでない。硬質の素材がむしろ柔らかく暖かく包んでくれるから不思議である。4つの門を控えながら200メートル余りに続く南側と、丘陵地の中腹に向かって伸びる東側の石塀は、目にも手にも直接触れることができる「切り込み接ぎ式」のそれである。大きな割石の接合面を隣り合う石のどの接合面とも精巧に組み合わせているもので、表面部分だけでなく内奥数十センチまできちんと接合させているから強固な仕上がりになるのである。見る人はだれも表面の接合の見事さに感嘆するが、石工の計算や技術は見えない奥まで及んでいるというわけである。北側の丘陵中腹部を東西に流れる石組みと西側を半ばまで下るそれとは「打ち込み接ぎ式」と呼ばれる。積み重ねただけの目の粗いもので山に降る雨水の排水を計算に入れてのことである。決して人の目に遠いからと手を抜いているわけではない。排水の点では先ほどの「切り込み接ぎ式」の石組みについても、その中には同質の割石が水洗いされて詰め込まれていて、広庭に降った雨水はきれいに静かに外に排出されてゆくのである。

■石工棟梁河内屋治兵衛

閑谷学校の石塀はその精巧さにせよ発揮された美的センスにせよ、これまで岡山藩が抱えていた石工集団のものではない。一国一城の時代を迎えて城壁や石垣を築く各地の石工集団は解体分散し失業することになるが、池田家の儒式の墓所を築こうとした光政は津田永忠に場所の選定を命じるとともに、優秀な技術を持つ新たな石工集団の雇用を急いだ。この時見いだされ呼び寄せられたのが泉州の石細工の棟梁河内屋治兵衛とその集団である。閑谷学校から北へ10キロほどのこれまた山深い敦土山(和意谷)一帯に、犬島から引き上げた巨大な花崗岩を彫って祖父輝政夫妻と父利隆夫妻の墓碑を立て、儒式の和意谷墓所が完成したのは寛文7年(1667)のことである。治兵衛はその技量が認められて岡山藩のお抱えに登用され、永忠と治兵衛のコンビによる土木開発はあちこちに成果の石造物を残すことになった。閑谷学校の創設は寛文10年(1670)であるが、石塀の完成は現在目にする学校建築群が成った元禄14年のことである。

■石塀に込められたもの

岡山県東部のこの地方は流紋岩の分布地帯である。石塀に使われた石材には周辺の谷筋から切り出したこの流紋岩が使われている。最初に触れた石門や泮池に架かる石橋や学校建築物の基礎石などは、藩が以前から切り出しを進めており、和意谷の儒式墓所にも用いられた犬島の花崗岩が当てられている。膨大な量を必要とする石塀には安価に済む現地調達の石材が用いられたということである。


雪の遊歩道と長く続く石塀

それにしてもこの長大で独特で優美な石塀についてなんのためにという質問をよく受ける。すぐ東が播磨との国境ということもあって城壁とか防塁とかの軍事的解釈を優先させる向きもあるが、それにしては全体的に高さが不足する。とりわけ山側の石積みの低さはまるでその役目を果たしようがない。一番現実的なのは山間部の畠などに見る「猪除け」という解釈であろうが、今でも鹿や猪の侵入の形跡は日常茶飯事である。閑谷学校の石塀にはこうした物理的実用的意味をあまり当てはめようとしない方がよいのではないか。石工職人たちの気の遠くなるような肉体労働の積み重ねが積み上げた「形」には、世俗世界と学問空間との目視的実際的区切りという、そうした「結界」ともいうべき精神的な意味・「心」が込められているのだとするほうが相応しいというものである。

(たけうち　よしお)


切り込み接ぎ式の石組み


打ち込み接ぎ式の石塀と北門


講堂の裏手山側に見える石塀

各論2-2

地球を庭に見立てると…
～イサム・ノグチと石の場合～

武蔵野美術大学芸術文化学科教授
イサム・ノグチ庭園美術館学芸顧問
二期リゾート文化顧問
新見　隆



1958年広島県生まれ。慶応義塾大学文学部フランス文学科卒業。
西武美術館・セゾン美術館の学芸員として展覧会の企画を担当。現在は武蔵野美術大学芸術文化学科教授。その他にフリーランス・キュレーター、ミュージアム&アート・コンサルタント。小さな箱に雑多なものを詰め込んだ箱の作品やコラージュなどを作って、1994年、1997年と「未来の娘たち」と題する個展を開く。
著書には『空間のジャポニズム―建築・デザインにおける日本趣味』(INAX ALBUM 1992)『モダニズムの庭園と建築をめぐる断章』。(淡交社、2000) など。

■石に出会ったノグチ

舞台装置、インテリア・デザイン、陶芸、庭などのランドスケープと、じつに幅広い活動をして、さまざまなジャンルを横断したマルチ・タレント的才能だった二十世紀きっての芸術家イサム・ノグチだが、やはり本業というか、真骨頂は、彫刻家であって、イサム・ノグチを「世界のノグチ」たらしめたのは、最晩年、香川県牟礼町でおこなった、石の抽象彫刻群である、というのは、今日、誰もが異論の無いところだろう。

生前のノグチに、その昔駆け出しの学芸員だった当時、上司の陰に隠れて展覧会のオープニングで挨拶したかしなかったかていどの私には、ノグチと石について話す資格はとうてい無いような気もする。

ただ、以降、様々に募らせていたノグチ芸術への疑問や思いを、何とかかんとか「イサム・ノグチの北大路魯山人」二人展という、展覧会のかたちにし、やがて、高松牟礼町に残された仕事場と自邸を、美術館として開館しようという事業にも、末端ながら加えてもらい、いろいろ勉強が出来たのが、私にとってこの十年間ほどの、大きな、意想外の歓びであって、また、生前のノグチをよく知る多くの方々に、様々なかたちで教えられたのである。

なかでもとくに、ご自身石彫刻家にして、生前のノグチのパートナーであり、パトロンでもあった、和泉正敏さんに聞いたことはやはりもっとも群を抜いて多くて、ただただ感謝するばかりだが、和泉さんからの受け売りや、自分で少しばかり考えたことをも含めて、書いてみることにする。この原稿も、どうやら和泉さんの推薦によるもののようなので、とりわけなのだが。

周知のように、ノグチを、四国、香川に呼んだのは、五十年代、六十年代の、日米の一大文化フィクサー、プロデューサーだった猪熊弦一郎画伯である。パリのユネスコ庭園の設計を依頼されたノグチが、日本庭園にふさわしい石を求めて、相談相手の作庭家、重森三玲と徳島の青石を探しに訪れた時に、香川県の当時の辣腕知事、金子正則さんに紹介し、そこで庵治石の産地である牟礼町に、石屋の息子だが、墓石ばかりをつくることにはとうてい飽きたらず、石を使ってとんでもなく面白いことが出来ないかと、ユニークな夢を抱き「石のアトリエ」を立ちあげた若者和泉正敏を紹介した、というのが経緯らしい。ドウス昌代さんによる、渾身の評伝、『宿命の越境者』にもそう書いてあるし、いろいろな人から聞くとそのようである。

まあとにかく、それ以来、ノグチは六十年代後半から、亡くなるまでの二十年余り、春から秋の気候の良くなる時期には、ここ牟礼の、屋島と五剣山のはざま、夏の酷暑の時にも、涼しい風の吹く、白い砂の涼やかな仕事場に棲みつき、和泉さんはじめ、石のアトリエのスタッフと、日夜たゆまぬ仕事をしていったのである。

■石彫家という人種

ノグチはとりわけブランクーシのアトリエでの仕事以降、塑像とともに、西洋彫刻の伝統たる、大理石による石彫刻には馴染んでいたといっても、もっと鑿の入り難い、花崗岩とかあるいはもっと硬い石、玄武岩との出会いは、ここ香川県牟礼町で始まったと言っていいわけだ。

ノグチと和泉さんとの二人三脚が、そこに開始された。ノグチはもちろん、年齢的にも師であり世界的に活躍する芸術家だったわけだが、石を介在にして、師弟の関係を超えた、さまざまなコラボレーションが実現されていったのは、想像に余りある。

真の創造の秘密とは、そういうモノじゃないのだろうか。まず考えてみても、石彫というのは素材を探すのがとにかくたいへんな作業である。世界中を二人が歩き、あるいはインドで、あるいはスエーデンで、赤く、黒く地中から出てくる石を、あるいは探し、あるいは運び、あるいは集まった集積地を見て選び選びして、戻ってきた石とやっと向き合うのである。

牟礼町じたいが、世界から石が集まると言ってもいいのだろうが、裏にそびえる、五剣山のそこここに点在する、石切り場の澄んだ空気もまた、壮絶で神秘的である。

地球の肉体そのものである、岩盤に鋼を打ち込んでいって、ダイナマイトなどで、崩してしまうわけだが、その地響きや崩れ去る岩盤が底に雪崩れるさまはまた、壮絶で華麗な、ある種の清清しさと無辺の寂しさを見る人間

に与える。ほんの少し山をあがって森か茂みに隠れた一角を抜けると、いきなり、大きな、途方もなく巨きなと感じる、球戯場のような、何十メートルにも掘り下げられた、すり鉢状の窪みが現れる。日曜なら、静かに鳥の声が木霊して、一見、古代か何かの廃墟のようでもある。石切り場とは、それほど、一種、荘厳な厳粛さに包まれている場所である。 石彫家は、そうした、峻厳さを出発点にせざるを得ない、ユニークな人間たちなのである。

だから自然そのものを相手にする彼らのライヴァルはといえば、じつは同業彫刻家たちではない。そういう輩がもしいたら、つくるものはたかが知れているはずである。

彼らは、大阪城の石組を溜息をつきながらも、睨んで見あげ、皇居の巨大な礎石に感嘆し、呉の旧海軍工廠のドックの石組に見惚れている。そうして、彼らの仕事場に帰ってゆく。そしてさらにそれは、ストーン・ヘンジであり、クノッソス宮殿であり、ルクソールの神殿であり、インドでは、アジャンタやエローラの岩肌を刳り抜いた石窟寺院や、ジャイプールの天文台遺跡、はては、マヤのテオティワカン、インカの石の空中都市、マチュピチュなのである。

ノグチは、戦後すぐに、ある財団の奨学金を得て、これらの、謂わば「世界遺産群」を二年間かけて回り、その後、壮大な庭に仕事へと歩み始める。

牟礼町から海岸沿いを行くと、静かな寺の町、志度に、志度寺があって、ここに謡曲「海女の墓」でも有名な、大きな石積みの、もうぼろぼろに崩れた、何とも言えぬ肌合いで、貫禄悠然たる「海女の墓」がある。たしか、大臣と契りを結んだ海女が、大臣が海中に落とした宝の玉を、息子を託す替わりに命懸けで拾う秘話だったと記憶する。以下これも、渡辺保さんの、『友枝喜久夫仕舞百番日記』の読み覚えだが。

海の竜というか蛇に襲われそうになった海中の海女は、玉を胸に埋め込んで守り、命と引き換えに船にあげるのだった。何百年かのあいだに、取り替え、すげ替えられながらも、姿を変えて、風雪にぼろぼろに溶け、擦れて崩れながら、そこにじっとたたずむ、石積み。

「この石には、どんな彫刻も敵いませんね」とノグチは言っていたと、これも和泉さんにきいた。そして、彼にもじっさい、吃驚するほど素っ気ない、そしてシンプルな、何かを拒否したような、石彫作品「海女の墓」がある。どうどうたる四角の台座に、これも雄渾な丸い円盤がのっただけのものである。

私には、この作品と「海女の墓」への憧憬は、ノグチ自身の母親観を表しているように思えてならないのであるが、またそれは別の話としておこう。

■禅的なもの、庭へ

和泉さんは、よくノグチ芸術の本質を、「禅的なもの」と呼ばれておられるが、私にもそういう側面はよく理解できる。

この場合、禅というのは、和泉さんが言う通り、実際のスケール感が自由自在で、伸びやかなことである。場や環境に寄り添っていて、それにとらわれるようでいて、その実、とらわれていない。

石彫の場合、モダンでニュートラルな美術館のような空間が似合うものもあるだろうが、やはり多くは、自然のなか、土のうえで、しかもその土は、自身が鑿ではつった、石片の細かい破片が土や砂と混じりあっている土がさらに相応しい。土は西日本に特有の、白い土でなくてはかなうまい。関東ロームの黒土には、ノグチ作品は似合わないだろう。

さらにいうと、瀬戸内の楠の巨木や、さまざまな植生、さらに見張らせば、勇壮な屋島や五剣山の姿もあってこその、石の作品と感じる。借景というと軽く聞こえるが、そういう自然から出たものが、自然に押し戻される、還流の姿が、「禅的」というものの意味合いでもある。

初めてこの地を訪ねたのが何時だったろうか、それ以来、弟さんで今は亡いミチオ先生の言ではないが、立っている彫刻はやはり西欧起源の、ギリシャ以来の「人体」であって、それいがいの、やや平たいテーブル状の「寝ている彫刻」が、ずっと気になっていた。これがもしかしたら、ノグチにとっては、大地を見下ろした俯瞰図の模型というか、パースペクティヴのような、「庭」なのではないかと気づくようになって、それから私は、ノグチ作品全体を、庭的発想として読み解くようになったのである。

大理石を使った彫刻群の集大成は、たぶん、三十年代からの展開であって、それは、肌合いのちがった大理石を組み合わせて、内部に通した心棒によって「捩じり、締める」構造のものである。横浜美術館にもあり、牟礼にもある、円環状の「真夜中の太陽」もこうした一群であろう。

いっぽう、晩年の石彫は、花崗岩や、とりわけ鉄分が酸化して赤い部分がともなって、塊でもって地中から掘り出された玄武岩の、その塊をいったんいくつかの部分に割って、再度それらを組み合わせるという構造が特徴的だ。

さらに、割った時あるいは、掘り出された時の石肌がそのままに残された部分、自らが鑿ではつった部分、さらに機械で切って表面を研磨した部分と、その三つの組み合わせで構成されるのが、通常である。

手法というか、やり方は、私見で素人目だが、それに尽きると言っていいような、じつにシンプルな構造をしている。そこから、また、最晩年、ノグチは自然石とコラボレーションしたとか、自然を見立てたとか、いろいろな解釈や発想を生んだのは周知のところである。ただやはり、晩年の石彫については、今後もいろいろと、私どもが考えてみなければならない、楽しい謎が残されたのだ、とここでは言っておこうと思う。

栃木県の那須町に、二期倶楽部という、自然のなかで自分だけの時間を豊かに見出すリゾートを長くやっておられる北山ひとみさんが立ち上げた、芸術家村＝アート・ビオトープ那須の一角に、編集工学の松岡正剛さんの肝いりで、内藤廣さん設計、和泉さん石組みで、七つの石の石舞台をつくった時に、その下の庭に、和泉さんが、立床石という、何とも芳しい、匂やかで、たおやかな石を持ってきて、その庭の中心に、立てた。

私はその石を見たときに、「女神なんだろうが、やっぱり、妖艶な神さま」なんだろうなと思い、これは、聞くところによると、ノグチがもっとも気に入っていた石のひとつのようで、ノグチ晩年の石彫群とからめて、それを和泉さんの口真似で、「オシャレな謎」と言ってみても良いような気がした。

(にいみ　りゅう)

各論2-3

石貼りの幻影
～五色塚古墳と白井晟一～

神戸大学准教授
黒田龍二

1955年生まれ。神戸大学工学研究科准教授。建築史研究者。名古屋工業大学建築学科卒。神戸大学博士課程修了。学術博士。日本建築学会奨励賞、建築史学会賞受賞。兵庫県・岡山県等文化財保護審議会委員。著書：『中世寺社信仰の場』(思文閣出版、1999年)。『神社　建築と祭り』(朝日新聞出版社、2000年)など。文化財修理：六甲八幡神社厄神宮本殿など。復元：出雲大社本殿、極楽寺ヒビキ遺跡、纒向遺跡など。専門は寺社を中心とする日本建築史。大学教育のかたわら、日常的に地域の未指定文化財建造物の調査を行う。最近の大きな関心は邪馬台国論争で話題の纒向（まきむく）遺跡を、初期ヤマト王権中枢施設として復元し、理解すること。



五色塚古墳全景

■幻影の希求

日本建築の特性について語るとき、自然との間合いや木造建築技術の高さなどが取り上げられることが多い。それはそれとして、私は日本の建築文化の大きな特色として、幻影の追求をあげたい。日本の伝統的木造建築技術の異常な発達の原因は、日本の建築がその用途以外の建築的幻影の追求に腐心してきたことにあると思う。建築的幻影というのは、一例をあげれば寺社建築における軒反り曲線である。日本の大工が心血を注ぐ軒の形態は、日本の仏教建築の淵源である大陸、朝鮮半島とは異なる独特のものであり、また内部の仏や神とは関係がなく、まして風雨対策とも関係がない。いわば化粧である。

そのような志向が最初にみてとれるのが古墳である。構築物の化粧は弥生墳墓にもあるが、前方後円墳において本格的に現れる。仁徳天皇陵（大山古墳）は、秦の始皇帝陵、エジプトのピラミッドとならぶ世界三大墳墓といわれる。たしかに仁徳陵は面積で一番大きいが、投入された技術と労力には大きな差がある。ピラミッドでは大きな切石が積み上げられ、始皇陵では兵馬俑が埋設された。日本の古墳では土盛りに葺き石で、上に埴輪をならべる。その土盛りも中期古墳では平地に盛る場合があるが、前期古墳や多くの古墳では自然地形の尾根を整形するなどして、労力をかけずに作っている。ではあるが、完成したばかりの石貼り前方後円墳は、ピラミッドと比べてもそんなに見劣りはしないだろう。化粧の力である。五色塚古墳はそれをみせてくれる。

■復元された大型前方後円墳

五色塚古墳は、神戸市の西部にあたる垂水区の海岸近くに所在する。４世紀末から５世紀初頭の築造と推定される大型の前方後円墳である。昭和40年から10年の歳月をかけて、築造当時の姿を概ね復元した。できたばかりの大型前方後円墳の姿を見ることのできる数少ない事例である。

古墳の数は15万基ほどといわれ、円墳、方墳などいろいろな形態をとるが、巨大古墳はすべて前方後円墳である。なかでも最大の仁徳陵は長さ486m、次の応神陵（誉田御廟山古墳）は425mで、これらは超巨大古墳である。200mを越える巨大古墳は36基を数え、194mの五色塚古墳はそれらに次ぐ規模であり、兵庫県下では最大である。

完成した当座の前方後円墳は幾何学的な美しい形態だが、時がたつと石は崩れ草木が繁茂する。墳丘の実体が土だからである。仁徳陵にしても、今地上で見る分には普通の山や岡と変わらない。五色塚古墳も整備前の見かけはただの小山だった。復原は史跡整備の一環なので詳しい調査に基づいているが、古墳そのものは劣化しないように保護しなければならない。前方部は本来の形態に復元し、葺き石ももとの石を用いて失われた部分を補っている。ただし、全体が３段に造成されているうちの最下部の斜面は、もとの葺石を20cm

の土砂で覆い、芝を貼っている。最下段では、付近で取れる小さめの石を使っていて、そのまま復元するとすぐに崩れるのである。後円部は本来の墳丘全体に50㎝の盛土を行って墳丘を保護し、最下段の斜面は前方部と同様に芝を貼っている。雨や植物によって葺石や墳丘が崩れない工夫もいろいろ施されており、細部まで再現したわけではない。

■国家の幻影

前方後円墳が築造された意味はどこにあるのだろうか。前方後円墳はヤマト王権の大王の墳墓形態で、最盛期は５世紀つまり倭の五王の時代である。４世紀以来、ヤマト王権の影響力が全国に及ぶ国内情勢のもとで、その一翼を担う地方首長だけが前方後円墳の築造を許されたと考えられる。このような古墳の築造を価値体系のひとつに据える王権と地方勢力との関係を前方後円墳体制、前方後円墳国家などと呼んでいる。

五色塚古墳は、垂水丘陵が明石海峡に向かって突き出す先端部を利用して作られていて、中段から上の大き目の丸い葺き石は対岸の淡路島から運んだものである。被葬者の権力は淡路島に及んでいたのであり、海峡にはみえない糸が張られていることを示している。海と古墳との間のわずかな陸地を古代山陽道が通り、今もJR山陽本線、山陽電鉄、国道２号線が走る。もちろん明石海峡も海の要路であり、要するに交通の要衝にことさらな威容をみせているのである。

以上のことを総合すると、五色塚古墳はヤマト王権の傘下にある豪族が、瀬戸内とヤマトとを結ぶ重要地点を押さえていることを誇示しているのである。九州、朝鮮半島、中国大陸からヤマトに向かうとき、ここで必ず五色塚が目に入る。次いで大阪湾から河内に入ると、この2.5倍の大きさで、三重の周壕に囲まれた仁徳陵をみることになる。

古墳の形はほかにも前方後方墳、方墳、円墳などがある。これらの形は王権と直接的な関係にある前方後円墳に対して、それぞれ埋葬された人々の国家的な位置を示すことになる。まさに古墳時代というにふさわしい文化景観が全国各所で形成されていた。

■前方後円という形

古墳はこのように形と規模だけでも時代と国家を語るほか、埋葬施設や副葬品がさらに具体的な歴史と文化とを伝えてくれる。しかし最も単純な問い、前方後円墳はなぜ鍵穴のような平面形態なのかが分からない。前方後円墳というが、これは江戸時代に言い出されたことで、前後があるかどうかも定かでない。ある学説ではこの平面形は壺の形だという。壺中天つまり壺の中に天があるという中国思想にもとづく形態だというのである。しかし、これですべて説明がつくわけでもない。

前方後円墳の形態は明らかにひとつにくくれる形式であるのに、いまのところ統一的理解が成立しないという点が、私は興味深い。ある時期、ある大王墓には墳墓形態に結びつく機能、思想があったにしても、結果的に全国の前方後円墳に行き渡ったのはその形態だけだったのだろう。その後1500年間の現代までの流れを考えるに、西洋的な意味での建築の本質とか、意味とか、機能とかはどうでもよく、結局は形に対する好みを最優先する造形思想が日本列島に根をはったように思う。

■白井晟一の石貼り

古い話題であるが、白井晟一の建築はいったい近代的なのか、西洋的なのか、そうでないのかずいぶん論じられた。白井が親和銀行などで見せた石貼りは厚化粧と評され、その



親和銀行（佐世保市）

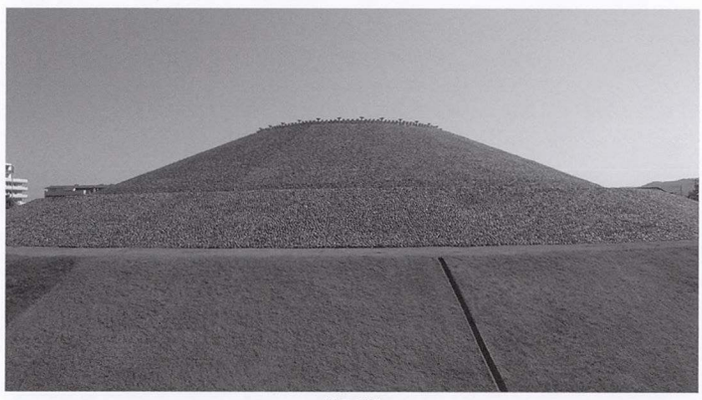
設計作法は西洋的でも近代的でもない個人的なものと言われた。なかには白井の建築自体を「まがいもの」と評した人もいた。それは卓見であって、そういう見方ができるということは誤りではない。だが……。

白井の石貼りは前方後円墳のそれに近いのではなかろうか。構造や実体との乖離、完成当初の完璧な美しさ、意味ありげなわけの分からない形態など、比喩をこえた親近性があるように思う。それを裏付けるのは、その後の日本の建築がたどった道である。寺社建築、書院、数寄屋で行われた創造的な仕事は、厚化粧の構築であり、化粧そのものであるかのような建築を生みだす努力だったのではないか。時に目覚めて即物的なものを作るが長続きはしない。

そういう意味で、白井晟一は日本的な建築世界を昭和の現代建築で体現した建築家であったと思う。その立ち位置は西洋的建築家というよりは、平等院、厳島神社、桂離宮などの施主に近いと私は思う。

〈私の日本の建築に関する考えの一端は『国宝の美23号（厳島神社ほか）』（朝日新聞出版、2010年１月）で述べた。参照されたい。〉

（くろだ　りゅうじ）


後円部


後円部からみた前方部

編集後記

建築計画系委員

石はさまざまな表情を持つ。粗い表面に陽光が注ぐときの陰翳や雨にぬれて色が変わるときの、ほかの素材にはない豊かな表情。そして、表面だけではなく、量塊としての質感。地球の一部を削り取って得られた自然の素材であるせいか、何千万年もの時間をかけて生成したものであるからか、石には精霊というか、魔力のようなものが宿っているような気がする。

その豊かな表情のように建築の豊かなひろがりが感じられる特集となったと思う。

(幹事：下坂浩和)

「石は、貼るものではなく、積むものです」これは長尾重武氏が総論で取上げたライトの言葉である。私が参画する京都工芸繊維大学主催の『村野藤吾の設計研究会』で、村野と直接仕事をした職人にヒアリングをする機会があった。その時の左官工の話を思い出したが、目地詰めの際に村野から「その石がいくら奥に入っているかを見せる気でしなさい」と言われたという。「貼る」にしても、石の素材を如何に活かして自然に見せるかを意図した一言だと感じている。　(神戸 嘉也)

昨年の「建築と水」に続くシリーズテーマであったが、「石」ならではの歴史を通じた様々な記述によって大いに勉強させられ、日頃の不勉強を恥入るばかりだ。今や石材に限らず、フェイクだらけの建材を駆使することに汲々としている自分に「石は、貼るものではなく、積むものです。」というライトの言葉やミースの精神が、それでいいのかと問いかけてくるようだ。

(奥村　朋孝)

石という素材を通して古今東西の建築の特性を横断的に見ていこう、というのが今特集の趣旨だった。実際、各論考で扱われている地域や時代は実に多彩で、興味深い内容が揃ったと思う。石が優れて地域性の強い材料であることの表れだろう。中でも個人的には、インドの大理石は風雨に侵されないということを初めて知って驚いた。また、ライトの言葉「石は、貼るものではなく、積むものです」にはドキッとさせられた。

(米山　剛史)

「石」という素材に対し、多様な切り口の論述が展開され、大変興味深く読むことができた。しかしその多様さの中にも、「石」と対峙する人間の共通した意識を垣間見た気がする。石独特の素材感から放たれる「崇高な精神性の美学」が浸透しているようだ。このような「石」との対話と同じように、鉄・ガラス・アルミ・木・タイルといった他の建築素材とも対話し、追及することが我々の建築表現の可能性を広げることとなるに違いない。

(静　茂夫)

ここ10年ほど、ヒマラヤで石造りの学校建設に携わっている。そこでは川原で採れる石で壁を積み上げ、屋根も石で葺き、床も石を敷いている。そのような経験から、「そこにある素材で建築をつくる」といういわば建築の原点と、石との関わりを包括的に見てみることによって現代の建築を見直せないか、という思いで今回の特集企画を発案した。予想以上に「建築と石」の興味深い関係が明らかになり、ご執筆いただいた先生方に感謝したい。　(野田隆史)

普段の設計活動の中で、「石」は建築の仕上げ材料・素材として意識することが多い。

しかし、今回とりあげられた「石」は、建築表現や建築と直接的にかかわるものばかりではなく、彫刻やランドスケープ、古墳などと幅広く、石の多様性を再発見できる。この特集を通じて、素材としての石ではない「石」を考えるよいきっかけになるのではないかと思う。

(楠　敦士)

石という材料を使ったことがない訳ではない。自分なりに向き合って来たと思う。でも今回の特集記事を読ませていただいて、自分の石に対する向き合い方の甘さと浅はかさを感じた。石は一度据えると当然動かないし、ほぼ変化もしない。周りで何が起ころうと、石はじっと変わらずそこにある。だからこそ、建築の中にそれを取り入れるとき、本当にそこにそうやって据えていいのか、もっと深く、物理的にも精神的にも検討を重ねるべきではないのかと思う。　(所　千夏)

475

法令コーナー

耐震改修とセットで低炭素型住宅への転換を促進

石黒一郎

堺市建築都市局開発調整部建築安全課主査

堺市では、平成22年度より住宅の省エネ改修工事に対する補助を開始した。その内容は以下の通りである。

1．対象建築物

昭和56年５月31日以前に工事着手し建築された住宅で、本市の補助を受けて耐震改修工事を行うもの

2．補助対象工事

① 内窓設置、ガラス交換、外窓交換による窓（開口部）の断熱改修工事

② ①と同時に行う外壁、床、天井、屋根の断熱改修工事

③ ①②と同時に行う通気止め工事

3．補助率、補助限度額

補助対象工事の１／３以内で、30万円を限度とする。ただし、住宅エコポイント相当額を対象工事費から予め差し引いて補助金額を計算する。

既存住宅の低炭素型住宅への転換を促進する

堺市は、平成21年１月環境モデル都市に選定された。そして、堺市環境モデル都市行動計画を策定し、本市が掲げる温室効果ガスの削減目標と、今後５年以内に具体化を図る取組内容をとりまとめた。住宅・建築物の分野でも、太陽光発電システムの設置の促進とあわせて、低炭素型の居住・事業所環境の普及を目標としている。この補助金は、その目標の実現に寄与するものである。

窓の断熱性能の向上が効果的

補助対象工事は、少なくとも一つの居室の窓（開口部）の断熱改修を行うことを必須としている。そして、窓の断熱改修工事を行った居室にかかわる床、外壁、天井などの断熱改修等も補助対象工事としている（断熱材設置のための除去や復旧工事も補助対象）。

窓の断熱改修を必須としているのは、窓の熱損失が大きいこと、対象となる住宅の多数を占めるのは木造住宅であり、木造の熱損失率は相対的に小さいことがあげられる。熱損失の約40％は窓（開口部）からといわれており、窓の断熱改修の効果は大きい。

既存住宅への不満の割合は高い

国土交通省の住宅需要実態調査に基づく本市内の、一戸建て・長屋住宅での住宅の各要素（13要素）に対する不満の割合（多少不満＋非常に不満）が高い項目は、以下の通りである。

- 高齢者等への配慮（段差がない等） 62.5%
- 住宅の防犯性 51.2%
- 収納スペース 50.4%
- 住宅の傷みの少なさ 48.0%
- 冷暖房の費用負担等の省エネルギー対応 47.5%
- 地震台風時の住宅の安全性 47.4%

以上の６項目が、半数近くの人が不満を持っている内容である。住宅の広さ・間取りなど他の７項目は、不満の割合が40%未満である。

ただし、不満の割合は最低の項目でも29.2%であり、既存住宅への不満は高く、賃貸住宅ほど不満の割合は高く、リフォームへの要求は高い。

耐震改修工事の実績を見ても、それ単独で実施するケースは少なく、何らかのリフォームを同時に実施しているケースが多いのが実態である。

セットで耐震改修を促進する

上に記したように、耐震改修工事は、それ単独で行われることは少ない。また、昭和56年以前の住宅では、床であれ、外壁であれ、断熱材が施工されていないケースも多い。

壁補強が主となる耐震改修工事では、既存の化粧合板や石膏ボードの撤去工事、筋交いや構造用合板などの耐震壁を設置した後の石膏ボードやクロス張りなどの復旧工事など断熱材設置のためと同じ工程が存在する。同時に実施すれば合理的であることは明らかであろう。また、それぞれ単独での工事であれば補助対象として認められる範囲は壁補強の部分やその周辺に限られることになるが、現実には、同じ部屋の中でクロスを張り替える部分とそうでない部分が存在することはあり得ない。耐震改修工事にしても断熱材設置工事にしても、補助対象外とならざる得ない部分が生じてくるが、同時に実施することで補助対象外の部分を少なくすることが可能となり、合理的である。

省エネ改修の促進は、耐震改修の促進にもつながるのである。

住宅の半数を占める昭和56年以前の木造住宅の性能アップが喫緊の課題

平成19年５月に策定した堺市耐震改修促進計画では、平成27年度までに耐震化率を90％に引き上げることを目標としているが、そこで示された住宅の現状をみると、耐震性能が低い可能性が高い昭和56年５月以前に建てられた木造住宅（旧耐震木造住宅）は約９万棟存在しており、住宅19万棟の約半数を占めている状態であった。調査時より４年がたち多少減少しているとはいえ、旧耐震木造住宅の性能をどう引き上げていくのか、環境の面でも耐震化の面でも重大な課題であることに変わりはない。

本市は、昭和40年代後半から50年代前半にかけて、大阪市の衛星都市として人口が急増し、それに伴いマイクロ戸建てとも呼ばれる狭小な住宅が乱立した時代を経験しており、その時の膨大なストックが市内に点在している。また、泉北ニュータウンという計画的に造成され、建築された比較的大きな宅地の住宅も、旧耐震住宅が主流を占めるようになっている。７つある区ごとの違いが少なく、全市的課題である。

住宅への様々な不満からリフォームを考えている方々に、省エネ改修や耐震改修を実施する必要性を理解していただく啓発活動、有用性（お得さ）を実感していただく補助制度、工事への安心感を持っていただく審査・検査制度の三点セットが必要と思われる。

安全で快適な住宅は生活の基礎であり、その確保は自治体の重要な施策である。

（いしぐろ　いちろう）

a.c.iデザインルームの構造設計

白髪誠一
㈱北條建築構造研究所

a.c.iデザインルームは、スニーカーブランドのためのデザイン・ルームと住戸で、兵庫県宝塚市の北部、大阪平野を一望できる山手の閑静な住宅地に位置している。

この建築は地下階が住戸、地上階がデザイン・ルームとなっている。敷地全体は南に向かって約20度傾斜しており、デザイン・ルームの西側が大きく斜面の上空に張り出していることと（**写真1**）、建物の幅いっぱいに設けられた開口が特徴となっている（**写真2**）。

ここでは，このRC造とS造の混構造の建築の、構造設計について紹介する。

建築概要

設　　計　建築：イースタン建築設計事務所
　　構造：北條建築構造研究所
建築面積　280.80㎡
延床面積　361.84㎡
階　　数　地下1階　地上1階
構　　造　地下：鉄筋コンクリート造
　　地上：鉄骨造
竣　　工　2009年10月

構造設計概要

デザイン・ルームが張り出していること、開口部が大きいことから、1階は鉄骨造とした。地下階はRC造であるが、敷地が斜面地であるため構造的には地上2階建てとなる。このため、1階の剛性バランスを極力良くするために鉄骨部分はブレースを有する架構とした。さらに、屋根および外壁には軽い材料を用いることを要望した。

張り出したデザイン・ルームは、敷地の最も低い位置からは約8mの上空に位置しており、2列に配置された9本の円形鋼管柱（φ318×8）で支持されている。このため、1階床では**図1**に示すように平面的にもS造とRC造の混構造となっている。S造からRC造への応力伝達が確保されるように、S造部分の床スラブをRC造としている。地下階の柱は**写真3**に示すように両側が2.4mの跳ね出しとなる格子梁を支持している。

南側には高さ約2.9m、長さ約14mの開口部が設けられている。このため、梁せい450mmのH形鋼梁で対応している（**写真4**）。この梁には出幅1mの鋼板庇が取り付けられており、この庇によるねじりに抵抗するために直交する小梁はすべて大梁に対して剛接合としている。

北側には高さ約0.6m、長さ約14.5mのスリット状の腰窓が設けられている。ここでは、**写真5**に示すように開口上部の垂壁内にトラス梁を設けてスパンに対応している。このトラス梁は壁面に作用する風荷重に抵抗するために、トラスの束材と屋根の小梁位置を同位置とし、剛接合としている。

おわりに

大きな張り出しや大きな開口という要望に対して、軽量化・大スパンという鉄骨造の特徴を活かして解決できたと考えている。斜面から飛び出していくような印象を与える軽快な建築を実現することができた。

（しらが　せいいち）

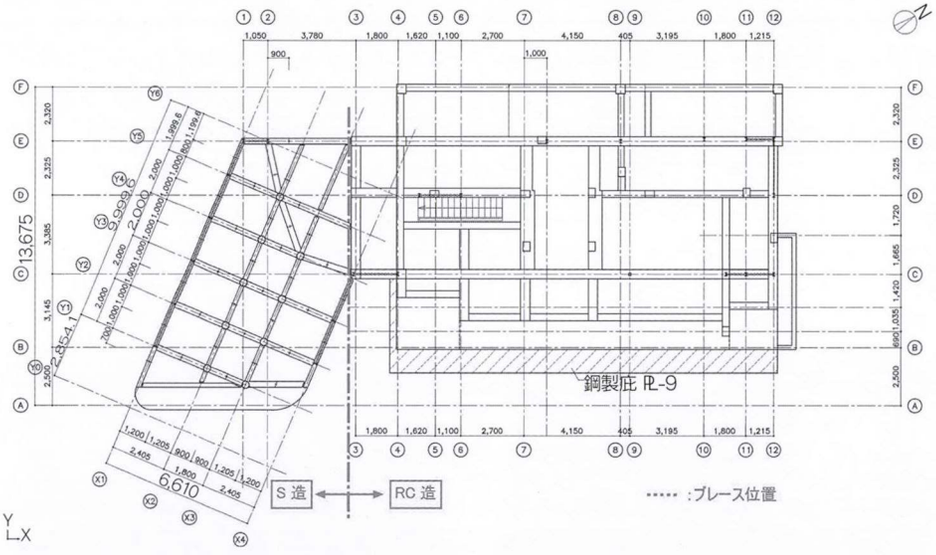


図1　1階床伏図



写真1
張り出したデザイン・ルーム

写真2
南側の開口部



写真3　デザインルームを支持する柱と床梁



写真4　南側開口部



写真5　北側開口部

16

再読　関西近代建築
――モダンエイジの建築遺産――

阪急ビルディング

橋寺　知子

所在地／大阪市北区角田町
設計／竹中工務店
施工／竹中工務店（鷲尾九郎、青柳貞世、田中清蔵）、顧問（阿部美樹志、古塚正治）、相談役（伊東忠太）
竣工／第1期（昭和4年3月）、第2期（昭和6年11月）、第3期（昭和7年11月）、第4期（昭和11年2月）
構造／鉄骨鉄筋コンクリート造
規模／地上8階地下2階
種別／駅舎・百貨店

この連載で、執筆時点ですでに失われた建築が取り上げられるのは、今回の阪急ビルディングが最初かもしれない。阪急ビルディングは大阪梅田を代表するモダン建築であった。JRでも私鉄でも、今や主要駅には百貨店やショッピングセンターがあるのが当たり前だが、阪急ビルディングはそんなターミナル・デパートの先駆けだ。歴史あるミナミとは対照的に、キタは明治以降に開発されたエリアで、宝塚、神戸への起点となる阪急梅田駅は、大阪の中心部とは異なる雰囲気が漂う場でもあった。

■ターミナル・デパートの誕生

箕面有馬電気軌道株式会社、現在の阪急電鉄は、明治43（1910）年に梅田―宝塚・箕面間を開業し、今年ちょうど100周年を迎えた。

阪神、南海より後発の私鉄だったが、沿線には独特の文化が醸成された。上品な小豆色の車体にうぐいす色のシートのカラーリングは今も変わらず、子供の頃、阪急電車で連れて行ってもらった動物園や宝塚ファミリーランド、宝塚歌劇は、まさに阪神間モダニズムだった。また沿線には、良好な環境の住宅地が開発され、郊外から都心へ通勤する新しいライフスタイルを作り上げられた。

阪急の発展は、創業以来経営手腕を発揮した、小林一三の存在を抜きには語れない。郊外と都心を毎日往復する乗客のニーズを考え、小林は、梅田ターミナルに高層ビルを建設し、食堂と百貨店を経営することを考えた。1920年、地上5階地下1階の初代阪急ビルが竣工した。1階には老舗百貨店白木屋が出張所を出店し、そこで百貨店経営のノウハウを学び、1925年に阪急直営のマーケットを開店した。1929年3月、阪急ビルディング第1期工事の竣工と同時に、阪急マーケットは大幅に増床し、阪急百貨店が開店した。高価な呉服や嗜好品ではなく、モダンな郊外居住者たちのための食料品と日用雑貨を中心とした新しい百貨店の出現だった。阪急ビルディングは、乗降客の行き交うターミナル駅としての施設、百貨店、そして食堂という全く用途の異なるものが同居する複合ビルであった。

阪急ビルディングは、戦前だけでも4期にわたって建設されている。通常通り電車を走らせながら、交通の集中する梅田中心部での工事は困難だったに違いない。1929年、第1期として御堂筋に面する部分の西側半分が竣工し、引き続き、初代阪急ビルディング（本社ビル）を解体した跡地に、1931年、2期部分が竣工した。『建築と社会』昭和6年11月号には、昭和初期の大阪のビルディングの代表、朝日ビルディングと阪急ビルディングが詳しく報じられている。

阪急ビルディング1・2期部分の外観は三層構成で、基壇はアーチ型の開口部が連続する古典的な骨格を示しているが、全体に装飾は控えめだ。内部の階段やエレベータ・ホール部分は、石材や金属材を多用し、アール・デコ風の豊かな装飾が見られる。塔屋は地上からは見えにくいが斬新なデザインだ。一方、1階中央のヴォールト天井の吹き抜け部分の意匠は、東洋的な色合いが濃い。

7・8階は阪急直営の食堂だった。阪急マーケット時代から食堂が設けられ、新ビルでも食堂経営は重視されていた。阪急食堂のライスカレーが、初めての洋食体験だった人々も多かったことは有名だ。

■鷲尾九郎の合理主義と阿部美樹志の構造

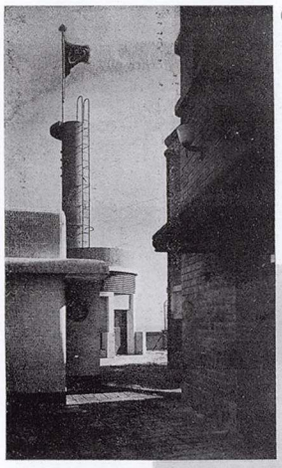
当時、竹中工務店大阪本店設計部長を務めていた鷲尾九郎が、「阪急ビルディング断片」



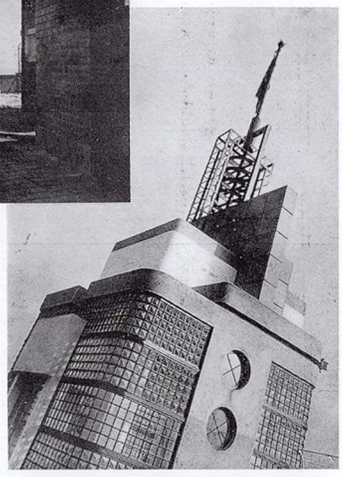
①阪急ビルディング（建て替え工事前）



②



③



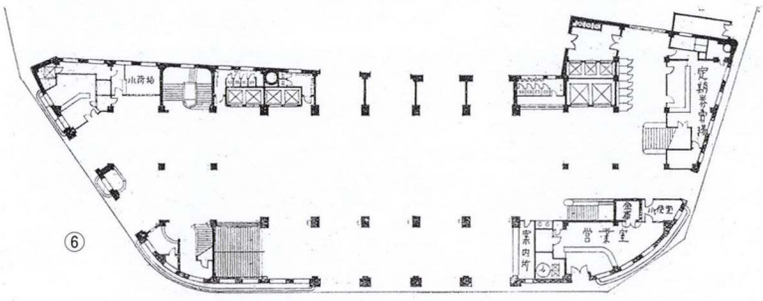
④

⑤

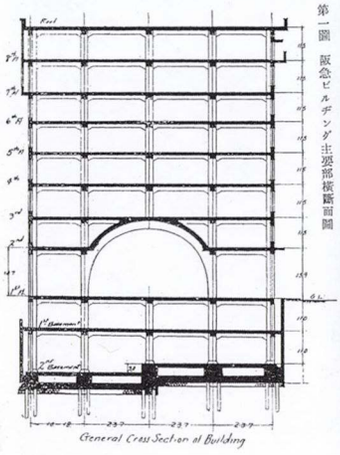




第一階平面圖



⑥



第一圖　阪急ビルヂング主要部横斷面圖

General Cross Section of Building

⑦



⑧

②第２期工事竣工時の南東面外観

③屋上の煙突や広告塔頂部
　写真の構図やレイアウトにも時代が感じられる

④1階正面広場

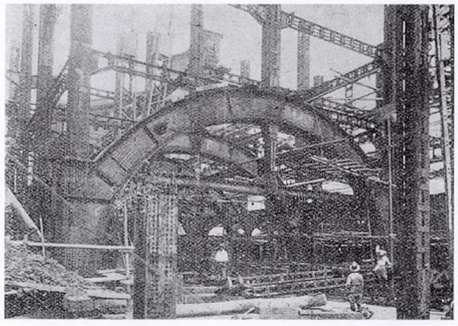
⑤7階食堂：8階と合わせて約1,700席設けられていた

⑥1階平面図

⑦主要部横断面図：阿部美樹志の論文中に掲載

⑧百貨店階段：アールデコ風のデザインが目をひく

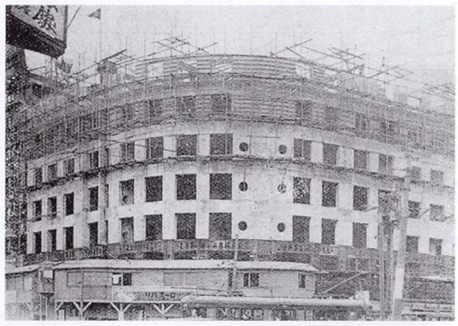
「建築と社会」第15輯２号（昭和７年２月号）より



⑨

特殊鉄骨架構（一階）
一階に大ホールを有する関係より中柱を省く事の必要を生じ、之れに對し構造上特にアーチ型架構法を採用せり。アーチの徑間は四十七尺四寸とす。此の寫眞は之れが骨格を示すものにして、アーチの中央部に三階以上陸屋根までの全荷重を支持する内柱が建てられてゐる事は寫眞で見られる通りである。

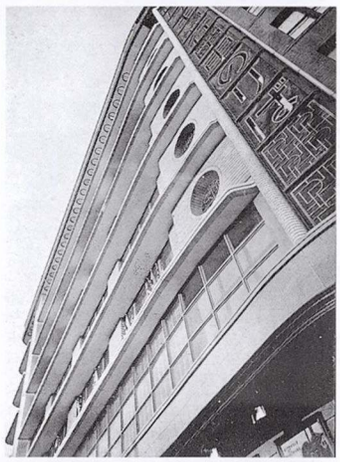
上階コンクリート打込後の外観
此處では三階から「コンクリート」を打ち始めて五階まで型枠をとりはずした處で、曾根崎署角からの外壁である。斯くしてコンクリート工事は地下室よりと三階からと二段同時に進められ工期を短縮する事が出来た。



⑩



⑪



⑫

⑨**施工中の写真（特殊鉄骨架構）**（『建築と社会』昭和7年2月号より）

⑩**施工中の写真（上階コンクリート打込後の外観）**（『建築と社会』昭和7年2月号より）

⑪**第3期工事竣工時の西南面外観**（『建築と社会』昭和8年1月号より）

⑫**第3期部分（新館）を見上げる**（『建築と社会』昭和8年1月号より）
丸窓やステンレススティールの窓枠等、旧館とはかなり違うデザイン

⑬**1階ドーム部分の様子**（建て替え工事前）
照明器具など竣工時とは異なるが、特徴ある空間だった

⑭**妻面のモザイク**（建て替え工事前）

⑮**梅田阪急ビル**（2009年竣工）

⑬



⑭



⑮



と題し、計画の要点と反省をまとめている。

梅田付近はさまざまな交通が交錯する場所で、この頃工事が進んでいた地下鉄（高速度鉄道）との関係も考えながら、さまざまな方面からさまざまな目的で集散する人々の動線をどう処理するかが、阪急ビルディングの最も大きな課題であった。

外観では、広い面積を占めるタイルの色調に気を使っている。雨天時に色が沈んだり濁ったりすると暗鬱な印象を与えるので「平生よりも明るく軽やかに浮き出させ」ようとしたと言う。吸水率の低いタイルを使用し、「塵芥を被りやすい場所では雨で洗い落す点からだけでもぜひ必要な事である」と言う。裏を返せば、昭和初期の大阪がまさに煙の都であったことの証明でもある。

内部意匠に関して、「第一階正面ホールは交通量の最も多い所であり且つ電車の乗降客にも、建物入場者にも第一歩のところで最初に印象づけらるるところであるから、柱一列を抜いて二階迄吹抜となって居る。この部分の天井廻り装飾及照明器具は伊東博士の設計になったもので他の部分とは行き方を異にして居る」、「二階以上の売場は何の装飾も施さない事にした、建築が眼に入るより商品が先ず眼に飛び込む事を売場の第一要件とするからである、（中略）要するに大衆的な売場は無技巧を技巧の第一と心得る」、「食堂は悄々趣を異にする。（中略）たとえ一杯のクリームを求むるにしても先づメニューに一通り目を通してから、さて注文するのが一般であろう。それだけの休息欲と選択欲とには答えねばなるまいと思う」と述べている。それぞれの場所の役割と求められる空間デザインを分析し、冷めた建築観が表れている。このバランス感覚が都心での複雑なプログラムの実現を可能にしたのだろう。

構造計画は、鉄筋コンクリート構造の第一人者、阿部美樹志が担当した。昭和６年11月号には阿部による構造計画の詳細な解説があり、構造図や計算書が多数掲載されている。阿部は1911年アメリカ・イリノイ州立大学に留学してコンクリート工学を学び、帰国後、鉄道院で東京万世橋間市街高架線工事に携わり、コンクリート高架橋の技術を培った。浅野セメントの浅野総一郎を介して小林一三と知り合い、梅田十三間高架線工事（1925年着工）を始めとする鉄道本体の工事、阪急ビルディング、東京宝塚劇場（1933年）、阪急神戸会館（1936年）、西宮野球場（1936年）など、阪急の主要な建築の設計に携わった。

阪急ビルディングは、５階まで鉄骨鉄筋コンクリート造、６階以上は鉄筋コンクリート造とし、経費の節減と工期短縮を図っている。また１階の正面ホール部分はアーチ構造を採用して吹き抜けとし、広々とした空間と耐震性の向上を両立させている。これらの構造・施工上の工夫に関して、工事中の写真を用いて詳しく報告している。この規模、この立地の建築物の場合、何より構造・施工の技術が問われるが、記事の長さと詳しさがそれを示している。

■現代的な外観vs伊東忠太の内部装飾

阪急ビルディング１階ヴォールト天井の空間は、最も人々の記憶に残っている空間だろう。写真④は竣工時の、また写真⑬は建て替え工事前のホールの様子である。この部分の装飾は前述の通り、建築史家伊東忠太に委嘱された。伊東の原画に基づいた妻壁のモザイク壁画は、行き交う人々の目にとまり、新聞紙上やインターネットでもたびたび取り上げられた。昭和６年11月号には伊東忠太も寄稿し、阪急ビルディングの「外観は百貨店向きの簡素なる現代式」だが、「会社側の希望は、地階広間の内部は如何なる様式でも自由であるが、公衆の目を惹くに足る壮麗なものに致し度い」と委嘱されたと言う。会社側の目論見は成功したと言えるだろう。

伊東は、外観と内部の意匠について、このビルは「地階は電車の主駅であり、二階以上は百貨店であり、最上階は大食堂であり、一秒を争うて犇めく人、悠々酒杯を挙ぐる人、売店の間に彷徨停立する人、雑然として統一がない」、こんな建物の意匠を統一融和する必要はなく、「予の好愛する東洋趣味、西亜乃至支那の伝統を根底として考えた」と言う。これに対して当時すでに時代錯誤という批判もあったようだ。しかし「時々刻々に変転する世相に追従して時々刻々に自分の思想を変転するが如き芸当を演ずることは予の最も不得手とする處」、「既成の外観の様式が、予をして之を模範として内部の装飾の様式を決定せしむる丈けの魅力を予に与えざりしことを遺憾とする」と、さらりと批判する。

妻壁部分には、当初、「四神」を配置しようと考えたが、亀に蛇が巻付く「玄武」が場所に不適当と考え、「龍、馬、獅、鳳（朱雀）の四動物を選んだ。これは阪急電車の快速と威力を象徴した」と言う。また東壁中央には太陽を示す八咫烏を赤い日輪の中に、西壁中央には月を示す兎を白い月輪の中に納めている。さまざまな意味を持った図像で余白なく埋め尽くす、モダンの志向とは真逆の伊東忠太らしい造形理念が感じられる。意匠の出来に伊東は満足しなかったようだが、「建築と装飾」という章を設けて「装飾無用論」つまりモダニズムのデザインを「建築の本質的心理なりと唱ふることは如何にしても無理」とはっきり述べている。建築が解体される時、人々の関心は壁画に集まった。伊東の考えは的を射ていたのかもしれない。

■全く異なる第３期のデザイン

昭和７年11月に第３期工事が竣工する。２期工事竣工からたった１年で、工事は２期に連続して行われたが、３期部分は色もデザインの基調も大きく異なる。旧館とのつなぎ目に近い部分の丸窓の連続や、窓台や庇で強調した水平線、カーテンウォールの２階の壁面デザインはモダンだ。1920から30年代は、西洋でもデザイン思潮の変化が激しい年代で、さまざまな志向の建築が並存するが、「明らかに増築拡大が見てとれるようにした」と社史には記述されている。

■変わり続ける梅田ターミナル

梅田駅周辺は、明治初期、何もなかった所に鉄道の駅が設置されたことから今日のにぎやかさがあり、とどまることなく変化し続けている。阪急は駅の直近で国鉄と交差し、拡張には限界があった。戦後、1960年代初頭から駅を国鉄線路北側へ移転させる計画を練り、９年をかけた大工事の末、1973年、現在の位置に私鉄最大のターミナル駅を完成させている。

阪急ビルディング跡に建設された「梅田阪急ビル」は、13階までの阪急百貨店うめだ本店と、15階から41階までの10万㎡を超えるオフィス部分からなる。百貨店部分は２期に分けて工事が進められ、第１期部分（南側）が2009年９月、オフィスタワーは2010年５月にオープンした。15階のスカイロビーからは、南に伸びる御堂筋や、変貌する大阪駅周辺の様子が見渡せる。現在、百貨店２期工事が進められ、2012年に完成予定だ。百貨店部分の外観は、旧阪急ビルディングの意匠がモチーフとして引用されている。だが、近年保存の手法として多用される部分保存やレプリカ保存ではない。

旧阪急ビルディングに比して、階数がほぼ倍増した。土地の高度利用が急速に進み、梅田の空は狭くなっている。

資料
阪急電鉄株式会社編『75年のあゆみ』〈記述編〉〈写真編〉、昭和57年
（株）阪急百貨店社史編集委員会：株式会社阪急百貨店25年史、阪急百貨店、昭和51年
原武史：『「民都」大阪対「帝都」東京』、講談社、1998年
小野田滋：阿部美樹志と阪急の構造物、『鉄道ピクトリアル』、1998年12月臨増、pp.120-125

（はしてら　ともこ／関西大学建築学科准教授）

齊藤 正　—SAITO TADASHI—



「イスノキ」にて（讃岐富士を背景に）

■経歴
1965年　香川県生まれ
1988年　近畿大学工学部建築学科　卒業
1989-1992年　株式会社栗生総合計画事務所　勤務
1992年　齊藤正毅工房一級建築士事務所　設立
2000年-　近畿大学工学部建築学科　非常勤講師

■受賞歴
1988年　日本建築学会中国支部長賞
1993年　SDレビュー93'入選
1996年　インターイントラスペース　ガラスのデザイン賞
2004年　浜名湖花博 国際花の交流館　グッドデザイン賞



「イスノキ全景」（写真提供：齊藤正毅工房）

聞き手　米津正臣（竹中工務店）
写真撮影 河合止揚

「空っぽな建築」

香川県は、丸亀市。柔らかな稜線を描く讃岐富士の麓、齊藤正氏の事務所「イスノキ」を訪問した。イスノキは、１階をギャラリースペース、２階を事務所、離れを温室とした、３つの機能が２棟の建物に配分された建築群である。２つの建物は、軒の高さや窓の高さなどを兄弟のように同調させながら、一方でその差異を際立たせるような立ち方をしている。今回、齊藤氏と話をして感じたのは、この建築は、「建築作品」である前に、自らが投資して検証する必要のあった建築の実験場であり、具体的な動機の塊であるという事だった。機能的な側面においては、１階のギャラリーは、抽象的なスペースではなく、ある一人のアーティストを核とした、地域を巻き込む活き活きとした活動のはじまりの場所であり、別棟の温室は、農業に従事していた事もある齊藤氏の重要なテーマでもある「VEGETATION（＝建築的植物化）」を展開するための秘密基地である。構造的には、双子のヴォリュームにそれぞれ異なる構造形式があてがわれ、RCの壁面が浮かぶ２階建てのピロティー形式の建物は、層間変異を水平連窓で集中的に処理した明快かつダイナミックな脆性フリーなラーメン構造の建物。離れの温室は、半透明のポリカーボネートで架構が包まれたような、軽快な在来木造の建物。環境的にも、香川の気候・風土に根ざした様々な実験が実施され、データの採集・結果のフィードバックを得ている。不思議なのは、この建築が機能の系、構造の系、環境の系が三位一体となって充実な関係を結んでいるにもかかわらず、なぜか過剰にならず、むしろ「空っぽな印象」を感じる事である。

齊藤氏は「ローカル」という事を強く意識している。「この地では、南向きに室を配置するというより、讃岐富士に対してどういう関係をとるかという事が、自然に成されている」といい、このような地域の特徴をどれだけみつけだせるかが重要だという。また新しさを求める事は否定しないが「モダニズムの建築が好き」と公言した上で、「楽譜と指揮者によって演奏が成立するように、モダニズムを下敷きにローカリティーの重ね合わせにより建築を表現したい」という。なるほどそう考えると、双子の建物「イスノキ」は、片方が温室である事により、異なる気候帯を抱える事で、極端に開口の少ない熱負荷を軽減したRCの壁面と、黒色半透過のポリカーボネート板による集熱型の外壁による差異が、建物の表情として明快に浮かび上がってくる。当然、外壁の仕様だけではなく、設備的・構造的な側面も、そこでの個別の条件によって変質している事に気づかされる。モダニズムを下敷きに、個別のローカルな条件に目を開き、世界の分節を丁寧に織り上げようとする齊藤氏。インタビューの途中、温室で育てているコーヒーの実を見せてくれた。コーヒーの身は赤色をしていて、中には煎ると黒くなる白い豆が入っていた。「周りの赤い部分をかじると眠くなって、中心の豆の部分は眠気を冷ます成分が入っているんだよ。５月病になるような時期に実がなるから、その時、カリカリかじるとよく眠れるから育ててみては」と勧められた。コーヒーの実は、のどかな環境に立ち現れた白と黒のヴォリューム「イスノキ」自体のアナロジーのようにも捉えられた。イスノキが「空っぽな建築」に感じられたのは、齊藤氏が、かの地でしかけた「世界の分節」としての建築へのはじまりの姿だったからであろう。

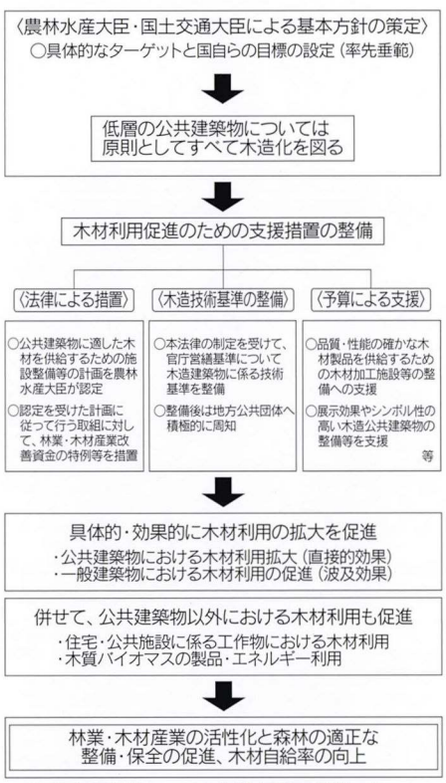
お知らせ information

▶和歌山大学で教授・准教授を募集

国立大学法人和歌山大学では、システム工学部環境システム学科で教授・准教授を募集している。応募締切は2010年９月30日（木）必着。採用予定は2011年４月１日（金）。
問い合わせは環境システム学科長の足立啓教授（kei@sys.wakayama-u.ac.jp）へ。
①教授１名
専門分野：都市計画、地域計画、都市デザイン
担当科目：都市デザイン、都市環境設計製図など
②教授または准教授１名
専門分野：建築設計、環境デザイン、建築構法
担当科目：生活環境設計製図、構造学（建築構法）など
公募要領はhttp://www.sys.wakayama-u.ac.jp/es/を参照されたい。

▶公共建築物木材利用促進法の公布

公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律（平成22年法律第36号）は2010年５月19日の国会において可決成立し、同26日に公布された。
法律の施行期日は公布の日から６月以内とされており、今後、政令・省令・基本方針を策定し施行することが想定される。
問い合わせは、林野庁木材産業課（住宅資材班　TEL03-6744-2295）へ。



公共建築物等における木材利用の促進スキーム

▶㈶建築技術教育普及センター調査・研究助成案件の募集

㈶建築技術教育普及センターは、平成22年度に実施される建築技術の教育普及に資する公益的・基礎的な調査・研究等に対して、建築技術教育普及基金を活用して助成を行う。問い合わせ・申し込みは㈶建築技術教育普及センター情報・普及部普及課（TEL 03-5524-3105、FAX03-5524-3223　〒104-0031　東京都中央区京橋2-14-1兼松ビルデイング）へ。
助成対象　①建築設計、工事監理業務等に関する調査・研究
②建築教育、資格制度等に関する調査・研究
③建築技術者の資質の向上、活用方策等に関する調査・研究
④①から③のうち２以上の分野にまたがる調査・研究
⑤その他、建築技術の教育普及に資する調査・研究
助成額　総額800万円程度（原則として１件100万円を上限とする）
応募締切　郵送かFAXで８月２日（月）必着
詳しくはhttp://www.jaeic.jp/へ。

▶全国団地景観サミット2010

UR賃貸住宅がつくり出す空間。その暮らしの風景をとらえ、UR賃貸住宅「団地景観フォト&スケッチコンテスト」が開かれている。
応募期間　2010年６月16日～**８月16日**（月）
応募資格　プロの写真家や画家を除き応募可
応募規程　①未発表のもので、2008年以降に撮影またはスケッチしたもの
②写真は127×178㎜。デジタル写真は1536×2048ピクセル以上
③スケッチは271×392㎜程度。画材は自由。原版を送付する
④作品には必ずタイトルと150字程度のメッセージを添える
募集部門　①フォトコンテスト―フォト大賞１点・商品券15万円分ほか
②スケッチコンテスト―スケッチ大賞１点・商品券15万円分ほか
応募方法　応募用紙はUR都市機構ホーム頁からダウンロード可。郵送で応募
http://www.ur-net.go.jp/
審査員　藤本壮介（建築家）、大西みつぐ（写真家）、なかだえり（イラストレーター）、池邊このみ（ランドスケーププランナー）
応募先　〒103-0027　東京都中央区日本橋1-5-3　５階　TEL03-3272-6098
全国団地景観サミット事務局

▶BUILDINGs 2030で提案募集

㈳大阪ビルディング協会は創立80周年を迎えるに当たり、記念事業としてアイデアコンペを行う。100周年となる2030年に向けて、大阪を魅力あふれる都市とするため何をなすべきか、これからのビルのあり方、都市や環境との関係をコンペで問おうとするもの。

テーマ　ビルヂング2030―人・都市・環境　つなぐ大阪―
応募資格　個人、法人またはそれらのグループでの応募
応募作品　パネルA2サイズ・縦使い1枚―提案趣旨・提案内容を、文章・図・写真により具体的に表現する。ただし応募者を特定できる情報は記載しないこと。紙質自由
応募申込　用紙は、http://www.osaka-birukyo.or.jp/からダウンロードし、作品に同封
作品受付　2010年9月1日(水)～9月10日(金)
作品提出　応募作品一式を郵送か、持参する
㈳大阪ビルディング協会
〒530-0012　大阪市北区芝田2-1-18
西阪急ビル　TEL06-6376-8212
審査　橋爪　紳也（大阪府立大学教授）
五十嵐太郎（東北大学教授）
服部　滋樹（graf代表）
福本　滋治（大阪ビルディング協会）
賞　最優秀賞1点50万円、
優秀賞5点以内各10万円

▶第3回『夏休み!　子ども絵画コンクール』

開発途上国の5歳未満児の1/3に当たる1億9500万人が栄養不良で発育阻害にあり、1億2900万人の子どもが低体重であると言われる反面、日本では多くの食べ物が廃棄されている。日本製粉㈱では、日本の子どもたちに食べ物の大切さや世界の子どもが置かれている状況を考えるきっかけになればと、㈶日本ユニセフ協会を通じて世界の子どもの支援活動を行っている。

テーマ　世界のみんなを招待しよう!「わたしたちのまちの楽しい食卓」
対象　日本国内の小学生
作品募集　必ず事前登録をした上で、2010年7月1日～9月15日に必着
審査　日本製粉㈱、㈶日本ユニセフ協会
発表　10月中旬にウェブサイトで受賞作品・受賞者名・学校名を発表
寄付　1作品につき100円を日本製粉㈱が㈶日本ユニセフ協会に寄付
問い合わせはnippn_sekainokodomo@dff.jp

▶“伝統構法の再生に向けて” KARTH公開勉強会

1998年に発足したKARTH（カース、関西木造住文化研究会）は、各地域固有の木造伝統住文化と、暮らしと安全性が両立した住まい・まちづくりを実現するための普及啓発活動に取り組んでいる。その一環としてKARTHでは、平成20年度から国が取り組んでいる「伝統的木造軸組構法住宅の設計法の開発」事業が目指す内容を踏まえ、7月に熟練伝統技能者からの提言を求めて公開勉強会を開く。

日時　2010年7月25日(日)15：00～18：30
会場　西陣蘗（ヒコバエ）ノ家
京都市上京区上立売通浄福寺西入ル
姥ケ東西町632
http://karth.blog13.fc2.com/
定員　50人（先着順）
参加費　1000円、学生無料
申込先　参加希望者は、名前・所属を明記して、メール(info@karth.sakura.ne.jp)、またはFAX（075-411-2725）で関西木造住文化研究会へ。申込締切は7月17日(土)。

●プログラム
①国の「伝統的木造軸組構法住宅の設計法開発」の取組が目指すもの／大江　忍・㈲ナチュラルパートナーズ代表
②熟練伝統技能者の大工棟梁による、伝統構法再生に向けた提言／木下孝一・数寄屋研究所心傳庵 大工棟梁
③意見交換―伝統構法の再生に向けて今、私たちは何をなすべきか／上記報告者＋大工棟梁・左官業・銘木問屋＋鈴木有（金沢工業大学名誉教授）＋長谷見雄二（早稲田大学）＋室﨑益輝（関西学院大学）＋田村佳英（悠計画研究所）ほか

▶色彩の抒情詩 脇田和展

1970年に完成したアトリエ山荘（建築家・吉村順三の設計）で、脇田和（1908～2005年）は97年の生涯をかけて、自分にしか描けない絵画の完成をめざした。脇田の絵の中の鳥は笑ったり、怒ったり、悪戯をしたりと人間的な姿で登場する。それは、人間の生活への愛情や、風刺を表現している場合が多い。

会期　2010年4月17日～11月24日(水)
10：00～17：00
会場　脇田美術館　電話0267-42-2639
長野県北佐久郡軽井沢町旧道1570-4
入館料　1000円、大高生600円、
中学生以下無料
出品　《日永》《鳥の日ごと》《黄熟》《花の中》《芽吹き》《人形と猫》ほか

▶三菱一号館美術館開館記念展「マネとモダン・パリ」

英国人建築家ジョサイア・コンドルが設計し1894年に竣工したレンガ組積造の建物が、丸の内のほぼ現位置に復元され、2010年4月に美術館としてオープンした。
開館記念展ではエドゥアール・マネの油彩、素描、版画80点余が回顧展の形で出品され、同時期に制作を重ねていた作家たちの作品も併設されている。


三菱一号館美術館


エドゥアール・マネ《すみれの花束をつけたベルト・モリゾ》
オルセー美術館、1872年
©RMN (Musée d'orsay)/ Hervé Lewandowski/ distributed by DNP artcom

会期　2010年4月6日～7月25日(日)
水・木・金 10：00～20：00
火・土・日・祝 10：00～18：00
月曜日は休館、ただし7/19は開館
会場　三菱一号館美術館
東京都千代田区丸の内2-6-2
入場料　1500円、高大生1000円、小中生500円
出品　マネの《すみれの花束をつけたベルト・モリゾ》《黒い帽子のマルタン夫人》《ラテュイユ親父の店》など。マックス・ベルトランの《1855年万国博覧会の産業館（断面図）》ほか
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶ようこそ恐竜ラボへ! 《化石の謎をときあかす》

林原自然科学博物館（岡山市）の協力を得て、恐竜研究のプロセスをテーマとした特別展が開かれる。
林原自然科学博物館はモンゴル科学アカデミーと共同で、ゴビ砂漠での恐竜発掘調査を18年間続けている。この発掘の作業、そして持ち帰った化石が研究される様子など恐竜研究の現場が展示され、「化石から恐竜をよみがえらせる興奮と感動」が伝わってくる。

会期　2010年7月10日～8月18日(水)
10：00～18：00、7/12のみ休館
会場　岡山市デジタルミュージアム
岡山市北区駅元町15-1
電話086-898-3000


ティラノサウルス

入場料　1000円、高大生・専門学校生800円、中学生から３歳まで500円
展　示　発掘現場の様子や、タルボサウルスの子ども、新種の鳥類など初公開のモンゴル産実物化石が見られる。
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶ボストン美術館展 西洋絵画の巨匠たち

エル・グレコ、ヴァン・ダイク、ベラスケス、レンブラント、コロー、ミレー、クールベ、ピサロ、マネ、ドガ、シスレー、セザンヌ、モネ、ルノワール、ゴッホ、ロートレック、マティス、ピカソ…。会場に居ながらにして、400年にわたる名画の歴史をたどることができる展覧会が、京都で始まった。
会　期　2010年７月６日～**８月29日**（日）
９：00～17：00
月曜日休館（ただし７/19は開館）
会　場　京都市美術館（岡崎公園内）
京都市左京区岡崎円勝寺町124
入場料　1500円、大高生1000円、中小生500円
展　観　《積みわら（日没）》《睡蓮の池》などモネ11点、ドガ《田舎の競馬場にて》、ルノワール《ガーンジー島の海岸の子どもたち》、ゴッホ《オーヴェールの家々》、エル・グレコ《祈る聖ドミニクス》など、全80点
■記念講演会（美術館講演室にて、参加無料。ただし、展覧会の入場券が必要）
７月17日（土）14：00～15：30
「エル・グレコ、ベラスケスと黄金世紀スペイン絵画」／大阪大学准教授・岡田裕成氏
７月31日（土）14：00～15：30
「ボストン美術館の19世紀フランス絵画―フォンテーヌブローの森からセーヌ河畔へ―」／東京大学教授・三浦篤氏
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。


クロード・モネ《アルジャントゥイユの自宅の庭のカミーユ・モネと子ども》1875年
photograph ©2010 Museum of Fine Arts, Boston

▶「奈良の古寺と仏像 ～會津八一のうたにのせて～」

東京で、平城遷都1300年記念して法隆寺、東大寺、薬師寺、唐招提寺、興福寺、西大寺、大安寺、室生寺など20寺院に伝わる飛鳥から室町時代の仏像46点・仏教工芸品19点（うち国宝３点、重要文化財45点）が展観される。
なお会場の一室には、奈良を愛した會津八一の歌書「若草山図あおによし」や初版本が展示され、仏像の美しさを引き立てている。


重要文化財
東大寺 菩薩半跏像（伝如意輪観音）
奈良時代　画像提供：奈良国立博物館

会　期　2010年７月７日～**９月20日**（月・祝）
10：00～17：00（ただし、毎土曜日、８/10～８/15、９/10～９/20は19：00まで）
月曜日と火曜日の７/20は休館（ただし７/19と９/20は開館）
会　場　三井記念美術館（三井本館７階）
東京都中央区日本橋室町2-1-1
入館料　1200円、大高生700円、中学生以下無料
展　示　国宝 法隆寺観音菩薩立像（夢違観音像）、国宝 室生寺釈迦如来坐像、重要文化財 西大寺塔本四仏像、重要文化財 唐招提寺如来形立像、国宝 西大寺金銅宝塔など
＊會津八一　昭和前期に歌人・書家・美術史家として活動する。新潟市に生まれ、1906年に早稲田大学文学科を卒業。27歳で初めて奈良を訪れ、古寺を巡りながら短歌に目覚めた八一は、すべて平仮名で表記する「放ち書き」の歌を生み出した。
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶「印象派とモダンアート」―サントリーミュージアム［天保山］で

「印象派」「20世紀の具象絵画」「20世紀の実験的美術」という３つの領域に焦点を当て、19世紀後半～20世紀後半のわずか100年の間に制作された多彩な作品が紹介される。


アンリ・ルソー《パッシイの歩道橋》
1895年　サントリーミュージアム［天保山］蔵

会　期　2010年７月10日～**９月20日**（月・祝）
10：30～19：30
休館日７/12、７/26、９/６、９/13
会　場　サントリーミュージアム［天保山］
大阪市港区海岸通1-5-10
入場料　1000円、高大生・60歳以上700円、小中学生500円
出　品　クロード・モネ《ウォータールー橋》、カミーユ・ピサロ《チュイルリー公園の午後》、オディロン・ルドン《花》、アルベルト・ジャコメッティの彫刻など約100点
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶ナポリ・宮廷と美 ―カポディモンテ美術館展


ティツィアーノ・ヴェチェッリオ《マグダラのマリア》
カポディモンテ美術館展

ファルネーゼ家が蒐集し、ブルボン家が引き継いだルネサンスからバロックまでの美術品―ティツィアーノ、パルミジャニーノ、コレッジョ、エル・グレコら―が日本に来た。
今回のナポリのカポディモンテ美術館展は、芸術の庇護者であった大貴族がどのような鑑識眼で美術品を蒐集し、宮殿に飾ったのか、あるいはイタリアの大美術館がどのようにして出来上がったのかということも、垣間見ることができる構成となっている。
会　期　2010年６月26日～**９月26日**（日）
９：30～17：30（金曜日は20：00まで）
月曜日休館（ただし７/19、８/16、９/20は開館）７/20、９/21は休館
会　場　国立西洋美術館（東京・上野公園）
東京都台東区上野公園7-7
入場料　1500円、大学生1200円、高校生700円、中学生以下無料
展　観　絵画47点、彫刻８点、工芸11点、デッサン14点
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

理事会

第2回常任理事会

5月19日（水）16：00～17：30
出席者　中井会長ほか5名
議　事（1）平成21年度事業報告（案）
（2）平成21年度収支決算報告（案）
（3）インターンシップ受け入れについての4団体協力について
（4）委員への入会依頼について

編集委員会

第2回編集委員会

5月12日（水）18：00～19：30
出席者　設楽委員長ほか6名
議　事（1）6月号特集「太陽光発電」の報告
（2）7月号特集「建築と石」の報告
（3）8月号特集「再生・受け継ぐ・繋がる」の報告
（4）9～12月号特集の企画
（5）各小委員会・分科会の報告
（6）その他
（7）収支状況報告

第2回法令分科会

5月17日（月）15：00～17：15
出席者　近都委員ほか5名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）10月号法令特集の企画
（3）情報交換

第2回施工材料分科会

5月11日（火）17：00～18：00
出席者　吉田正友幹事ほか5名
議　事　11月号特集「LED」企画テーマと企画構成検討

第2回構造分科会

5月7日（金）18：00～20：00
出席者　石田幹事ほか5名
議　事（1）「構造の頁」の企画
（2）12月号構造特集の企画

第2回設備分科会

5月11日（火）18：00～20：30
出席者　赤澤幹事ほか9名
議　事（1）6月号「太陽光発電」特集原稿の査読
（2）「設備の頁」の企画

第2回作品作風小委員会

5月27日（木）19：00～20：00
出席者　池上副委員長ほか8名
議　事（1）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（2）「gallery」掲載報告・予定

第2回広告企画小委員会

5月12日（水）17：00～18：00
出席者　設楽委員長ほか4名
議　事（1）6月号特集「太陽光発電」
（2）7月号特集「建築と石」
（3）8月号特集「再生・受け継ぐ・繋がる」
（4）広告掲載状況の報告
（5）収支状況の報告
（6）その他

第2回10年委員会

5月13日（木）18：30～20：00
出席者　設楽委員長ほか5名
議　事（1）現場見学会案内チラシの内容確認
（2）大阪そうせい（創生）プロジェクトの今後の進め方

出版委員会

第2回出版委員会

5月20日（木）18：00～19：20
出席者　上原委員長ほか7名
議　事（1）プロのノウハウと特装本の経過報告
（2）進行中のテーマ
（3）その他

事業委員会

第2回情報見学小委員会

5月14日（金）18：00～18：40
出席者　瀬戸川委員長ほか10名
議　事　本年度事業案

特別委員会

第11回　群　像

5月19日（水）13：30～18：00
出席者　米津　正臣（インタビュアー）ほか3名
議　事　関西の建築界「群像」登場者の人間像に迫るためのインタビュー
㈱齋藤正毅工房　齋藤正　氏

見学会

「上本町YUFURA（上本町新歌舞伎座ビル）」見学会

5月26日（水）13：30～15：30
講　師　辰巳清一氏／㈱日本設計
吉田博次氏／大林組・錢高組・淺沼組・森本組共同企業体工事事務所長
参加者　26名
出席者　瀬戸川委員長ほか6名

入会者（敬称略）

〔団体正会員〕
三和式ベンチレーター㈱
学校法人中央工学校 中央工学校OSAKA
〔個人正会員〕
伊丹　康二　大阪大学大学院
小川　禄仙　㈱日建設計
河合　止揚　アトリエリベラ河合止揚写真事務所
三木　哲也　三木コーポレーション
三井　祐介　㈱日建設計

●訃報

〔名誉正会員〕
上林　博雄 氏　平成22年3月17日逝去　享年89歳

□訂正とおわび

本誌6月号に、下記の誤りがありました。

―研究の風景頁、大学名―
（誤）東京首都大学
（正）**首都大学東京**

関係各位にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

暑中お見舞申し上げます

平成22年盛夏

岡 本 慶 一
日 建 設 計
代表取締役社長
〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4－6－2 TEL(06)6203-2361

立 成 良 三
財団法人 大阪住宅センター
理事長
住宅保険、評価、住宅情報相談、住宅展示場他
〒542-0081 大阪市中央区南船場4－4－3 心斎橋東急ビル4F
TEL(06)6253-0071 FAX(06)6253-0145

藤 井 實
エスケー化研 株式会社
代表取締役社長
〒567-0034 茨木市中穂積3－5－25 TEL(072)621-7720

香 西 喜八郎
株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長
〒541-0044 大阪市中央区伏見町4－4－10 TEL(06)6202-0391

立 野 純 三
株式会社 ユニオン
代表取締役社長
〒550-0015 大阪市西区南堀江2－13－22 TEL(06)6532-3188

宮 本 博 司
株式会社 宮本工務設計事務所 創立65年 ISO9001 認証取得
代表取締役
〒665-0022 宝 塚 市 野 上 1 － 2 (宮本ビル)
TEL(0797)71-0431(代) FAX 71-5139(受)
大阪支店・神戸支店

近 藤 徹
不二熱学工業 株式会社
代表取締役
〒542-0081 大阪市中央区南船場2－1－1 TEL(06)6261-4321

長谷川 博
株式会社 大林組 大阪本店
専務執行役員 大阪本店長
〒540-8584 大阪市中央区北浜東4－33 TEL(06)6946-4578

林 新 一
社団法人 日本建築協会
常務理事兼事務局長
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 TEL(06)6946-6981

名誉会長
佐 野 正 一
株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役相談役
〒540-0034 大阪市中央区島町2－4－7 TEL(06)6943-1371代

会長
中 井 進
日 建 設 計
取締役副社長
〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4－6－2 TEL(06)6203-2361

佐 野 吉 彦
株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長
〒540-0034 大阪市中央区島町2－4－7 TEL(06)6943-1371代

辻 文 三
財団法人 日本建築総合試験所
理事長
〒565-0873 吹田市藤白台5－8－1 TEL(06)6872-0391
http://www.gbrc.or.jp

編集委員長
設 楽 貞 樹
株式会社 安井建築設計事務所
常務取締役
〒540-0034 大阪市中央区島町2－4－7 TEL(06)6943-1371代

沼 田 亘
株式会社 昭和設計
代表取締役社長
〒552-0007 大阪市港区弁天1－2－1－800 TEL(06)6575-5555

暑中お見舞申し上げます

平成22年盛夏

設計事務所有志

株式会社 伊藤建築設計事務所

取締役会長　織田愈史
代表取締役社長　森口雅文

本社・名古屋事務所　〒460-0002 名古屋市中区丸の内1－15－15（桜通ビル）TEL（052）222-8611
東京事務所　〒101-0021 東京都千代田区外神田3-5-12（聖公会神田ビル）TEL（03）5294-6211

株式会社 瀬戸本淳建築研究室 ISO9001

代表取締役　瀬戸本淳

〒650－0024 神戸市中央区海岸通1－1－1 神戸郵船ビル　TEL（078）333－0138
http://www.jsao.co.jp

株式会社 東畑建築事務所

代表取締役社長　香西喜八郎

本社　〒541-0044　大阪市中央区伏見町4-4-10　TEL（06）6202-0391
大阪・東京・名古屋・九州・東北・上海
http://www.tohata.co.jp

日建設計

代表取締役社長　岡本慶一

東京	102-8117	東京都千代田区飯田橋2－18－3	TEL（03）5226-3030
大阪	541-8528	大阪市中央区高麗橋4－6－2	TEL（06）6203-2361
名古屋	460-0008	名古屋市中区栄4－15－32	TEL（052）261-6131

安井建築設計事務所

代表取締役社長　佐野吉彦

本社　〒540－0034　大阪市中央区島町2-4-7　TEL（06）6943－1371（代表）
支社　大阪・東京・名古屋・広島・九州　http://www.yasui-archi.co.jp/

100年をつくる会社

鹿島
KAJIMA CORPORATION

本　　社：東京都港区元赤坂1丁目3番1号
関西支店：大阪市中央区城見2丁目2番22号・マルイトOBPビル
電話06（6946）3311
http://www.kajima.co.jp/

子どもたちに誇れるしごとを。

清水建設株式会社

取締役社長　宮本　洋一　　取締役専務執行役員関西事業本部長　小橋　鴻三

本　　社　〒105-8007　東京都港区芝浦一丁目2番3号　シーバンスS館　Tel. 03 (5441) 1111
関西事業本部　〒541-8520　大阪市中央区本町三丁目5番7号　御堂筋本町ビル　Tel. 06 (6263) 2800

大地への愛　人間への愛

銭高組

社長　銭高一善

本　　店　大阪市西区西本町2－2－11
なにわ筋ツインズ　ウエスト
TEL (06) 6531－6431
本　　社　東京都千代田区一番町31番地
TEL (03) 3265－4611
支社・支店　大阪・東京・北海道・東北・北関東・千葉
横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州
URL　http:// www. zenitaka. co. jp/

地図に残る仕事。

TAISEI　大成建設株式会社

社　　長　山内隆司
専務関西支店長　久保博司
http : // www. taisei. co. jp/

株式会社 竹中工務店

取締役社長　竹中統一

〒541-0053　大阪市中央区本町4－1－13　TEL（06）6252-1201（代表）

戸田建設株式会社

代表取締役社長　井　上　舜　三
常務執行役員大阪支店長　今　井　雅　則

本　　社　〒104-8388　東京都中央区京橋1－7－1　　TEL 東京03(3535)1354
大阪支店　〒550-0005　大阪市西区西本町1－13－47　　TEL 大阪06(6531)6095
支　　店　東京・千葉・関東・横浜・北陸・名古屋・札幌・東北・広島・四国・九州・国際

建材・報道・学校・団体有志等

大阪工業技術専門学校
OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

建築学科・建築学科Ⅱ部(夜間)・建築実務学科(午前)・建築設計学科・建築設備学科・大工技能学科・インテリアデザイン学科・建築士専科

〒530-0043　大阪市北区天満1丁目8番24号　0120-0910-19　http://www.oct.ac.jp/　Tel. 06-6352-0091

創業55周年

日報

建設業界でもっとも信頼　読まれている日刊情報紙

株式会社　建　設　日　報　社

社主　重　村　　一

〒550-0006 大阪市西区江之子島1－6－2　TEL(06)6444－2405

NKK

社団法人　日本建築材料協会

会長　藤　井　　實

〒550-0002　大阪市西区江戸堀1-4-23 撞木橋ビル4階　　TEL(06)6443-0345　FAX(06)6443-0348
http://www.kenzai.or.jp/

社団法人　日本建築協会京都支部

支部長　上　林　研　二

〒604-0944　京都市中京区押小路通柳馬場東入 京都建設会館別館 TEL(075)211-2857

社団法人 日本建築協会中国支部

支部長　森畑　武

〒732-0048　広島市東区山根町28番22号　下岸建設株式会社内　TEL（082）264-0709

社団法人 日本建築協会東海支部

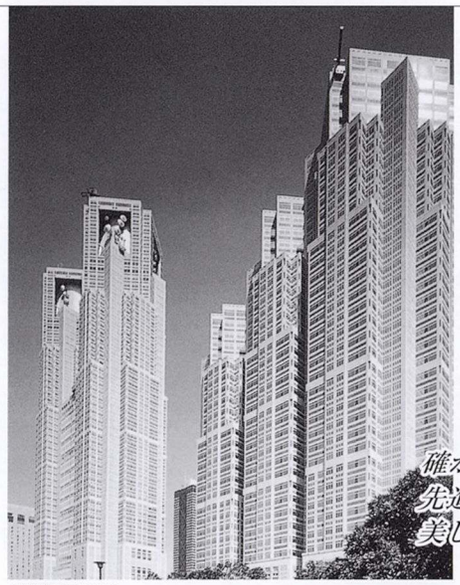
支部長　佐伯　博

〒460-0008　名古屋市中区栄4－3－26（昭和ビル5階）　TEL（052）261-1451

社団法人 日本建築協会

会長　中井　進

〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31　TEL（06）6946-6981


東京都第二本庁舎


アンビエンテ南青山

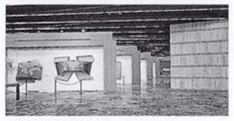

椿山荘

確かな技術と
先進の設備を駆使して
美しさの極限を追求。

幅広いニーズに応える
石材のパイオニアとして、
知的空間、やすらぎ空間を
未来へ伝えます。


電通新本社ビル


横浜ランドマークタワー


横浜ビジネスパーク

株式会社　安藤大理石

本社　〒140-0013　TEL（03）3765−1114　FAX（03）3765−1117
東京都品川区南大井6丁目24番10号カドヤビル3F

岐阜工場（生産事業部）
岐阜営業所
〒503-2323　TEL（0584）27−1114　FAX（0584）27−4341
岐阜県安八郡神戸町西保120

札幌営業所
〒003-0830　TEL（050）3525−1875　FAX（011）874−9570
北海道札幌市白石区菊水元町十条1−6−5　アリコベール　A-205

東北営業所
〒981-3133　TEL（022）772−2333　FAX（022）773−5433
宮城県仙台市泉区泉中央1−12−5　エクセルメトロⅠ−1F

中部営業所
〒503-2323　TEL（0584）28−0712　FAX（0584）28−0713
岐阜県安八郡神戸町西保120

大阪営業所
〒570-0025　TEL（06）4250−7733　FAX（06）4250−7711
大阪府守口市竜田通2−5−8　アリーナ守口201

北関東営業所
〒331-0822　TEL（048）668−2652　FAX（048）668−5289
埼玉県さいたま市北区奈良町136−51−4−404

長年の経験と技術で
石建材の確かな品質と
満足を提供する

セキガハラの仕事

経験と技術
責任を持って難しい
仕事を納める

情　熱
より美しい魅力的な
製品を送り出す

経済的
原動力
提案とコストダウン

商品群
- 建築用石材全般
- 光触媒外装石建材「ハイドロストーン」
- 石材表面処理剤「セキストーンコート」
- エクステリア、造園用石材販売
- 石材モニュメント制作・施工
- 石材取り付け金物設計・制作

地球素材
SEKISTONE
総合建築石材メーカー

関ヶ原石材株式会社 大阪支店
〒534-0021　大阪市都島区都島本通4-20-26
http://www.sekistone.com
TEL 06—6922—7661
FAX 06—6925—7059



日本の近代建築史とともに際立つ技術・際立つ美しさ

SINCE 1901

YABASHI

矢橋大理石株式会社

□本　　社　岐阜県大垣市赤坂町273　TEL.0584-71-1211

□大阪支店　大阪府枚方市西禁野1-16-1-101　TEL.072-805-5490

（社）日本建築協会から

ご入会のおさそい

建築に関連する各種の活動を行っている日本建築協会に、ご入会になりませんか！
会員は、建築関係の幅広い分野（設計事務所、ゼネコン、官公庁、教育・研究機関、メーカーなど）から個人や団体が参加し、活動しております。21世紀の建築界発展のために、またあなた自身が異業種の方々と交流され、社外ネットワーク形成に役立てていただくことも可能です。
※建築に興味をお持ちの方ならどなたでもご入会いただけます（資格は問いません）。

●会員の特典

★ユニークで新鮮な内容を誇る会誌「建築と社会」が毎月配布されます。
★話題の建築物、一般では未公開の施設等の見学会や建築関係の著名な講師の講演会・講習会に会員割引で優先的に参加できます。
★協会所蔵の貴重な図書・資料の閲覧等ができます。
★会誌「建築と社会」に建築作品、研究報告、レポート、ニュース等を投稿できます。
★青年技術者の顕彰に応募できます。
★協会の各種委員会活動に参画し、様々な情報交換・社外交流の場として利用できます。

●入会申し込み方法

当会ホームページ（http://www.aaj.or.jp）の入会申込み画面に記入送信するか、入会申込フォームをプリントアウトし、FAXまたは郵送にて、下記あてお送りください。

〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル7階
㈳日本建築協会
Eメールアドレス：soumu@aaj.or.jp
TEL：06-6946-6981　　FAX：06-6946-6984

会員の種別と会費

会員の種別			会　費
正会員	個人正会員	本部および支部地域	年額 14,400円
		上記以外の地域	年額 12,600円
	団体正会員		年額 25,000円／口
学生会員			年額　8,400円

「建築と社会」誌

特集一覧●1988~2009

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統—東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装 リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明 ＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店 創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店 建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化—設計の多様化をめざして—＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営緒の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり—I—	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくりーII— ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木—構造技術の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語—人がかわる、まちがかわる—	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン—東海支部—＊	●建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	●木構造を使ってみませんか—集成材による構造—＊	●接着—建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」 ＊	●屋台一仮設の魅力に学ぶ— ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所 創立60周年 記念作品集	●大阪府営緒	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境—限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生—構造技術の役割— ●大阪市営緒	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境—人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと設	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって—会員作品 ＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美—建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界 ＊	●音—騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化 ＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法—会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江—その地方振興と文化 ＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり ＊	●東海支部会員作品 ●金沢・建築—風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会—80人の眼—＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興—法・制度の運用と新たな展開へ— ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA ＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法—会員作品—	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所 創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州—諏訪とその周辺—	●街並みの演出—最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備—ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98—21世紀に向けて	●ゆれをとめる—たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●"らしさ"のデザイン ●建築を綾どる小勢なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃—街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法—まちづくり・すまいづくりへの展開—	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア—都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部—しまなみ海道と中国地方の街づくり—	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山—地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る—測定方法と測定結果が意味するもの—	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法—パートII—	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ—わざ、もの、こころ—	●時間	●私の空間作法—会員作品— ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境—近未来に向けて今できること— ●大建設計—作品特集1996~2001—	●建築の力都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法—会員作品—	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心—パート2—	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●濱町リバープレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて～サステナブルエンジニアリングの現在～	●私の空間作法—会員作品—	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所 創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋—この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える—	●サスティナビリティー～次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン～	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン—インテリアから発信するまちなみ—	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー～建築の主観的価値について～	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法—会員作品—	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」＊	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯～心地よさを求めて～	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法—会員作品—	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ＊	●私の空間作法—会員作品—	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくり～	●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊	●都市再生の本質～光と影のはざまで～	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギー～エネルギーをたくわえ、有効利用する～	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心＊	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…～構造が未来へつなぐ夢～	●私の空間作法—会員作品—
2007 vol.88	●光り輝く京都の景観まちづくり	●学校新時代	●東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作	●創立90周年記念—この10年、これからの10年	●あそび考	●こだわりが創る住まいのカタチ	●住まいの設備と空間の移り変わり	●建築系雑誌が伝えるもの	●建築基準法等大改正	●第54回青年技術者	●ガラスを考える	●楽しい構造の世界
2008 vol.89	●私の空間作法—会員作品—	●PFI事業、その後	●東海支部会員作品2008＋東海支部特集3部作	●まちづくり2011年宣言	●新ホテル物語	●設備に役立つ地震対策	●中国地方を訪ね歩いて見えるもの ●小林聖心女子学院	●建築と景観	●第55回青年技術者	●木造住宅を巡って	●建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	●自然と戦う構造
2009 vol.90	●私の空間作法—会員作品— ●京阪電車 中之島線—着彩彩弧/沖之島新時代—	●水の都 にぎわいのある未来に向けて	●東海—TOKAIオムニバス	●楽しい福祉	●体感するインテリア	●建築空間が求める空気環境（空気質）	●建築と水	●実用レベルで展開される施工管理のIT化	●第56回青年技術者	●地域の歴史資産を活かしたまちづくり	●第16回会員作品特集"私の空間作法"	●構造家日記～頭の中をのぞいてみたら～

＊は欠号

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業　ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業　SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作

株式会社NPGコーポレーション

本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代)　fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代)　fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1 一光浜松町ビル7F
tel:(03)3433-5211(代)　fax:(03)5776-7733
（旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱）

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181



私たちが、あなたの夢、応援します。

日建学院

資格講座・法定講習 開講一覧

建設関連

1級建築士
2級建築士
構造設計1級建築士
1級建築施工管理技士
2級建築施工管理技士
建築設備士
1級土木施工管理技士
2級土木施工管理技士
1級舗装施工管理技術者
2級舗装施工管理技術者
1級管工事施工管理技士
2級管工事施工管理技士
1級造園施工管理技士
2級造園施工管理技士
コンクリート技士
コンクリート主任技士
給水装置工事主任技術者
測量士補
1級エクステリアプランナー
2級エクステリアプランナー
1級電気工事施工管理技士
第二種電気工事士
第三種電気主任技術者

実務関連

建築構造計算
木造（2階建）構造設計
環境・設備（小規模建築物）
Auto-CAD
JW-CAD
ISO14001内部監査員

不動産・経営関連

宅地建物取引主任者
土地家屋調査士
ファイナンシャルプランナー

その他

秘書検定2級
秘書検定3級
eco検定

法定講習

□建築士定期講習
□宅建登録講習
□宅建実務講習
□(株)日建学院 実施
◇監理技術者講習
◇マンション管理士法定講習
◇実施協力

Ready GO 日建学院

＊
たくさんの素敵な笑顔が咲くように。
私たちはここにいます。頑張る人を応援しています。
これまでも、これからも、達成の笑顔が私たちの誇りです。

建設関連資格試験 累計合格者数＊85万人突破

実績 ＊平成21年12月末日現在までの累計数 ＊11万2761人の一級建築士 15万6592人の二級建築士 7万9809人の宅地建物取引主任者を輩出

大阪校 Tel.06-6306-5001
梅田校 Tel.06-6377-1055
京橋校 Tel.06-4801-5001
なんば校 Tel.06-4708-0445
枚方校 Tel.072-843-1250
堺校 Tel.072-228-6728
岸和田校 Tel.072-436-1510

お近くの日建学院をご利用ください。